
金融テクノファシズムの教科書
第2巻
～金融ファシズムと「同意の偽装工作」
――「自発的同意」という嘘が、あなた
の尊厳と財産と命を奪う～
Soul-Selling Failed Fascists
金融科技法西斯主义教科书
HOMELESS
VETERAN
PLEASE HELP
オリオンヴェイル 著

金に魂を売った失敗作ファシスト

～金融ファシズムと同意の偽装工作―「自発的同意」という嘘が、あなたの尊厳と財産と命を奪う～

第 2 巻

オリオンヴェイル  著

Copyright ©OrionVeil 
All rights reserved.

本書の無断転載・複製・配信を禁じます。

目次

まえがき……10

第 4 部：金融ファシズム――通貨危機とナチスの飢餓作戦からファシズムの培養器まで……13

第 22 章　嬉々として他国の破壊を語る狂人エリートたち……13

第 22 章 1 節　イラン戦争で明らかになった政権転覆工作……13
第 22 章 2 節　ベッセント財務長官が通貨崩壊を起こした事を自慢……15
第 22 章 3 節　イーロンがスターリンクで暴動を支援……21
【ベネズエラも同じ】……24
第 22 章 4 節　なぜ嬉々として他国を破壊する事を語るのか？……27
第 22 章 5 節　なぜ 6〜7 割の米国民が反対するイラン戦争を強行したのか？……28

第 23 章　イランで起きた「経済 DV」の全貌……30

第 23 章 1 節　なぜ通貨崩壊が「一発も撃たずにミサイル以上の成果」を生むのか？……30
第 23 章 2 節　なぜ通貨崩壊が起きたのか？……31
【ナチス飢餓計画】……31
第 23 章 3 節　経済デモが政権転覆の暴動に発展する仕掛け……33
第 23 章 4 節　ベネズエラでも同じ経済 DV の手口が使われていた……37
【自分達が経済制裁されても気付かないマヌケな日本国民】……38

第 24 章　「2 つのタイプ」――なぜ金融業界には搾取側が多いのか？……40

第 24 章 1 節　アメリカの主権者はアメリカ国民じゃない？……40
第 24 章 2 節　アメリカの政治は民主主義ではなく富裕層が支配している……40
第 24 章 3 節　なぜ？――ルールを守る人とズルをする人の分岐点……41
第 24 章 4 節　なぜズルをしてでも“必ず”勝とうとするタイプが多いのか？……42
第 24 章 5 節　なぜ金融業界に「搾取側」が集まりやすい構造……44

第 25 章　選民思想の形成――「自分たちは特別だ」という免責のイデオロギー……47

第 25 章 1 節　なぜ？――「能力・富・市場での勝敗」による自己選民化……47
第 25 章 2 節　ルールは愚かな凡人を縛るための「道具」……47
第 25 章 3 節　なぜ？――「非情の哲学」が成功条件として美化される……48
第 25 章 3 節 1 項　優しい先輩 vs. 非情な先輩――出世の分岐点……49
第 25 章 3 節 2 項　ビッグモーター――「非情の哲学」が極限まで進んだファシズム職場…50
第 25 章 3 節 3 項　なぜ「非情なファシスト男」が急増するのか？……52

第 26 章　弱者・女性の搾取と「優しい人」への嫌悪――自己正当化の心理 53

第 26 章 1 節　なぜ？――弱者の搾取が「当然」と思う心理メカニズム 53
第 26 章 2 節　金融業界に深く入り込んでいる「マノスフィア思想」 54
第 26 章 2 節 1 項　マノスフィアの「言語」は金融市場の言語 55
第 26 章 2 節 2 項　暗号資産と密接なマノスフィアインフルエンサー 56
第 26 章 2 節 3 項　女性を「獲物としてみる」金融業界の「兄弟会文化（Boys' Club）」 56
第 5 章 2 節 4 項　マノスフィア思想の起源は金融業界の「兄弟会的文化」 58
第 26 章 3 節　なぜ？――「優しい人」に激しい嫌悪を感じる理由 58

第 27 章　搾取側になる条件――「勝ち組」への道は「人間性の崩壊」と表裏一体 61

第 27 章 1 節　なぜ？――搾取側になるための「入門条件」 61
第 27 章 2 節　なぜ？――搾取的行動が「英雄」として称賛される文化 62

第 28 章　他国経済崩壊を喜ぶ心理――「強者の証」という錯覚 65

第 28 章 1 節　なぜ？――「嬉々として」他国崩壊を語るのか？ 65
第 28 章 2 節　内面の空虚の埋め合わせと「権力の麻薬」 68

第 29 章　なぜ反撃を恐れず「自分は安全だ」と信じられるのか？ 73

第 29 章 1 節　なぜ？――軍事・情報・金融の複合体が「無敵感」を生む 73
第 29 章 2 節　なぜ？――「ゲーム」として楽しめる心理プロセス 74
第 29 章 3 節　トランプの私兵の ICE 75
第 29 章 4 節　全てを揉み消すパランティアの予測警察システム 77
第 29 章 5 節　FBI や CIA が揉み消してくれる 79
第 29 章 6 節　捕まらないだけでなく、ボロ儲けできる情報の非対称性が生む「ゼロサム利益」 80
第 29 章 6 節 1 項　具体的に「神の目」でどう儲けるのか？ 80
第 29 章 6 節 2 項　①どの株が必ず暴騰するか――「先読み」の利益 81
第 29 章 6 節 3 項　②誰も知らない資源の眠る場所――「土地と資源」の先取り 82
第 29 章 6 節 4 項　③戦争と再建計画――「破壊と建設」の二重取り 82
第 29 章 6 節 5 項　④大統領恩赦の免罪符販売――「司法の商品化」 83
第 29 章 6 節 6 項　⑤負けそうな極右政党への支援――「恩を売る」投資 84
第 29 章 6 節 7 項　なぜこれが「ゼロサム」なのか？ 84

第 30 章　金融システムとファシズム化――民主的統治の空洞化 87

第 30 章 1 節　なぜ？――銀行が「陰で支える」金融制裁がファシズムを生む 87

第 30 章 2 節　金と食料と職を管理支配する金融エリートによる「現代の飢餓作戦」 88
第 30 章 2 節 1 項　ナチスの飢餓作戦――「手を汚さずに殺す」という発明 88
第 30 章 2 節 2 項　なぜ、失業者が増え、物価が上がり、家を失う人が増えているのか？ ... 89
第 30 章 2 節 3 項　なぜ、4200 万人が食料支援を失ったのか？ 90
第 30 章 2 節 4 項　なぜ、2000 万人が医療保険を失ったのか？ 91
第 30 章 2 節 5 項　なぜ、富裕層は国民を救済しないのか？ 92
第 30 章 2 節 6 項　なぜ、ガザのような大量餓死が起きるのか？ 93
第 30 章 2 節 7 項　思考停止で自滅する愚かな人たち 94
第 30 章 3 節　イタリアの判例「貧しくて食べ物を盗んだら、罪になるのか？」 95
第 30 章 3 節 1 項　日本の現実――数百円の万引きでも逮捕される 95
第 30 章 3 節 2 項　イタリアの判例――「生存の権利は財産権に優先する」 96
第 30 章 3 節 3 項　食料が不足するほどの困窮は政治と権力の責任である 97

第 31 章　エコーチェンバーとファシズム化――SNS が過激化を加速する 99

第 31 章 1 節　なぜ？――MAGA のプロパガンダマシンはどうやって作られるのか？ 99
第 31 章 2 節　「嘘やデマ」で稼ぐビジネスモデルの全貌 100
第 31 章 3 節　なぜ？――エコーチェンバー内で「ファシズム」が完成するのか？ 101
第 31 章 4 節　エコーチェンバー内で段階的にファシストに変貌する心理メカニズム 102
第 31 章 5 節　第 1 段階：入口――「居場所」と「承認」を求めて 102
第 31 章 6 節　第 2 段階：敵の定義を学ぶ――「リベラルは敵」という世界観 103
第 31 章 7 節　第 3 段階：極右コンテンツへの移行――アルゴリズムが過激化を加速する 104
第 31 章 8 節　第 4 段階：ダーク・テトラッドの顕在化――「英雄」として称賛される快感 105
第 31 章 9 節　第 5 段階：道徳的免責の確立――「奴らは人間ではない」 106
第 31 章 10 節　第 6 段階：政治的暴力への支持――「やまゆり事件」のような虐殺も肯定する 107
第 31 章 11 節　第 7 段階：ファシズム化――「独裁こそが正義」と信じる 108

第 32 章　MAGA が自滅的な政策を支持していた仕組み 110

第 32 章 1 節　金融エリートの思考回路の内面化 110
第 32 章 2 節　「人種的優越感」が物質的貧困を補償する 111
第 32 章 3 節　「不公平を公正と信じる」システム正当化 112
第 32 章 4 節　「動機づけられた推論」が信念を守る 112
第 32 章 5 節　「認知的不協和」が支持を撤回できなくする 113
第 32 章 6 節　「エリートの分断統治」が不満をそらす 114
第 32 章 7 節　具体的な政策事例――「自業自得」の連鎖 115

第 33 章　おわりに：金融エリートの思考回路がファシズム国家を実現した 117

第 33 章 1 節　誰が、どのようにして、世界中の人を苦しめているのか？ 117
第 33 章 2 節　なぜ、巨悪は免責されるのか？ 118
第 33 章 3 節　なぜ、庶民が望まない戦争が起きるのか？ 119
第 33 章 4 節　ファシズムの資金的・思想的・組織的メカニズム 120
第 33 章 5 節　エコーチェンバーは、普通の若者をファシストに変える培養器 121
第 33 章 6 節　それでも真実を選んだ人がいる――アシュリー・セント・クレアの勇気 122
第 33 章 6 節 1 項　MAGA を離脱する者への嫌がらせ 122
第 33 章 6 節 2 項　それでも真実を選んだ勇気 123
第 33 章 6 節 3 項　本当の強さとは何か？ 124

第 5 部：同意の偽装工作――「自発的に同意した」という嘘が、あなたの尊厳を奪う 126

第 34 章　「戦争を支持する」おかしな国民の正体は何なのか？ 126

第 35 章　「同意の偽装工作」とは何か？――見えない脅しの正体 129

第 35 章 1 節　「同意の偽装工作」と普通の脅しの違い 129
第 35 章 2 節　「同意の偽装工作」を卑劣だと感じる理由 130
第 35 章 3 節　「同意の偽装工作」はどんな状況で使われるのか？ 130
第 35 章 4 節　なぜ被害者は「脅迫として説明できない」のか？ 131

第 36 章　具体的な事例――「同意の偽装工作」はこうして作られる 133

第 36 章 1 節　事例①：特攻隊の「志願」――周囲が志願するフリをして、断れなくする 134
第 36 章 2 節　事例②：「鬼畜米英」とスパイ・レッテル――敵を作って同調圧力を強める 138
第 36 章 3 節　事例③：芸能・AV 業界――同調圧力でヌードや AV 出演に追い込む 139
第 36 章 4 節　事例④：統一協会の念書とビデオ――「自発的献金」に見せる工作 140
第 36 章 5 節　事例⑤：集団レイプ――「同意書」まで書かせて「自発的」に見せる 141
第 36 章 5 節 1 項　事例⑤-1：日本の集団レイプ事件 141
第 36 章 5 節 2 項　事例⑤-2：フランスの集団レイプ事件 143
第 36 章 5 節 3 項　事例⑤-3：日本の集団レイプ事件 144

第 37 章　加害の全体構造――なぜ集団だと加害者を特定できないのか？ 146

第 37 章 1 節　集団犯罪の加害者特定の困難さ 146
第 37 章 2 節　ネットリンチの加害者特定の困難さ 147
第 37 章 3 節　集団による「同意の偽装工作」の演出手順 147
第 37 章 4 節　集団による「同意偽装工作」の役割分担 149
第 37 章 5 節　「同意の偽装工作」はテロ被害と同じ 150

第 38 章　「無理矢理 YES」と言わせる支配設計――性行為における同意の偽装 152

第 38 章 1 節　「同意の偽装工作」が、性行為に悪用されるとどうなるか？ 153
第 38 章 2 節　「性同意偽装工作」の手口 154
第 38 章 3 節　「性行為における同意の偽装工作」の悪質さを段階表で理解する 156
第 38 章 4 節　「性同意偽装の段階表」の被害の深刻さは？ 157

第 39 章　加害者の悪質性段階――支配欲の強い男を見抜く目安 159

第 39 章 1 節　加害者の悪質さを見抜く段階表 160
第 39 章 2 節　段階表で注意すべきなのは？ 161
第 39 章 3 節　意外と加害者は「道徳」を悪用する 162

第 40 章　道徳的偽善――「敬虔な信徒」の仮面の下で 163

第 40 章 1 節　なぜファシストは道徳や宗教を前面に押し出すのか？ 164
第 40 章 2 節　トランプ政権の道徳的偽善 165
第 40 章 3 節　安倍政権の道徳的偽善 166
第 40 章 4 節　なぜ「ダブルスタンダード」が平気になるのか？ 167
第 40 章 5 節　MAGA を脱退すると偽善者たちが脅迫してくる構造 169
【真実を語ること選ぶ】 170

第 41 章　世界中にバレた日本人の道徳的偽善の嘘 172

第 41 章 1 節　日本にも蔓延する「日本すごい」と「道徳的偽善」 172
第 41 章 2 節　日本にも蔓延する「道徳的偽善」の具体的事例 173
第 41 章 3 節　なぜ「道徳的偽善」が日本中に蔓延するのか？ 175
第 41 章 4 節　日本国内で「道徳的偽善」を語りながら搾取している具体事例 176
第 8 章 4 節 1 項　事例①：技能実習生のパスポート没収と奴隷的労働――「国際貢献」の名の下の搾取 177
第 8 章 4 節 2 項　事例②：技能実習生への性的暴行――「同意していた」という偽装 178
第 41 章 5 節　海外で「道徳的偽善」を語りながら少女から搾取している具体事例 179
第 41 章 5 節 1 項　事例①：SNS 上での「戦果」自慢と隠語――「少女が自ら応じた」という物語の捏造 180
第 41 章 5 節 2 項　事例②：「指南書」の流通――搾取を「マニュアル化」する免罪符 181
第 41 章 5 節 3 項　事例③：医師や教師という立場を利用した買春――「ただの趣味」という自己正当化 182
第 41 章 5 節 4 項　事例④：YouTuber による斡旋――「道徳的偽善」をビジネス化する 183
第 41 章 6 節　まとめ：道徳的偽善が搾取の免罪符になる構造 184
第 41 章 7 節　なぜ最も道徳的に欠如したファシストが道徳を語るのか？ 186

第 42 章　「同意の偽装工作」に騙されないために……188

第 42 章 1 節　「同意の偽装工作」に騙されないためには？……188
第 42 章 2 節　「同意の偽装工作」の被害に遭っていたら？……188
第 42 章 3 節　卑劣なファシストは「反省しない」……189

あとがき……192

注釈・参考文献……194

参考文献……194
統計・調査出典……194

著者プロフィール……196

まえがき

本書を手に取っていただき、ありがとうございます。

なぜ金融エリートは戦争をしたがるのか？

なぜ彼らは他国の経済を意のままに崩壊させ、それを「成果」として誇るのか？

そして、その金融エリートの思考回路はどのようにして普通の若者をファシストに変えていくのか？

2025 年 12 月 28 日、イランの通貨リアルが突如として暴落しました。1 ドル＝70 万リアルだった相場が、2026 年 1 月には 150 万リアルにまで下落し、わずか数週間で価値が半分以下になったのです。テヘランのバザール商人たちが市場を閉鎖し、抗議デモが全国に広がりました。

これは、当初は生活が苦しくなった市民が政府に抗議する当然のものでした。庶民の気持ちはわかる当然のデモなので、当初は政府も容認していました。

しかし、このデモは年明けの 1 月に入ってから急速に様相を変えました。武装した暴徒が治安部隊や民間人を殺害し、モスクに放火し「イランの王党派の国旗とともにイスラエルの国旗が翻る光景が確認されるようになった」のです。

アメリカのスコット・ベッセント財務長官は、自ら堂々と「アメリカが仕掛けた」と認めています。イランに「ドル不足」を人為的に作り出し、通貨を暴落させ、銀行を破綻させ、国民を路上に追い出したと公言し、これを「経済的国策（economic statecraft）」と呼び、「一発も撃たずにミサイル攻撃以上の成果を上げた」と誇らしげに語ったのです。

本書の第 4 部では、この「金融ファシズムの全貌」を、歴史的な文脈と具体的なデータとともに解き明かしていきます。

そして、その金融エリートたちの選民思想や思考回路がどのようにエコーチェンバーの中で増幅され、普通の若者を MAGA のようなファシストに変えていくのか？――その心理メカニズムを元 MAGA の証言などを元に仕組みを解説して「**西側の金融エリートたちが作り出すファシズムの真の仕組み**」を追っていきます。

さらに本書の第 5 部では、性被害を訴えた被害者に対して、「相手から誘った」「同意していた」「ハニトラだ」というデマや嘘の物語（ナラティブ）を流し、あたかも「被害者が自発的に行為に及んだかのように見せる」―この「同意の偽装工作」についても解き明かします。

同じ手口は、いじめや職場のパワハラ、AV 出演被害などでも使われています。いじめでは、加害者たちが口裏を合わせて「あいつが先に殴った」と証言し、被害者を孤立させます。職場のパワハラでは、「本人が自主的に残業していた」と記録を書き換え、被害届を握りつぶします。AV 出演被害では「自分から望んで出演した」と契約書や撮影現場での「はい」を証拠として使い、断れば違約金や「親にばらす」と脅して黙らせます。

いずれも、集団で囲い込み、逃げ場をなくし、形だけの「同意」を作り出し、それを「本人が望んだこと」として既成事実化する手口です。そして、あなたが「自分が悪かったのかもしれない？」と真剣に悩んで後悔している間に、加害者たちは「ほら、本人も同意していたじゃないか」と嘲笑っているのです。

実は、これは、慰安婦や徴用工を「自発的に従事していた」と歴史を改ざんしてきた手法と、まったく同じ構造です。一部の自発的な事例を誇張し、その他多くの強制を隠蔽し、被害者を「自ら望んだ」ことにして黙らせる。過去の被害者も、今のあなたも、同じ手口で黙らせられようとしているのです。

なぜ、こんな理不尽がまかり通るのか？ なぜ、あなたが黙らされなければならないのか？ なぜ、加害者たちは罪を認めず、謝らず、それでも平然と生きていられるのか？

その答えは、80 年前の大日本帝国が使っていた手法と、驚くほど似ています。そして、現代の AI と SNS が、その手口をかつてないほど巧妙に、かつ見えにくくしているのです。

この本は、騙されてしまったアナタを責めるためのものではありません。

加害者に加担して役立たない日本の専門家の解説じゃなく、被害者のアナタが「自分は悪くない」との確信を持ち、支配の構造や仕組みを的確に見抜き、そこから抜け出すためのものです。

2026 年 9 月

オリオンヴェイル 

注釈・参考文献

参考文献

1. 藤原辰史『食権力の現代史――ナチス「飢餓計画」とその水脈』

2. 内藤朝雄著『いじめの構造――なぜ人が怪物になるのか』（光文社新書、2009年）

3. サンドラ・ヘフェリン『体育会系　日本を蝕む病』光文社新書、2020 年 2 月

4. 田中芳樹『銀河英雄伝説』

統計・調査出典

5. 住友商事グローバルリサーチ「イラン通貨リアル暴落分析」2025 年 12 月

6. クイニピアック大学全国世論調査「イラン戦争への参加支持」2025 年 6 月

7. ゴールドマン・サックス性差別訴訟和解：2023 年 11 月、2 億 1500 万ドル、約 2,800 名の女性が対象

8. ビッグモーター社内パワハラ：2023 年発覚、47 人降格処分、「教育教育教育 死刑死刑死刑」LINE

9. トランプ恩赦ビジネス：『ウォール・ストリート・ジャーナル』2025 年 12 月 25 日報道

10. SNAP 削減：2025 年「One Big Beautiful Bill Act」、1870 億ドル削減、SNAP 史上最大規模

11. オバマケア補助金失効：2025 年 12 月 31 日、2000 万人以上が影響、保険料 114%上昇ケース

12. 日テレ NEWS「米で医療保険料が高騰」2026 年 1 月 10 日

13. イタリア最高裁判決「生存の権利は財産権に優先する」2016 年

14. 読売新聞「カンボジア女性 3 人「実習先の農園経営者から性暴力」…賠償求め提訴」2024 年 12 月 16 日

15. 弁護士ドットコム「ラオスで日本人男性が「少女買春」容疑で逮捕報道」2026 年 4 月 10 日

16. ユーチュラ「タイ在住の日本人 YouTuber に児童買春・斡旋疑惑」2026 年 4 月 4 日

17. 厚生労働省「2025 年日本政府年次報告『強制労働に関する条約（第 29 号）』に対する意見」2025 年 7 月 24 日

18. 文春オンライン「中には「9 歳」の記録も…児童買春か、逮捕の 66 歳 メモ帳に 140 人以上東南アジアの少女の年齢や名前を記載」

19. AV 出演被害防止・救済法（令和 4 年法律第 78 号）

著者プロフィール

OrionVeil（オリオンヴェイル）

OrionVeil（オリオンヴェイル）

数年前から、日本の民主主義が破壊され、パワハラや独裁化が横行するようになったことに疑問を抱き、カルトと教育、社会構造などについて個人的に研究している者です。

独自のカルトのマインドコントロール技術情報や、教育や日本社会に与えた悪影響などの研究成果をお届けします。

処女作「イジメの構造の新教科書シリーズ」第 1 巻〜第 9 巻では、これまで勘違いされていた「イジメの本当の構造を明らか」にしています。それに続く第 2 弾のシリーズとして、「12.3 韓国クーデター事件簿シリーズ」第 1 巻〜第 3 巻では、韓国で起きたクーデター未遂事件と、カルトの公教育への侵入を描いています。そして、第 3 弾のシリーズとして「女性の日常を壊す憎悪テロ“マノスフィア”入門シリーズ」第 1 巻〜第 7 巻では、世界中で水面下で進行している「女性の権利や自由を奪い、女性を奴隷化しようとする」ファシズム思想の一種である「マノスフィア」という現象や組織について、詳しく解説しています。

そして今回、第 4 弾のシリーズとして「金に魂を売った失敗作ファシストシリーズ」を刊行しました。

金に魂を売った失敗作ファシスト

〜金融ファシズムと同意の偽装工作―「自発的同意」という嘘が、あなたの尊厳と財産と命を奪う〜

第 2 巻

2026 年 9 月 28 日　初版第 1 刷発行

著　者　オリオンヴェイル

発行者　オリオンヴェイル

©OrionVeil

All rights reserved.

本書の一部または全部を著作権法の定める範囲を超えて
無断で複製・転載・配信することを禁じます。

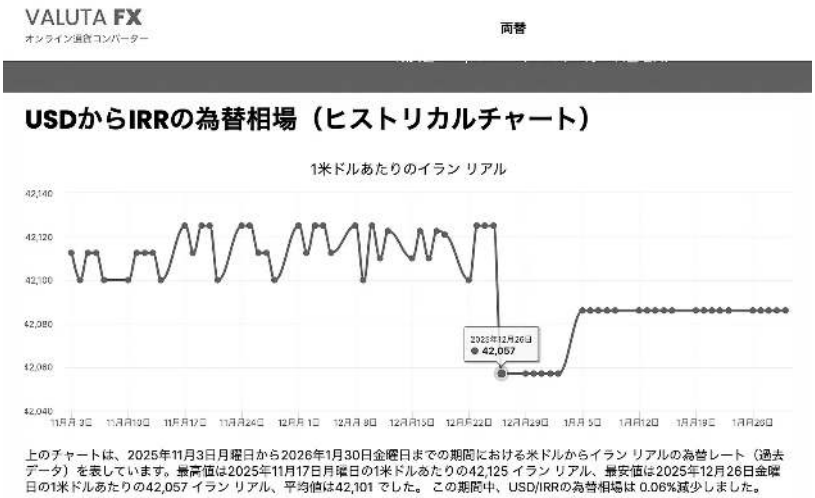
第 4 部：金融ファシズム―通貨危機とナチスの飢餓作戦からファシズムの培養器まで

第 22 章　嬉々として他国の破壊を語る狂人エリートたち

第 22 章 1 節　イラン戦争で明らかになった政権転覆工作

2025 年 12 月 28 日、イランの通貨リアルが突如として暴落しました。

1 ドル＝70 万リアルだった相場が、2026 年 1 月には 150 万リアルにまで下落し、わずか数週間で価値が半分以下になったのです。



テヘランのバザール商人たちが市場を閉鎖し、抗議デモが全国に広がりました。これは、生活が苦しくなった市民が政府に抗議する当然のもので、最初は「物価高と通貨安に抗議する平和的なデモ」でしたし、イラン政府も市民の当然の権利だと抗議デモ容認していました。



ところが、このデモは年明けの 1 月に入ってから急速に様相を変えました。武装した集団が治安部隊や民間人を殺害し、モスクに放火し、イランの国旗とともにイスラエルの国旗が翻る光景が確認されるようになったのです。

昼間はまともなイラン国民による体制支持デモ、夜中は外国の支援を受けた政権転覆デモ――という構図が明らかになりました。



第 22 章 2 節　ベッセント財務長官が通貨崩壊を起こした事を自慢

では、なぜこんなことになったのでしょうか？

実は答えは驚くほど明確です。

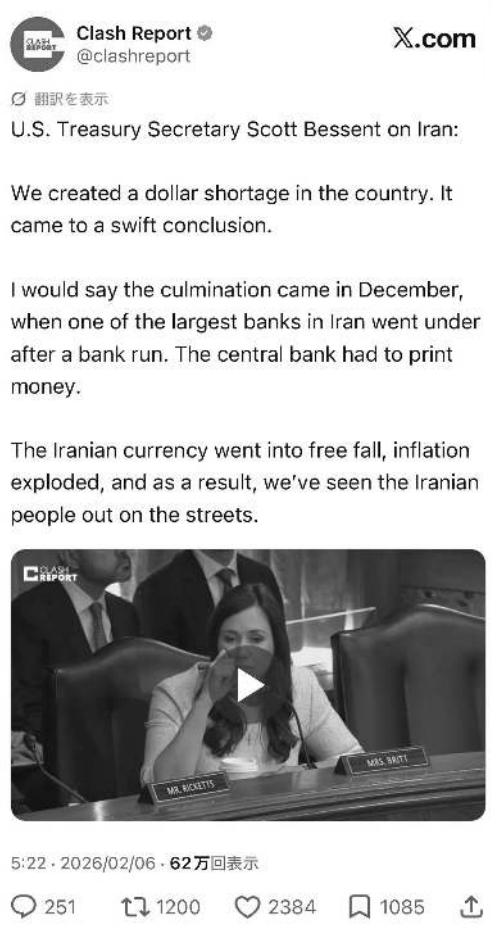
アメリカのスコット・ベッセント財務長官が、自ら堂々と「アメリカが仕掛けた」と認めているからです。



あまりに衝撃的な話ですが、意のままに「通貨崩壊」を起こして、他国民を経済困窮で苦しめることができるのです。ベッセント長官はイランに「ドル不足」を人為的に作り出し、通貨を暴落させ、銀行を破綻させ、国民を路上に追い出したと公言しました。しかもこれを「経済的国策（economic statecraft）」と呼び、「一発も撃たずにミサイル攻撃以上の成果を上げた」と誇らしげに語ったのです。

以下にレポートや資料を示しておきます。





アメリカ財務長官スコット・ベッセント氏によるイランに関する発言：

私たちはその国でドル不足を引き起こしました。それは急速に終結しました。
私は、12 月にイラン最大手の銀行の一つが取り付け騒ぎの後に破綻した時点で、事態が頂点に達したと言います。中央銀行は通貨を印刷せざるを得ませんでした。
イラン通貨は急落し、インフレが爆発的に上昇し、その結果、私たちはイラン国民が街頭に出るのを目撃しました。

Al Mayadeen English
@MayadeenEnglish

X.com

Grokによる英語からの翻訳

米国財務長官スコット・ベッセントは、イランに対する制裁を経済戦争の一形態として公然と位置づけ、1発の銃弾も撃たずにすでに#Iranの経済を崩壊寸前に追い込んだと主張した。

制裁が実際に効果を上げているかどうかについての質問に対し、ベッセントは、ドナルド・#Trump大統領が命じた#USTreasuryの措置がイランで急速な金融崩壊を引き起こしたと述べ、通貨の崩壊、大手銀行の破綻、ドル不足、そして中央銀行が紙幣印刷に頼らざるを得なくなった状況を挙げた。

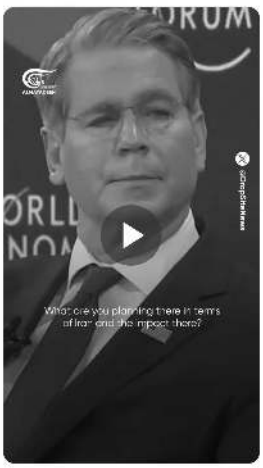
彼はこれらの圧力を、イランの街頭抗議に直接結びつけ、それがまもなく西側支援の武装暴動に発展したと指摘し、この戦略を「経済的国家戦略」と呼び、「非常に肯定的な」結果を生み出していると表現した。

数年前なら、このような主張をした者は、西側主流メディアから即座に「体制擁護者」や陰謀論者とレッテルを貼られ、無視されていただろう。

今日では、米当局自身がこれを公然と口にしている。仮面が剥がれ落ち、米国の覇権モデルが、善意ある「ルールに基づく秩序」という神話から遠くかけ離れた姿を露呈している。

制裁はもはや政府を標的にするものとしてさえ位置づけられず、社会を崩壊させ、不安を煽り、銃弾1発も撃たずに政治的結果を強制するための意図的な経済戦争として描かれるようになり、リベラルなレトリックによってかつて慎重に隠されていたアメリカ権力の強制的本質がむき出しになっている。

この翻訳を評価:



8:00 · 2026/01/25 · **1938**回表示

1 20 26 4

Al Mayadeen English
@MayadeenEnglish

X.com

翻訳を表示

US Treasury Secretary Scott Bessent openly framed sanctions on Iran as a form of economic warfare, arguing they have already driven #Iran's economy to the brink without a single shot being fired.

Responding to questions about whether sanctions actually work, Bessent said #USTreasury measures ordered by President Donald #Trump triggered a rapid financial breakdown in Iran, citing a collapsing currency, a major bank failure, a shortage of dollars, and the central bank resorting to printing money.

He linked these pressures directly to Iran's street protests, which soon turned to armed riots backed by the West, describing the strategy as "economic statecraft" that is producing "very positive" results.

A few years ago, anyone making this argument would have been instantly dismissed by the Western mainstream media as a so-called "regime apologist" or conspiracy theorist.

Today, US officials are saying it out loud themselves. The mask is slipping, revealing a model of US hegemony that is far removed from the myth of a benevolent "rules-based order."

Sanctions are no longer even framed as targeting the government, but as deliberate economic warfare designed to collapse societies, fuel unrest, and coerce political outcomes without firing a shot, laying bare the coercive core of American power once carefully obscured by liberal rhetoric.



8:00 · 2026/01/25 · **1938**回表示

1 20 26 4

米国財務長官スコット・ベッセントは、イランに対する制裁を経済戦争の一形態として公然と位置づけ、1 発の銃弾も撃たずにすでに#Iran の経済を崩壊寸前に追い込んだと主張した。

制裁が実際に効果を上げているかどうかについての質問に対し、ベッセントは、ドナルド・#Trump 大統領が命じた#USTreasury の措置がイランで急速な金融崩壊を引き起こしたと述べ、通貨の崩壊、大手銀行の破綻、ドル不足、そして中央銀行が紙幣印刷に頼らざるを得なくなった状況を挙げた。

彼はこれらの圧力を、イランの街頭抗議に直接結びつけ、それがまもなく西側支援の武装暴動に発展したと指摘し、この戦略を「経済的国家戦略」と呼び、「非常に肯定的な」結果を生み出していると表現した。

数年前なら、このような主張をした者は、西側主流メディアから即座に「体制擁護者」や陰謀論者とレッテルを貼られ、無視されていただろう。

今日では、米当局自身がこれを公然と口にしている。仮面が剥がれ落ち、米国の覇権モデルが、善意ある「ルールに基づく秩序」という神話から遠くかけ離れた姿を露呈している。

制裁はもはや政府を標的にするものとしてさえ位置づけられず、社会を崩壊させ、不安を煽り、銃弾 1 発も撃たずに政治的結果を強制するための意図的な経済戦争として描かれるようになり、リベラルなレトリックによってかつて慎重に隠されていたアメリカ権力の強制的本質がむき出しになっている。

また、イランの長年の貧困もアメリカの経済制裁のせいでした。

つまり、衝撃的な事実かと思いますが、イラン国民の餓死や困窮や経済崩壊や通貨崩壊は、世界の金融を牛耳るアメリカが、意図的に狙って破壊していたから起こっていたものでした。

Al Mayadeen English
@MayadeenEnglish

X.com

Grokによる英語からの翻訳

#イランの経済危機は突然のものではありませんでした。それは何十年にもわたって意図的に作り出されたものです。

#米国主導の制裁は、銀行業務、貿易、エネルギー輸出を標的にし、イランを世界の金融システムから体系的に孤立させ、石油収入を絞め上げ、外国為替を枯渇させました。

国際決済へのアクセスが消滅し、石油販売が高コストの裏ルートに強制される中、イラン・リアルは長期的な崩壊に入りました。

インフレが急騰し、輸入品が手が届かなくなり、普通のイラン人にとって日常生活がますます厳しくなりました。

これが「最大限の圧力」の論理でした：不確実性を生み出し、資本逃避を煽り、通貨を弱体化させ、経済的苦痛を政治的てこに変えるのです。

この翻訳を評価:



4:38 · 2026/01/25 · **3.7万**回表示

53 361 724 129

Al Mayadeen English
@MayadeenEnglish

X.com

翻訳を表示

#Iran's economic crisis wasn't sudden; it was engineered over decades.

#US-led sanctions targeting banking, trade, and energy exports systematically isolated Iran from the global financial system, strangled oil revenues, and starved the country of foreign currency.

As access to international payments vanished and oil sales were forced through costly backchannels, the Iranian rial entered a prolonged collapse.

Inflation surged, imports became unaffordable, and everyday life grew harder for ordinary Iranians.

This was the logic of "maximum pressure": create uncertainty, fuel capital flight, weaken the currency, and turn economic pain into political leverage.



4:38 · 2026/01/25 · **3.7万**回表示

53 361 724 129

#イランの経済危機は突然のものではありませんでした。それは何十年にもわたって意図的に作り出されたものです。

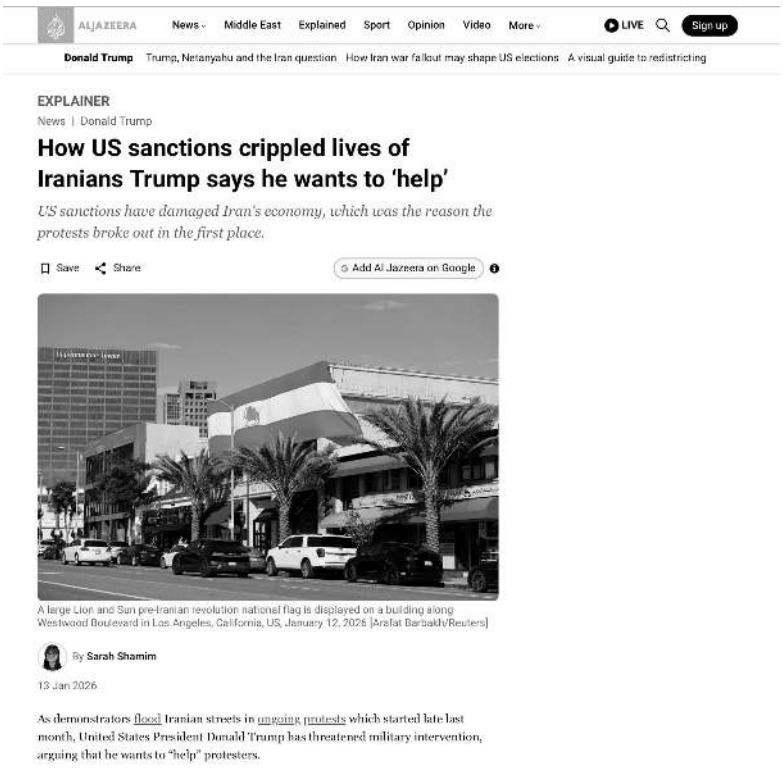
#米国主導の制裁は、銀行業務、貿易、エネルギー輸出を標的にし、イランを世界の金融システムから体系的に孤立させ、石油収入を絞め上げ、外国為替を枯渇させました。

国際決済へのアクセスが消滅し、石油販売が高コストの裏ルートに強制される中、イラン・リアルは長期的な崩壊に入りました。

インフレが急騰し、輸入品が手が届かなくなり、普通のイラン人にとって日常生活がますます厳しくなりました。

これが「最大限の圧力」の論理でした：不確実性を生み出し、資本逃避を煽り、通貨を弱体化させ、経済的苦痛を政治的てこに変えるのです。

また、アルジャジーラの詳しいレポートは以下をご覧下さい。



【記事】How US sanctions crippled lives of Iranians Trump says he wants to 'help'

【YouTube Video】通貨崩壊させたことを自慢気に語るベッセント米国財務長官

第 22 章 3 節　イーロンがスターリンクで暴動を支援

さらに衝撃的な事実が明らかになりました。

イスラエルのベネット元首相が 2026 年 6 月 23 日、エルサレムで開かれた JNS 国際政策サミットの壇上で、イランの反政府デモ参加者を支援するため、スターリンクの衛星インターネット受信機をイラン国内に密かに持ち込む計画があったことを自ら明らかにしたのです。

ベネット氏は「暴徒たちが互いに連絡を取り合い、最終的にイラン政府を打倒できるようにするためだった」と語り、「残念ながら、現在のイスラエル内閣はこの計画を途中で止めてしまった」と不満を露わにしました。

これは推測でも陰謀論でもありません。アメリカとイスラエルの高官が自ら認めている「公式な事実」なのです。

ベッセント財務長官は 2025 年 3 月のニューヨーク経済クラブでの講演で、イラン経済を破壊する計画を明らかにし、「イランを再び貧しくする（make Iran broke again）」と宣言していました。

そして 2026 年 2 月の上院銀行委員会での証言では、自らの行動がイランのドル危機を引き起こし、大規模な抗議デモを誘発したと認めたのです。



以下に資料を示しておきます。

The Cradle
@TheCradleMedia
X.com

Grokによる英語からの翻訳

元イスラエル首相、イスラエルがイランにStarlink機器を密輸したと語る

元イスラエル首相ナフタリ・ベネット氏は火曜日、イスラエルが反政府デモ参加者を支援するためイランにStarlinkインターネット機器を密輸することに成功したと述べたが、この取り組みはベンヤミン・ネタニヤフ首相の政権によって完全に実行されなかったと主張した。

ベネット氏はエルサレムで開催されたJNSインターナショナル・ポリシー・サミットでの聴衆に対し、「イランに数万台のStarlink受信機を調達し密輸するプロセスを開始した。それらはインターネットとソーシャルネットワークの継続性を可能にするものだ」と語った。

ベネット氏は、この機器は暴徒が通信し、イラン政府を打倒するのを助けるためのものだったと述べた。

「残念ながら、現在の無能なイスラエル政府がそれを止めてしまった」と彼は言った。「そして抗議が起こった時、そのインフラは存在しなかった。」

この翻訳を評価:



20:22 · 2026/06/23 · 1.4万回表示

2 71 98 21

The Cradle
@TheCradleMedia
X.com

翻訳を表示

Former Israeli PM says Israel smuggled Starlink devices into Iran

---

Former Israeli prime minister Naftali Bennett said on Tuesday that Israel had managed to smuggle Starlink internet devices into Iran to support anti-government protesters, but claimed the initiative was not fully carried out by Prime Minister Benjamin Netanyahu's administration.

Bennett told an audience at the JNS International Policy Summit in Jerusalem that he had begun a "process of acquiring and smuggling into Iran tens of thousands of Starlink receptors that would allow continuity of the internet and social networks."

Bennett said the equipment was meant to help rioters communicate and bring down the Iranian government.

"Unfortunately, the current incompetent Israeli government stopped doing that," he said. "And when the protest happened, that infrastructure was not there."



20:22 · 2026/06/23 · 1.4万回表示

2 71 98 21

元イスラエル首相、イスラエルがイランに Starlink 機器を密輸したと語る

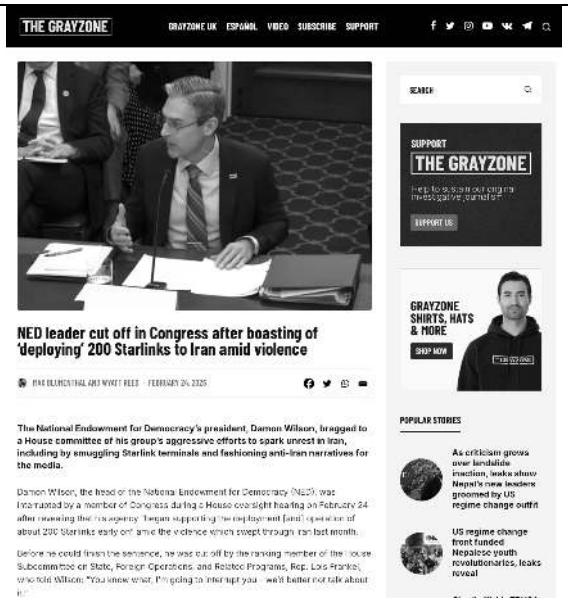
元イスラエル首相ナフタリ・ベネット氏は火曜日、イスラエルが反政府デモ参加者を支援するためイランに Starlink インターネット機器を密輸することに成功したと述べたが、この取り組みはベンヤミン・ネタニヤフ首相の政権によって完全に実行されなかったと主張した。

ベネット氏はエルサレムで開催された JNS インターナショナル・ポリシー・サミットでの聴衆に対し、「イランに数万台の Starlink 受信機を調達し密輸するプロセスを開始した。それらはインターネットとソーシャルネットワークの継続性を可能にするものだ」と語った。

ベネット氏は、この機器は暴徒が通信し、イラン政府を打倒するのを助けるためのものだったと述べた。
「残念ながら、現在の無能なイスラエル政府がそれを止めてしまった」と彼は言った。「そして抗議が起こった時、そのインフラは存在しなかった。」

民主主義国民基金の指導者、暴力の中イランに 200 のスターリンクを「展開」したと自慢した後、議会で発言を遮られる米情報機関のカバー企業の社長は、イランが同団体の最優先目標だと述べた

完全レポートはこちら



【記事】NED leader cut off in Congress after boasting of 'deploying' 200 Starlinks to Iran amid violence



【ベネズエラ🇻🇪も同じ】

2026 年 1 月 3 日に突如米軍がベネズエラ🇻🇪に侵攻し、マドロゥ大統領を拉致した戦争もありましたが、あのような戦争をトランプ大統領に依頼するのは米国の石油開発企業だったりする訳です。



因みに、トランプ政権第１期の時にもベネズエラの軍にクーデターを起こさせようとした事件がありました。この時は不発に終わりましたが、当時の国務長官のマイク・ポンペオと国家安全保障問題担当の大統領補佐官だったジョン・ボルトンがクーデターを促すツイートが以下のものです。



このように、皆さんが知らないあるいは、気づいていない間に、米国は密かに自分たちに従わない資源国や政権に対して、経済制裁や経済崩壊や通貨崩壊、軍事クーデターや政権転覆テロを仕掛けてきたのです。

日本人も困窮化して生活が苦しい？それは、夫が妻に経済 DV していると生活が苦しいように、日本政府が国民に経済制裁や経済 DV を仕掛けているか

らです。日本でも、自分たちは裏金や中抜きや贈収賄で不正や犯罪をして蓄財をして、権力を握り、一方で生活保護叩きをして、困窮者を精神的にも経済的にも追い詰める政治家やネトウヨがいますよね？そう言う卑劣で卑怯な人たちを念頭に置いて、アメリカの金融エリートの話を読み進めてみて下さい。

第 22 章 4 節　なぜ嬉々として他国を破壊する事を語るのか？

ここで、素朴な疑問が湧きます。

Q.なぜ一国の財務長官が、他国の経済を意図的に崩壊させ、市民を困窮させ、暴動を煽ることを「自慢」できるのでしょうか？

Q.人道的に明らかに問題がある行為を、なぜ「嬉々として」語れるのでしょうか？



第 22 章 5 節　なぜ 6〜7 割の米国民が反対するイラン戦争を強行したのか？

そしてもう一つの疑問です。

アメリカ国民の大多数は、イランとの戦争に反対していました。



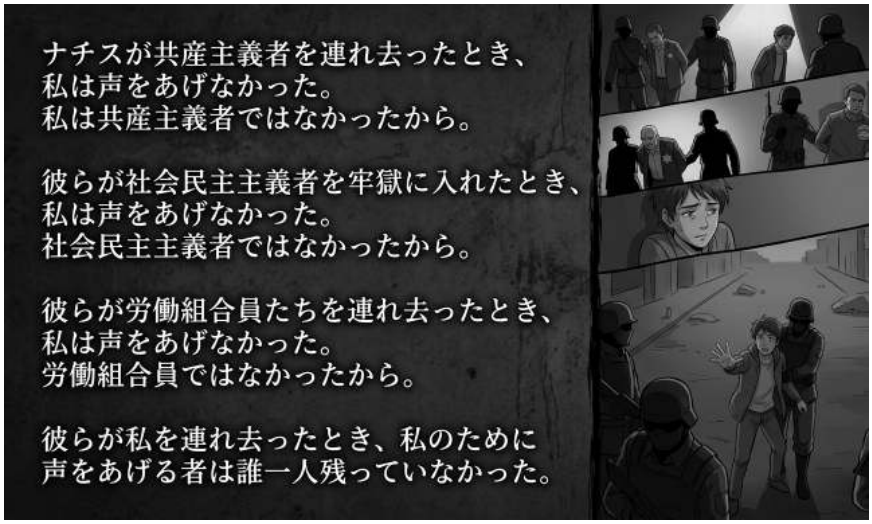
2025 年 6 月のクイニピアック大学の全国世論調査によれば、51%がアメリカがイスラエルとともにイランへの軍事攻撃に加わることに反対し、42%が賛成でした。YouGov とエコノミストの調査では、60%のアメリカ人がイスラエルのイラン戦争への参加に反対し、賛成はわずか 16%でした。にもかかわらず、JP モルガンのジェイミー・ダイモン CEO は「イラン戦争は短期的にはリスクだが、長期的には中東和平の可能性を高める」と戦争を擁護し、「イランは政権発足当初から悪意ある行為者だった」と述べています。

【YouTube Video】JP モルガンのダイモンがイラン戦争を支持する

Q.なぜ国民の大多数が反対する戦争を、金融エリートたちは支持するのか？

この記事では、この問いを出発点に、金融エリートの思考回路と価値観がどのように選民思想に結びつき、最終的にファシズムへと至るのか？を、心理メカニズムと変化過程を追いながら解き明かしていきます。これはファシズムの起

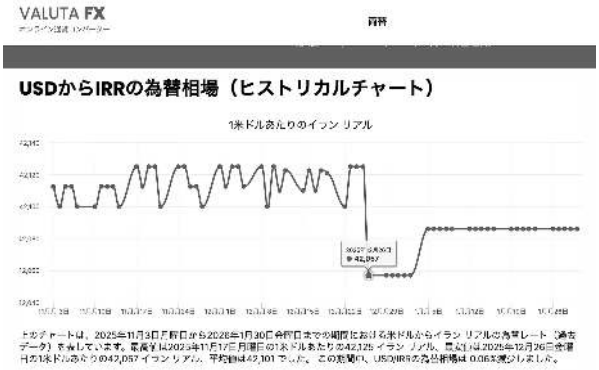
源を探る上でも重要だと思います。特に、ファシズムがなぜか？共産主義者や労組を狙って弾圧するのを理解する上でも重要だと思います。



第 23 章　イランで起きた「経済 DV」の全貌

第 23 章 1 節　なぜ通貨崩壊が「一発も撃たずにミサイル以上の成果」を生むのか？

まず、イランで実際に何が起きたのかを時系列で見ていきましょう。



2025 年 12 月 28 日、イラン通貨リアルが急落しました。住友商事グローバルリサーチのレポートによれば、リアル相場は年末にかけて下落ペースを加速させ、闇市場では 1 米ドル＝約 141 万リアルと過去最安値を更新。過去 1 年間での下落率は 7 割を超え、食料品価格は前年比平均 66%以上、品目によっては 70%超上昇しました。インフレ率は前年同月比 42.2%に達し、中央銀行総裁が引責辞任に追い込まれました。



第 23 章 2 節　なぜ通貨崩壊が起きたのか？

Q.では、なぜリアルはこんなに暴落したのでしょうか？

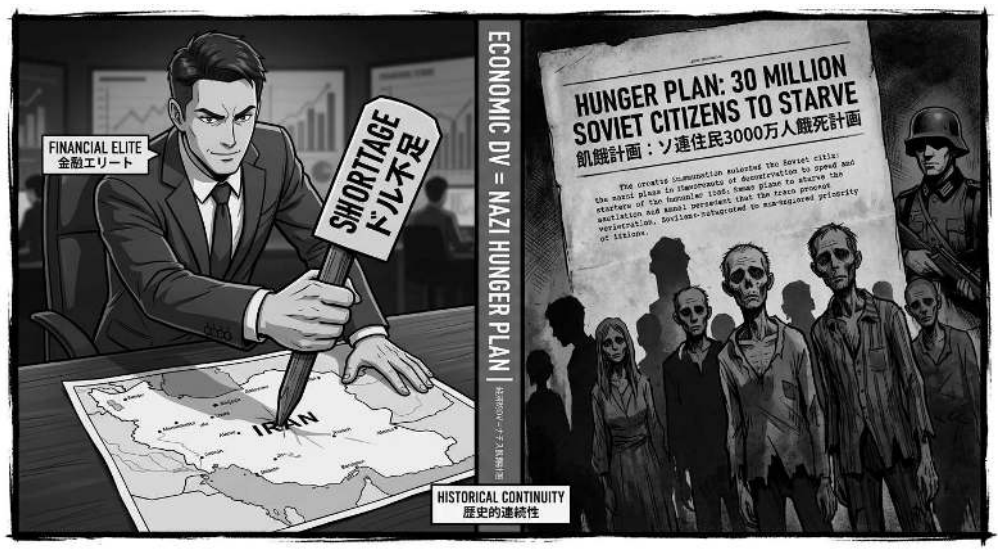
ここが核心です。ベッセント財務長官は、アメリカが意図的にイランに「ドル不足」を作り出したと認めています。

石油輸出のあらゆる段階を標的にし、銀行システムへのアクセスを完全に遮断し、「二次制裁」の脅しで世界中の銀行にイランとの取引を拒否させたのです。

ベッセント財務長官の議会証言：
「我々はイランに極端なドル不足を引き起こした。これが通貨リアルの暴落、銀行の破綻、そして街頭への抗議デモにつながった。」

これは「経済制裁」というよりも、「経済 DV（ドメスティック・バイオレンス）」と呼ぶべきものです。

相手の生活基盤を根本から破壊し、逃げ場をなくし、服従を強要する――国家規模で行われている DV なのです。あるいは、「現代版のナチスの飢餓作戦」と呼ぶべきものです。



【ナチス飢餓計画】

ナチスの飢餓作戦については、藤原辰史の著書を読んでみて下さい。

簡単に内容紹介をしておきます。

藤原辰史『食権力の現代史――ナチス「飢餓計画」とその水脈』は、食料の生産・流通・分配を握る権力が人の生死を左右する「食権力」という概念を軸にした歴史論考です。

本書は、飢餓が自然現象ではなく社会・制度・政治が意図的に作り出す政治的暴力であることを、第一次世界大戦からナチスの飢餓計画、そして現代のガザ封鎖までを貫いて示します。

ナチスが特に共産主義者の大量虐殺を計画し、ソ連住民 3000 万人の餓死を計画し、実際に捕虜約 330 万人を餓死させた事実を克明に追いながら、その論理が植民地支配や現代の食料支配に連続していることを明らかにします。著者は、食料を絶つことが最も手を汚さず効率的な支配手段であり、権力者はそれを天災や自己責任として隠蔽してきたと指摘します。

飢餓を他人事や過去の悲劇ではなく、現代社会と私たち自身の共犯性を問い直す一冊です。



【書籍】藤原辰史「食権力の現代史: ナチス「飢餓計画」とその水脈」

第 23 章 3 節　経済デモが政権転覆の暴動に発展する仕掛け

そして、通貨崩壊が引き金となって起きた抗議デモに、外部の諜報機関が乗り込みました。イスラエルのベネット元首相が認めたように、スターリンク端末がイラン国内に密かに持ち込まれ、暴動グループの調整に使われていました。イラン革命防衛隊がインターネットを遮断すると、CIA とモサドの工作員がスターリンクを使って暴徒に指示を出していたのです。

しかし、イランはロシアから購入した電子戦システム「トボル」でスターリンクの信号を追跡し、発信源を特定。

暴動を煽っていたテロリストたちを一斉に逮捕した結果、2026 年 1 月 11 日には抗議活動が 90%減少したのです。

つまり、2026 年 1 月に起きたイラン国内の暴動は、イーロン・マスクとイスラエルや CIA が計画したものだったのです。







🇺🇸アメリカ大統領がイランの「平和的な抗議者」たちに演説しました。そのうちの１人が写真に写っています。どう思いますか？





アメリカとイスラエルが支援するイランでの反乱参加者たちに対して、彼

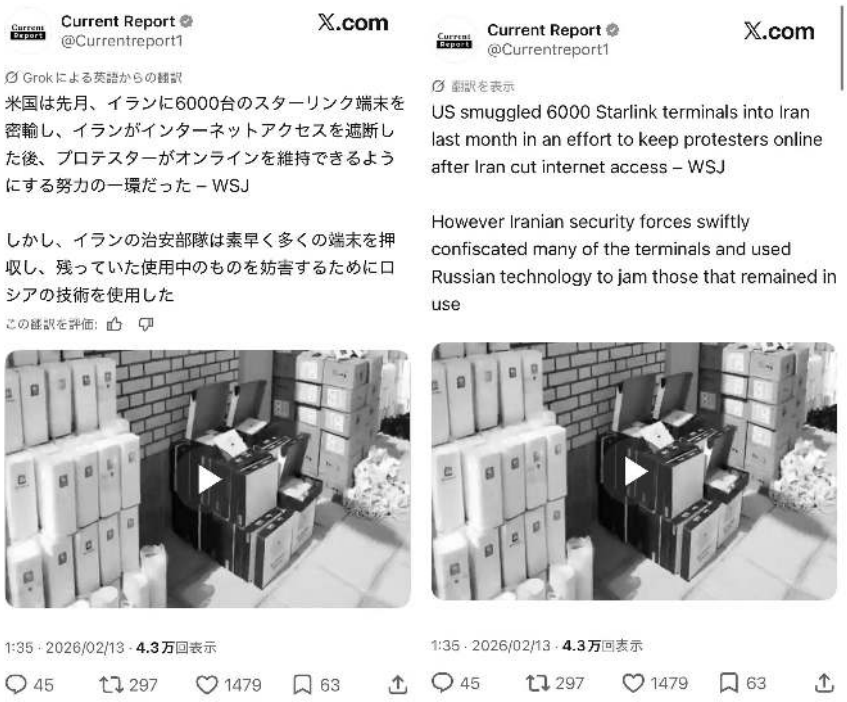
はこう言いました：「助けはもうすぐだ」

ドナルド・トランプ：「アメリカのイランにおける最終目標は勝利だ。勝つのが大好きだ」

過激な抗議者たちは、なぜかイスラエルの旗を掲げていました。なぜイスラエル🇮🇱？



そして、イラン国内では禁止されている「スターリンク」が当局に押収された様子も拡散されていました。



未確認情報とは言え、「スターリンク」を無力化したのはロシアの「トボル」と言う兵器だそうです。これを使って暴動を鎮圧したそうです。

NewRulesGeopolitics
@NewRulesGeo
X.com

Grokによる英語からの翻訳

🇮🇷🚫🛰️ イランに配備されたロシアのスターリンク殺しシステム

未確認の情報によると、イランは抗議者たちが使用しているとされるスターリンクを無力化するために、ロシアの電子戦システム「トボル」を使用している可能性がある。この技術はすでにウクライナでの実戦でテスト済みだ。

固定型の「トボル」複合体は、スターリンク衛星を分析・追跡し、最終的により強力な「汚い」信号で圧倒することで動作し、致死的な無線ノイズを引き起こす。この地域拒否ツールは、「ティラーダ-2」などの精密ジャマーと組み合わせることで、多層的な脅威を形成する。他の情報システムと統合されると、ターミナルを位置特定する可能性があり、衛星インターネットを安全な優位性から検知可能な脆弱性へと変えてしまう。

イランの配備が成功を収めれば、その運用データはロシアにとって非常に貴重なものとなる。ウクライナ軍がスターリンクに完全に依存していることを考えると、移動型の「トボル」変種は、重要な攻勢中に敵の通信を決定的に断ち切ることができ、恒久的なものから局地的なもの、大規模なものまで、あらゆる攻撃作戦で有効だ。

この翻訳を評価:



20:44 · 2026/01/16 · **8.3万**回表示

27 428 1708 131

NewRulesGeopolitics
@NewRulesGeo
X.com

翻訳を表示

🇮🇷🚫🛰️ Russian Starlink Killer System in Iran

Unconfirmed reports suggest that Iran may be using the Russian electronic warfare system "Tobol" to neutralize Starlink, which is reportedly being used by protesters. This technology has already been tested in combat in Ukraine.

The stationary "Tobol" complex operates by analyzing, tracking, and ultimately overwhelming Starlink satellites with a more powerful "dirty" signal, causing lethal radio noise. This area-denial tool, combined with precision jammers like "Tirada-2," forms a layered threat. When integrated with other intelligence systems, it can potentially geolocate terminals, transforming satellite internet from a secure advantage into a detectable vulnerability.

If Iran's deployment proves successful, the operational data is invaluable for Russia. Given the Ukrainian military's total reliance on Starlink, a mobile "Tobol" variant could decisively sever enemy communications during critical offensives, both on a permanent basis and during offensive operations, whether local or large-scale.



20:44 · 2026/01/16 · **8.3万**回表示

27 428 1708 131

第 23 章 4 節　ベネズエラでも同じ経済 DV の手口が使われていた

イランだけではありません。ベネズエラでも、アメリカは同じ「経済 DV」の手口を使い続けてきました。

2025 年 12 月、トランプ大統領はベネズエラの「制裁対象石油タンカー」に対する「完全かつ全面的な封鎖」を命じました。アメリカはすでにベネズエラの石油セクターに制裁を課していましたが、輸出そのものを押さえることで、壊滅的な経済的打撃を与えようとしたのです。ベネズエラのオリノコ・リサーチのアナリストは「石油輸出が止まれば、外貨市場、輸入、経済危機に直結する。単なるリセッションではなく、食料と医薬品の不足が起きる」と警告しています。



Q.では、なぜアメリカはここまでベネズエラを追い詰めるのでしょうか？

理由は案外シンプルです。

ベネズエラには 3030 億バレルという世界最大の石油埋蔵量があり、チャベス政権や拉致されたマドロゥ政権がそれを国有化して国民に再分配しようとしたからです。アメリカの大手石油企業や金持ちが独占・搾取できなくなって不都

合なので、口実を作って経済制裁し、国民を困窮化させ、左派政権を転覆させようとしたからなのです。

日本ではほとんど報じられていませんが、ベネズエラの貧困はアメリカの経済制裁が元凶です。そしてこれはイランもまったく同じ構造なのです。

【自分達が経済制裁されても気付かないマヌケな日本国民】
日本人の多くは自分の事にしか関心がなく、調べる気も外国に関心もないので、自分たちが酷いイジメ加害に加担していることにすら気付いていないのです。そして、その手口が高市政権になって、自分たちに向けられていても、気づかないマヌケなのです。

【記事】ベネズエラ危機はなぜ膠着するのか　理解するカギは「アメリカ」にある

以下にアメリカの実情を教えてくれる動画を紹介しておきますので、ぜひ聞き流して世界情勢を学んでください。

【YouTube Video】アメリカは飢餓を武器にしてキューバを崩壊させようとしている

【YouTube Video】アメリカが世界中の国々に対して経済戦争を仕掛ける方法

【YouTube Video】ブラックロックとウォール街の銀行はイスラエルのガザでの犯罪から利益を得ていると国連が指摘

【YouTube Video】巨大企業が西側諸国の政府を乗っ取った経緯

【YouTube Video】ウォール街が米国選挙を買収する方法：ブラックストーンはトランプ氏に資金提供、ブラックロックはバイデン氏を支持

【YouTube Video】富裕層による支配：西側諸国の政府は民主主義ではなく寡頭制である

【YouTube Video】トランプ氏の政策は、自身の MAGA 支持者を傷つけ、富裕層のエリート層に奉仕しているのだろうか？

【YouTube Video】プーチンの BRICS での大攻勢：ロシアが 3 万件の制裁を受ける中、地政学的圧力で欧米を非難 | NewsX World

【YouTube Video】CIA はいかにして世論を操作するのか

【YouTube Video】イラン戦争の真の理由：トランプ政権の関係者と石油メジャーが手にする莫大な利益

【YouTube Video】泥沼化するイラン戦争：米軍の犠牲者増大とミサイル枯渇の危機

第 24 章　「2 つのタイプ」――なぜ金融業界には搾取側が多いのか？

第 24 章 1 節　アメリカの主権者はアメリカ国民じゃない？

要するに、アメリカに逆らうと「経済 DV」を食らって国民が困窮化する仕組みになっている訳です。

「邪悪なアメリカ人め！」と憎みたくなりますが、少し冷静にならねばなりません。実は、アメリカ人の多くは、正義感の強いまともな人も大勢います。そもそも 6〜7 割のアメリカ人は、イラン戦争に開戦前から猛反対していたくらいです。そして、彼らは、イラン戦争を通じてあることに気づきました。

アメリカを支配して、意思決定をしているのは、「アメリカ国民ではない」ことに気づきました。



第 24 章 2 節　アメリカの政治は民主主義ではなく富裕層が支配している

それは、アメリカ政治は、事実上、一部の金持ちの富裕層が巨額の献金をして、金で政治家や政策を買うシステムが出来上がっていたからです。



だから、富裕層に不都合なことは隠蔽されて、富裕層に都合の良い政策が実行されて、トランプ政権の政治家たちも一緒に大儲けできると言う仕組みが出来上がっているのです。

詳しくは以下の動画を見てみて下さい。

【YouTube Video】富裕層による支配：西側諸国の政府は民主主義ではなく寡頭制である

第 24 章 3 節　なぜ？――ルールを守る人とズルをする人の分岐点

なぜこんな事が起きたのでしょうか？

それを読み解くには、ざっくり２つのタイプを考える必要があります。そして、自分の知らないもう１つタイプについて理解すると全てが見えてきます。

世の中には大きくざっくり分けて、以下の 2 つのタイプの人間がいます。

・タイプ①：ルールを守って正攻法で勝とうとする人

・タイプ②：ズルをしてでも“必ず”勝とうとする人。



タイプ①：ルールを守って正攻法で勝とうとする人。
フェアプレーを重んじ、たとえ負けても潔さを大切にします。現実や事実を重視し、データに基づいて判断する「現実重視型」です。

タイプ②：ズルをしてでも“必ず”勝とうとする人。
ルールは自分を縛るものではなく、凡人を縛るためにあると信じています。権力者や金持ちの「ナラティブ（物語）」を優先し、事実よりも「誰が言ったか」で真偽を判断する「権力追随型」です。

金融業界、特にプライベートエクイティや投資銀行、ヘッジファンドの世界には、①も一定数います。たまに、youtube でまともな経済解説している人などは、そうかもしれません。

しかし、エゲツナイ貸し剥がしや詐欺まがいの搾取で大金を稼ぐ世界では、②のタイプの方が圧倒的に多いのが現実です。息を吐くように嘘をついて人を騙してでもズルをしてでも“必ず”勝とうとする「タイプ②」を理解することがファシズムの謎を解く鍵にもなるのです。

第 24 章 4 節　なぜズルをしてでも“必ず”勝とうとするタイプが多いのか？

Q.では、なぜ②のタイプがこれほど増えるのでしょうか？

心理学者たちの実験研究により、競争に勝った者は負けた者よりも、その後の無関係な課題でより不正直に行動することが示されています。「勝つこと」自体が権利意識を高め、不正行為を正当化するメカニズムが働くのです。権力の感覚は、人が他者の監視の及ばない存在だと感じさせ、衝動的・自己満足的・非倫理的に行動させます。

つまり、勝てば勝つほど搾取が正当化されるという自己強化ループが存在します。

このループに一度入ってしまえば、「倫理的なブレーキは徐々に効かなくなっていきます」。



●悪事や犯罪を自己正当化するためのセリフ：

・「これはビジネス判断だ。感情で動くのはプロらしくない。」

・「市場が決めたことだ。我々はただ、その流れに乗っているだけだ。」

・「みんなやっていることだ。俺だけが悪者じゃない。」

・「規制はコストだ。出し抜くからこそ価値がある。」

・「捕まらなければ問題ない。捕まっても罰金で済む。」

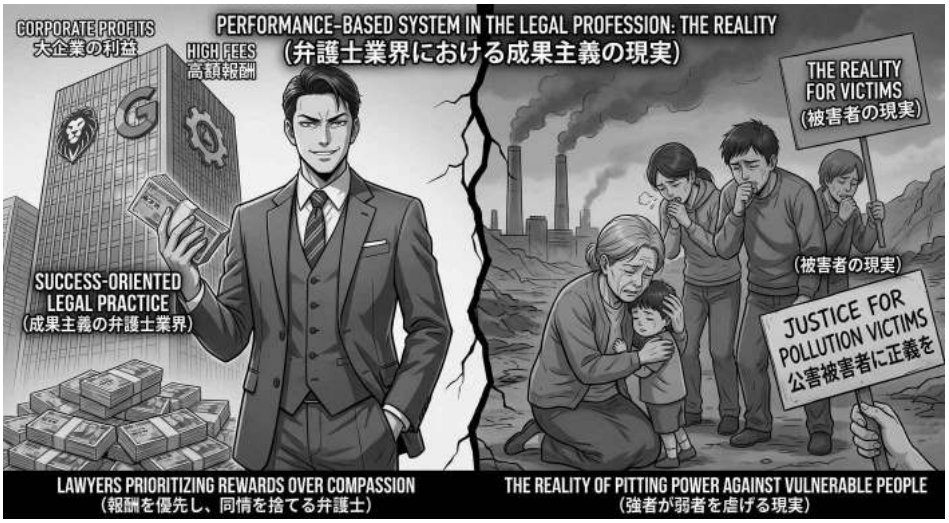
第 24 章 5 節　なぜ金融業界に「搾取側」が集まりやすい構造

金融業界、特に債権回収や消費者金融の世界では、「他者への共感」が致命的な弱点になります。債務者が自殺すれば団信保険で回収できる消費者金融の仕組みや、返済不能の女性をソープに売り飛ばして資金回収する闇金の手口――これらはすべて、相手の不幸を「収益機会」に変換できる人材によって支えられています。



ここで、優しい担当者と冷酷な担当者を対比してみましょう。優しい担当者は、債務者の事情に心を痛め、返済期限を延ばし、家族の崩壊を思いやって追い込みを緩めます。結果、回収率は下がり、「甘い」「使えない」と評価されます。一方、冷酷な担当者は、債務者を数字として扱い、家族に借金をばらすと脅し、自殺すら「保険金で回収できる」と平然と考えます。結果、回収率は上がり、「有能」「頼りになる」と称賛されます。

余談ですが、これは弁護士の世界でも同じです。 同じ裁判を担当しても、金持ちの性加害犯罪を無罪にしたり、公害訴訟で企業側について賠償を無くす方が、はるかに大金を稼げます。被害者の涙よりも、依頼人の報酬を優先できる弁護士の方が「勝てる弁護士」として評価され、高額な報酬を得るのです。倫理観や同情を捨てた方が、同じ資格でも儲かる――これが成果主義の現実です。



この対比が示すのは、成果主義が「非情・冷酷・無責任」を報酬で報いるという逆説です。そして、こうした環境で有利になるのがダーク・トライアド（暗黒の三特性） です。ナルシシズム（自己愛） は「自分は特別だ」という感覚で他者の苦痛を無意味化し、マキャベリアニズム（権謀術数主義） は目的のためなら手段を選ばず人を操ることに罪悪感を持たず、サイコパシー（精神病質） は共感の欠如によって非人間的な判断を可能にします。



研究でも、無慈悲な操作と共感の欠如が出世やボーナスと関連し、社会的支配志向が高い人ほどサディスティックなリーダーを好むことが示されています。つまり、金融業界に限らず、成果主義の世界ではダーク・トライアドの特性を持つ人間が構造的に有利になり、優しい人は排除され、非情で冷酷で

無責任な人だけが勝ち残っていくのです。これが、金融エリートの思考回路が選民思想へと傾いていく最初の分岐点です。



第 25 章　選民思想の形成――「自分たちは特別だ」という免責のイデオロギー

第 25 章 1 節　なぜ？――「能力・富・市場での勝敗」による自己選民化

金融エリートの選民思想は、民族や宗教に基づくものではありません。

能力・富・市場での勝敗による自己選民化です。

自分たちは「選ばれた少数の勝者」であり、他は「凡庸な大衆」「努力不足」「負け組」であると見なします。



第 25 章 2 節　ルールは愚かな凡人を縛るための「道具」

この思考が強化されると、ルールは自分たちを縛るためではなく、凡人を縛るためにあるという感覚が生まれます。

社会的支配志向性（SDO）の高い人は、不平等な集団間関係の維持を望み、階層の拡大を支持します。そして、「正当化神話」――人種主義や性差別主義、能力主義など――によって、その支配を道徳的・知的に正当化するのです。

搾取的行動は「社会的搾取は選良主義を高める」と指摘されています。 他者を利用して地位を高める行動を繰り返すうちに、自分は「選ばれた者」であり、他者は「利用されるべき資源」だという信念が強化されていきます。



●選民思想が口に出始めるセリフ：

・「我々は賢い少数だ。理解できない大衆が悪い。」

・「俺たちが世界を動かしている。ルールは凡人のためにある。」

・「平等なんて綺麗事だ。公平を求める奴は努力が足りない。」

・「我々は特別だ。道徳の外にいても許される。」

・「メイカー（生産者）とテイカー（寄生者）を区別しなければならない。」

第 25 章 3 節　なぜ？——「非情の哲学」が成功条件として美化される

日本のビジネス書や成功者本の多くが「非情になること」を成功の条件として掲げています。『成功する男はみな、非情である。』は「不要な人間は“バッサリ”と斬り捨てる」と説き、『非情な人ほど成果を上げる』は「結果がよければ

手段は関係ない」と断言します。同様のテーマを扱った『非情な人ほど成果を上げる：マキャベリ式最強の仕事術』（2016 年）も、「結果がよければ手段は関係ない」と、非情さを成功の合理的な手段として位置づけています。



この論理では、感情や同情心を持つこと自体が 「弱さ」 であり、切り捨てる対象は「顧客も人材も」含まれます。経営者は「会社で一番の悪者になる」ことが求められ、理念に賛同できない者は居場所を失うとされます。では、この「非情の哲学」が実際の職場でどのように機能し、どのような人間を勝ち残らせるのかを、優しい先輩と非情な先輩の対比で見てみましょう。

第 25 章 3 節 1 項　優しい先輩 vs. 非情な先輩——出世の分岐点

優しい先輩は、部下が落ち込んでいれば丁寧に指導し、家庭の事情も考慮して無理なノルマを押し付けません。チームの雰囲気は良く、部下からの信頼も厚い。しかし上司の評価は「甘い」「数字への執着が足りない」と芳しくなく、昇進からは遠ざかります。やがて「あいつは共産主義者だ」「会社の利益より仲間の和を優先している」というレッテルを貼られ、悪口やデマが社内に流され、出世の道を閉ざされるのです。日本では共産党員であることを理由に賃金差別を受けたとして、新日鉄広畑製鐵所の従業員が訴訟を起こし、大阪高裁で和解が成立した事例も存在します。



非情な先輩は、部下が目標未達なら全員の前で「お前はポンコツか」と罵倒し、顧客の苦情も「言い訳だ」と一蹴します。部下が疲弊して辞めても「使えない奴が去っただけだ」と平然としています。しかし上司からの評価は圧倒的に高く、「数字に厳しい」「甘えを許さない」と称賛され、次々と昇進していきます。彼は「会社で一番の悪者になる覚悟がある」と見なされ、「非情の哲学」を体現する人物として評価されるのです。

- 「非情の哲学」を実践する者のセリフ：

「優しいだけでは生き残れない。現実を知らないだけだ。」

「仲間を切り捨てるのも仕事だ。感情で判断するな。」

「会社で一番の悪者になる覚悟がなければ、経営者にはなれない。」

「あいつは共産主義者だ。会社の敵だ。近づくな。」

第 25 章 3 節 2 項　ビッグモーター――「非情の哲学」が極限まで進んだファシズム職場

この哲学が組織文化として極限まで進むと、何が起きるのか。ビッグモーターの事例がその答えです。2023 年に発覚した同社では、47 人が幹部から一方的な降格処分を受け、「経営計画書」には「幹部には目標達成に必要な部下の生

殺与奪権を与える」と明記されていました。パワハラの手口は凄まじく、幹部が部下に送った LINE には「教育教育教育 死刑死刑死刑」と並び、店長たちのグループ LINE では「ふざけた報告すんな ボケクソが！！！！！」と罵倒されていました。ある元社員は「木偶の坊」「PONKOTU」と落書きされた名刺をデスクに置かれ、別の元社員は輪ゴムで受話器を顔に固定される屈辱を受けていました。



●ビッグモーターの幹部が実際に使っていたセリフ：

「教育教育教育 死刑死刑死刑」

「ふざけた報告すんな ボケクソが！！！！！」

「返答もできねーなら、店長おりろボケが」

「隠蔽、誤魔化すなら、営業してろボケが」

「ぶっ殺すぞ」「木偶の坊」「ポンコツ」

「実家まで行くからね。弁護士使って。消費者金融に連れて行こうかなと思ってるくらいだけど。」

このような環境では、優しい人間は生き残れません。 部下に同情する者、顧客の苦情に心を痛める者、倫理的な線を守ろうとする者は、たちまち「使えない」「甘い」と排除されます。逆に、非情に振る舞える者だけが「有能」と評価され、生き残るのです。ビッグモーターの異常な社内文化は、まさに「非情の哲

学」が組織全体に浸透し、非情さが選抜基準として機能したファシズム化した結果なのです。

第 25 章 3 節 3 項　なぜ「非情なファシスト男」が急増するのか？

成果主義の世界では、非情で冷酷で無責任な人間が構造的に有利になります。

ダーク・トライアド（ナルシシズム、マキャベリアニズム、サイコパシー）の特性を持つ人々は、共感の欠如によって他者の苦痛を無視し、他者の道具化によって成果を最大化できます。そして組織がその非情さを報酬で報いる――出世、ボーナス、権力。その成功を見た周囲は「非情になることが正しい」と学習します。「非情の哲学」に沿った男が急増するのは、組織のインセンティブ構造がそう仕向けているからです。優しい先輩は「共産主義者」とレッテルを貼られて排除され、非情な先輩は「仕事ができる」と称賛されて昇進する。この選別メカニズムが、日本企業の職場文化を構造的に邪悪な方向へと変質させていくのです。

第 26 章　弱者・女性の搾取と「優しい人」への嫌悪――自己正当化の心理

第 26 章 1 節　なぜ？――弱者の搾取が「当然」と思う心理メカニズム

金融エリートの中には、弱者や女性を搾取することを当然と考える者がいます。

その背景には、以下の心理メカニズムが重なっています。



・社会支配志向（SDO）：社会は階層であるべきで、
強い者が弱い者を支配するのが自然だと考える。

・敵意的性差別：女性を劣った存在、性的対象、
家事・感情労働の提供者と見なす。

・慈悲的性差別：女性を「守るべき弱者」と見なし、
保護と引き換えに従属を求める。

・非人間化：相手を人間ではなく数字、カモ、駒と見る。
だから搾取の罪悪感が生じない。

・公正世界信念：貧しい人、搾取される人は
「何か足りないからだ」と正当化する。

金融業界における性差別は、実証的にも確認されています。

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）の行動実験では、同じパフォーマンスにもかかわらず、女性の「ステファニー」は男性の「スティーブン」よりも能力が低いと評価されることが示されました。

金融業界では、男性が依然として上級職を独占し、女性に対する偏見がキャリアの障壁となっています。



●弱者・女性を搾取する側のセリフ：

・「女性に優しくするのは負け組の証だ。
　純粋で優しい男よりチャラい男の方が女に好かれる。」

・「被害者にも落ち度がある。自己責任だ。」

・「弱者男性の遺伝子よりも、強い遺伝子の方が適合する。
　弱者は淘汰されるべきだ。」

・「男には女を所有する権利がある。女は管理されるべき存在だ。」

第 26 章 2 節　金融業界に深く入り込んでいる「マノスフィア思想」

この辺は、マノスフィア思想も入り込んでいると言えます。

マノスフィアとは、オンライン上で男性の権利や男性性を主張するコミュニティの総称です。その中心には「男性は社会の中で不当に扱われている」という被害者意識と、「女性は男性の資源である」という所有意識があります。

Movember Foundation の調査によれば、若い男性の約 3 分の 2 が定期的に男性性インフルエンサーのコンテンツに接触していると報告されています。

第 26 章 2 節 1 項　マノスフィアの「言語」は金融市場の言語

第一に、マノスフィアの「言語」は金融市場の言語そのものです。

マノスフィアの言説では「sexual market value（性的市場価値）」「high/low value man（高価値/低価値な男）」「maxxing（最大化）」といった表現が日常的に使われ、親密さが市場に、身体が資産クラスに変換されます。彼らの語彙は「最適化」「レベルアップ」「限界的利益」といった金融市場の用語とまったく同じであり、男性の身体は測定可能な資産、「男性性」の指標として扱われるのです。マノスフィアの指南は若い男性に対し、まるで業績評価（performance review）を受けるかのように自分自身を外部から監視することを促します。そして、この「自己改善」の言説は、実際には自己監視の有害な形態であり、マノスフィアの信奉者は「改善し、比較し、失敗し、繰り返す」という願望と自己嫌悪のループに陥ることになります。



第 26 章 2 節 2 項　暗号資産と密接なマノスフィアインフルエンサー

第二に、マノスフィアのインフルエンサーは金融市場と密接に結びついています。 iA Private Wealth の CEO、アダム・エリオット氏は「マノスフィアのインフルエンサー文化と暗号資産市場、特にあまり確立されていない暗号資産市場との間には大きな関連性が観察されている」と指摘しています。彼らはスポーツカー、大邸宅、プライベートジェット、ヨットといった富の象徴に囲まれながら、メームコイン、スポーツベッティング、株式投資を「賭け」として提示し、「すべてを赤 14 番に賭ける」ようなハイリスクな金融行動を推奨します。これは従来の分散投資や「急がば回れ」といった伝統的な金融アドバイスを軽視するものであり、「ゆっくり確実に」という概念を否定する文化なのです。



第 26 章 2 節 3 項　女性を「獲物としてみる」金融業界の「兄弟会文化（Boys' Club）」

第三に、金融業界の「兄弟会文化（Boys' Club）」とマノスフィアは同じ土壌から生まれています。 ウォール街では長年、fraternity（大学の男子社交クラブ）的なネットワークが女性のキャリアを阻む構造が指摘されてきました。2022 年の Pew Research Center の調査では、金融業界で働く女性の 40% が何らかの職場ハラスメントや差別を経験したと報告しています。EEOC（米国雇用機会均等委員会）のデータによれば、金融・保険セクターは毎年最も多くのセクシュアルハラスメントの申し立てが行われる業界の一つです。実際、Citigroup の株式トレーディング部門では、女性スタッフへの持続的なハラスメントと差別、およびオフィス内でのコカイン使用が報告され、銀行がそれを長年無視していたことが明らかになっています。



こうした兄弟会的な文化は、女性を「仲間」ではなく「獲物」や「管理対象」と見なす感覚を再生産し続けています。ゴールドマン・サックスに対する性差別訴訟では、2023 年 11 月に 2 億 1500 万ドルの和解が最終承認され、約 2,800 名の現・元女性副社長・アソシエイトが対象となりました。これは米国史上最大級の雇用差別和解の一つであり、裁判前の和解としては単一の性差別訴訟として史上最大のものです。原告らは「『ボーイズクラブ』的な職場文化が女性の昇進を妨げた」と主張し、女性従業員が組織的に低い給与と不適切な職場環境に置かれていたと訴えました。

いわゆる「トロフィーワイフ」を求めるのもこの業界の連中の特徴ですね。



第 5 章 2 節 4 項　マノスフィア思想の起源は金融業界の「兄弟会的文化」

つまり、マノスフィア思想は金融業界に「外から」入り込んでいるのではなく、金融業界がもともと持っていた「兄弟会的文化」「成果主義」「女性の対象化」という土壌に、マノスフィアの「言語」と「世界観」がぴったりと嵌まり込んでいるのです。

マノスフィアのインフルエンサーが「金持ちになることが男性の価値だ」と説けば、金融業界の男性たちは「自分たちの直感は正しかった」と確認する。金融業界の競争文化が「非情でなければ生き残れない」と迫れば、マノスフィアはそれを「男性性の証明」として正当化する。この相互強化のループが、弱者や女性を搾取することを「当然」と考える心理を、さらに強固なものにしているのです。



第 26 章 3 節　なぜ？――「優しい人」に激しい嫌悪を感じる理由

弱者を「カモ、駒」だと思って搾取する対象だと思っている金融エリートやマノスフィアインフルエンサーにとって、

優しい人の存在は、彼らの世界観を根本から脅かします。

自分達が騙してカモにしている男女に、嘘や搾取である事を教えてしまうかもしれません。詐欺師にとっては、憎き商売敵であり、「共産主義者」などのレ

ッテルを貼って排除したい存在です。詐欺師たちにとって優しい人は以下のような脅威になります。



・鏡効果：優しい人は、彼らの冷酷さ・空虚さ・搾取を映す鏡。見たくない自分を見せられる。

・代替モデルの脅威：支配しなくても尊敬され、愛される人がいる。それは「支配が唯一の道」という信念を崩す。

・嫉妬：優しい人は信頼・愛情・安心を得る。彼らが欲しくても得られないものを得ている。

・道徳的優位への恐怖：優しい人が「お前たちは間違っている」という証拠になる。だから黙らせたい。

つまり、優しい人への嫌悪は、尊敬の裏返しであり、羨望と羞恥の防衛なのです。彼らは自分の支配力を失う事を恐れて、優しい人を「目障りだから存在を消し去ろう」とします。陰口、孤立化、ガスライティング、評判破壊、法的嫌がらせ――これらはすべて、自分の世界観を守るための防衛機制です。

●優しい人を排除しようとするセリフ：

・「あいつは偽善者だ。何か裏があるに違いない。」

・「あいつは共産主義者だ。社会主義者だ。敵国のスパイだ。何か裏があるに違いない。」

・「お人好しを装っているだけだ。本当は弱いだけだ。」

- 「あいつがいるだけで場の空気が悪くなる。距離を置こう。」
- 「あいつの存在自体が害悪だ。排除するのが正義だ。」

第 27 章　搾取側になる条件――「勝ち組」への道は「人間性の崩壊」と表裏一体

第 27 章 1 節　なぜ？――搾取側になるための「入門条件」

ネット上に散在する自己啓発本、マノスフィア（男性向上コミュニティ）、ビジネス書、優生思想ブログには、搾取側になるための「条件」が共通して見られます。

入門条件①：平等・公平の否定。「平等なんて綺麗事」 「公平を求める奴は努力が足りない」。平等を口にすることは、 搾取側の世界観への挑戦と見なされ、「失格」の烙印を押されます。
入門条件②：「非情」の哲学。感情を持つこと自体が「弱さ」とされ、 切り捨ての対象は顧客・人材・弱者に及びます。
入門条件③：序列の正当化。「8 対 2 理論」などパレートの法則の誤用で、 多数派を少数の勝者のための資源と定義します。 優生思想では、弱者の存在自体が「淘汰されるべきもの」とされます。
入門条件④：ゼロサム・敵味方思考。世界を「勝ち組か負け組か」 の二択で捉え、他者の利益は自分の損失、 協力は弱さ、相手の弱みは収益機会と見なします。



●搾取側の「入門条件」を満たした者のセリフ：

・「世界はゼロサムだ。誰かが勝てば誰かが負ける。それだけのことだ。」

・「正々堂々と戦うのは愚か者だ。賢い者は非対称戦で勝つ。」

・「あの会社とは距離を置くことにしました。リスク管理上の判断です。」

・「同じ道を辿りたくはないでしょう？ 我々と協力するのが賢明です。」

弱者や負け組になりたくなければ、自分たちの言う通りにしろ、自分たちに従えと言う訳です。

第 27 章 2 節　なぜ？——搾取的行動が「英雄」として称賛される文化

搾取的行動は、仲間内での称賛によって強化されます。「セックスすることよりも、仲間から称賛を集めることが目的になっていた」という事例は、搾取的行動が男性間の承認欲求に駆動されていることを示しています。ネット上の搾取コミュニティでは、女叩きや弱者叩きをすればするほど称賛され、「英雄」として崇拝される文化が形成されます。



MAGA の仕組みは、この「称賛のビジネス」を極限まで組織化したものです。イーロン・マスクやトランプのような金持ちが「自分たちのような勝ち組にしてやる」と勧誘し、台本を渡し、それを自分の意見であるかのように主張させる。セント・クレアの証言によれば、大型右翼インフルエンサーの 99%が何らかの形で報酬を得ており、ある MAGA インフルエンサーは月額 40 万ドルと契

約金 10 万ドルを受け取っていました。セント・クレア自身も、リック・グレネルの国務長官就任を促進する投稿に対し 4 万ドル（約 637 万円） のオファーを受けたと証言しています。過激な発言→注目とフォロワーの獲得→組織による発掘と支援→システムへの依存深化という閉じたループが、若者をテロリストへと成長させていくのです。

このシステムは、マノスフィア思想と密接に結びついています。 女性の中絶権や権利を奪おうとし、「生意気な女を犯せ」「生意気なリベラルをぶっ殺せ」といった過激な発言やデマを流せば流すほど、エコーチェンバー内の仲間から称賛される。しかし、その代償はあまりにも大きい。 MAGA の男たちは、女性から嫌われ、離婚され、見捨てられていきます。金を貰って女叩きや弱者叩きに熱狂し、承認欲求を満たしても、最終的に MAGA は社会的拒絶を招き、孤立を深めているのです。タッカー・カールソンのように、スポンサーや報酬が無くなっても「おかしい」と思えばトランプ批判に転じる者はまだ救いがありますが、日本のネトウヨのように「おかしい」と思っても支持し続け、デマを流し続ける者たちは、システムへの依存から抜け出せなくなっているのです。



搾取的行動は短期的な自己利益を最大化しますが、長期的には社会的拒絶を招き、孤立を深めます。搾取の条件を満たすことは人間性の崩壊と表裏一体です。本当の強さは、踏み躙る力ではなく、自分が出した影響に責任を持ち、弱い立場の人を尊重できることなのです。

第 28 章　他国経済崩壊を喜ぶ心理――「強者の証」という錯覚

第 28 章 1 節　なぜ？――「嬉々として」他国崩壊を語るのか？

金融エリートの中には、他国の通貨・国債・銀行を売り崩し、破綻や混乱を「勝ち」として祝う者が実際にいます。

ベッセント財務長官はダボス会議で、イラン経済を意図的に崩壊させた行為を「一発も撃たずにミサイル以上の成果を上げた」と誇らしげに語りました。

イーロン・マスク氏は、政府効率化省（DOGE）を通じた大量解雇や予算削減を「効率化」と称し、アレックス・ギブニー監督のドキュメンタリーでは元側近が「彼は私が会った中で最も惨めな男だ。だからその惨めさを周囲に撒き散らしている」と証言しています。

トランプ大統領もまた、ベネズエラへの石油封鎖やイランへの「最大限の圧力」を、力こそ正義とばかりに正当化してきました。



しかし、それは「強者の証」ではありません。 むしろ以下のようなものの複合です。

・免責された権力：合法、契約、市場の力、
自己責任という盾で道徳的責任を回避する。

・選民意識：自分たちは賢い少数、他は愚かな大衆。
ルールは凡人を縛るもの。

・非人間化：他国民は統計、数字、モデル。失業も貧困も実感がない。

・集団的ナルシシズム：冷酷さ＝有能、破壊力＝支配力。
仲間内で英雄になる。

・恐怖と劣等感の裏返し：自分もいつか淘汰される不安。
だから他者を踏み躙って安心する。

彼らに共通するのは、「自分たちは特別な使命を持った選ばれた少数であり、ルールは凡人を縛るためにある」という選民意識です。ベッセント氏は「我々は抑止力を回復している」と語り、マスク氏は「人類を救うためにやっている」と主張し、トランプ氏は「私だけがこれを直せる」と繰り返します。だからこそ、他国を崩壊させても「歴史を動かしている」と正当化できるのです。



そして、彼らは他者を非人間化します。

ベッセント氏はイラン経済を「ドル不足」という数字で語り、マスク氏は従業員を「コスト」として切り捨て、トランプ氏は移民や敵対者を「悪い人々」と

一括りにします。他国民や他者が統計や数字、レッテルに置き換わることで、失業も貧困も実感がなくなり、罪悪感が生まれなくなります。



さらに、集団的ナルシシズムが行為を強化します。

MAGA 集会や SNS では、過激な発言をするほど仲間から称賛され「英雄」になります。マスク氏はミームで注目を集め、トランプ氏は「リベラルをやっつけた」と支持者に喝采されます。仲間内での承認が、冷酷さを「有能さ」の証明に、破壊力を「支配力」の証明にすり替えるのです。



しかし、その最深部にあるのは恐怖と劣等感の裏返しです。アレックス・ギブニー監督のドキュメンタリーでは、マスク氏の元側近が「彼は私が会った中で最も惨めな男だ。だからその惨めさを周囲に撒き散らしている」と証言しました。トランプ氏は群衆の規模や人気に異常にこだわり、ベッセント氏は市場の勝者であり続けなければという不安を抱えています。自分もいつか淘汰される恐怖があるから、他者を踏み躙って安心する――これが「嬉々として」他国崩壊を語る心理の正体なのです。

つまり、彼らが「嬉々として」他国崩壊を語るのは、強さの証明ではなく、免責された権力と内面の空虚の産物です。本当の強さとは、市場で勝つことだけではなく、自分が出した影響に責任を持ち、弱い立場の人を尊重できることなのです。



第 28 章 2 節　内面の空虚の埋め合わせと「権力の麻薬」

本人たちは「弱者を踏み躙るのが強者の証」と錯覚しているかもしれません。しかし、踏み躙らなければ自分の価値を確認できないのは、むしろ弱さです。他者を踏み躙る快感は、強さではなく、権力の麻薬であり、内面の空虚の埋め合わせなのです。

この「空虚の埋め合わせ」を最も生々しく示しているのが、イーロン・マスク氏の事例です。 アレックス・ギブニー監督による 4 時間のドキュメンタリーが 2025 年秋に公開されることになり、アメリカで大きな話題となっています。



紙の上では地球上の誰よりも金を持っている男が、同時に地球上で最も悲しい男でもある――これは決して皮肉ではなく、心理的な必然です。金そのものは幸福を買えません。借金に押し潰されそうな人の悩みなら金で解決できますが、内面の空虚は金では埋まらないのです。

マスク氏の問題は非常にシンプルです。彼は人から好かれることを必死に求めている。だからあのような奇行を繰り返し、「クレイジーで面白い自分」を演じる。誰かに笑ってもらい、「なんて素晴らしい人だ」と思われたい。しかし、もっと簡単な方法があるのです――持っている富のごく一部を使って、恵まれない人々の生活を良くすること。世界飢餓を解決するために何人かの協力者を募ること。奨学金を設立し、経済的理由で大学に行けない子どもたちに 5,000 人分の全額給付奨学金を与えること。アメリカ中のすべてのフードバンクに資金を提供すること。それでも彼は世界一の金持ちのままでいられ、全員から愛されるはずなのです。



しかし、彼はそうしません。

彼は「嫌な奴」でいることを選びます。 Twitter を買収し、アルファベット 1 文字に改名し、流し台を抱えてオフィスに入り、優秀な人材を全員解雇し、プラットフォームを何ヶ月もクラッシュさせ続けます。DOGE（政府効率化省）を設立し、ミームから取った名前だと笑いながら、ひたすら切り、切り、切り続けて、人々の生活を破壊します。だからこそ、彼は惨めでいるべきなのです。地球上で最も不幸な人間であるべきなのです。

なぜなら、すべてを持ちながら、何一つ良いことをしてこなかったから。だからその悲しみに値する。孤独を感じるに値する。この先の人生ずっとそう感じ続ければいい——ギブニー監督のドキュメンタリーで、元側近たちはそう証言しているのです。



これはマスク氏個人の病理ではありません。権力と富を得た者が、その空虚を埋めるために他者を踏み躙るという構造そのものです。彼らは「弱者を踏み躙るのが強者の証」と錯覚しています。しかし、踏み躙らなければ自分の価値を確認できないのは、むしろ弱さの証明です。真の強さとは、市場で勝つことだけではなく、自分が出した影響に責任を持ち、弱い立場の人を尊重できることなのです。そして、その真の強さを持たない者たちは、権力の麻薬に依存し続け、ますます多くの他者を踏み躙ることでしか、自分の存在を確認できなくなるのです。



●他国崩壊を「勝ち」として祝う者のセリフ：

・「あの国の経済が崩壊したか。いい裁定機会だ。安く買えるぞ。」

・「市場の調整だ。彼らにも責任がある。自己責任だ。」

・「我々は歴史を動かしている。彼らの犠牲は必要経費だ。」

・「あの国が混乱しているうちに、我々が主導権を握る。それが市場の論理だ。」

・「弱者が淘汰されるのは自然の摂理だ。我々は選ばれた者だ。」

・「俺はクレイジーで面白いだろう？ みんな俺を見て笑えよ。」

・「なぜ誰も俺を愛さないんだ？ これだけの金と力があるのに。」

イーロン・マスクは惨めな人生に不満を抱いていると報じられています。

【YouTube Video】イーロン・マスクは惨めな人生に不満を抱いていると報じられている。

第 29 章　なぜ反撃を恐れず「自分は安全だ」と信じられるのか？

第 29 章 1 節　なぜ？――軍事・情報・金融の複合体が「無敵感」を生む

金融エリートが反撃や報復のリスクを恐れず、自分は安全だと信じられる背景には、構造的な免責と心理的な無敵感が相互に強化し合うシステムがあります。

構造的根拠①：軍事産業複合体（MIC）の保護機能。 アイゼンハワーが警告した「軍産複合体」は、今やシリコンバレーを包含し、 アメリカの外交政策をエリートの富と権力のために運営しています。
構造的根拠②：「大きすぎて潰せない」原則の逆説。 2008 年の金融危機では、 大手金融機関は「Too Big To Fail」として救済されました。 これは「Too Big To Jail」と同義であり、金融エリートに事実上の免責を付与しました。
構造的根拠③：規制の捕獲（Regulatory Capture）。 規制当局と金融業界の間の「回転ドア」により、規制は業界に都合よく設計されます。 違反しても実質的な罰則は「ビジネスコスト」として処理され、刑事訴追は稀です。
構造的根拠④：通貨発行権の掌握。 基軸通貨ドルを通じた金融システムへの依存は、 米国に圧倒的な経済的レバレッジを与えます。 各国の銀行がドル取引に依存している限り、 米国の制裁や資産凍結は強力な武器となり続けます。

そして、巨大銀行や証券会社にいると、政治家との人脈や警察・諜報機関・軍隊との人脈もでき、大統領や首相とも互助関係になります。ダイモン CEO がパランティアの幹部と一緒に安全保障会議に登壇し、イラン戦争を「中東和平のチャンス」と擁護する光景は、金融と軍事・情報産業の一体化を象徴しています。



●「自分は安全だ」と信じる者のセリフ：

・「俺たちはルールの外にいる。誰も手出しできない。」

・「逆らう奴は罰する。それが秩序だ。」

・「他国など動かして当然だ。我々には力がある。」

・「制裁もデバンキングも武器だ。使わない手はない。」

・「訴訟を起こされた？ 罰金を払えば済む話だ。ビジネスコストだよ。」

第 29 章 2 節　なぜ？――「ゲーム」として楽しめる心理プロセス

この心理は、以下の段階を経て形成されます。

入口：能力と成果で選抜。自信と競争心が強い。

小さな逸脱：グレーゾーンから始まる。合理化（「みんなやっている」）。

日常化：違和感が消え、言葉が婉曲化。

免責の制度化：受託者責任や株主価値が倫理を覆い隠す。

特権意識：「ルールは凡人用。我々は特別だ」。

敵味方の区分：逆らう者は罰し、弱者は自己責任とする。

捕獲と永続：規制・政治・メディアを巻き込む。

捕まらなければ成功：罰金はコスト、転職で復帰。

帰結：他国崩壊は悲劇ではなく、裁定機会となる。



このプロセスを経て、彼らは構造的な免責と心理的な無敵感が相互に強化し合うシステムの中にいます。しかし、この「無敵感」を最終的に裏付けているのは、トランプの私兵と呼ばれる ICE、命令に忠実な米軍、エプスタインファイルを隠蔽してくれる FBI や CIA、そして Palantir の予測警察システムです。

第 29 章 3 節　トランプの私兵の ICE

まず、ICE はトランプの「私兵」と化しています。

ワシントン・ポスト紙は「トランプは ICE を巨大な治安機関へと膨れ上がらせ、自身の私設軍隊および民主的に統治された都市や州に対する圧力手段

として利用している」と警告しています。実際、ICE の予算は史上最高額に達し、アメリカで最も資金のある法執行機関となりました。

市民的自由団体は「トランプは ICE を自分に忠実で、法的責任からほぼ完全に守られた私的な警察力に変えている」と非難しています。

かつて、「ヒトラーやナチスの批判をした人を虐殺したり、拷問したり、迫害したナチス親衛隊🇩🇪」と同じ現代のナチス親衛隊🇺🇸な訳です。日本で言えば、「昭和天皇や戦争や日本政府を人を虐殺したり、拷問したり、迫害した特高警察」と同じです。



そして、この私兵を技術的に支えているのが、Palantir の予測警察システムです。 Palantir は CIA の資金提供を受けて 2003 年に設立されたデータ分析企業であり、そのソフトウェアは現在、移民取締り、予測警察、省庁間の情報共有システムの中核を担っています。2025 年 4 月、ICE は Palantir と 3,000 万ドルの契約を結び、「ImmigrationOS」と呼ばれるプラットフォームを開発させました。これは、国境通過、ビザ記録、自宅住所、SNS の活動までも集約し、移民の動きと背景をほぼリアルタイムで把握する「全知のダッシュボード」です。ICE と CBP の監視技術企業への契約額は、2024 年の 3 億 1,000 万ドルから 2026 年には 5 億 1,300 万ドルへと急増しました。

第 29 章 4 節　全てを揉み消すパランティアの予測警察システム

この監視技術の本質は、単に相手を「見る」ことではありません。

相手の手の内をすべて読み、先手を打って潰せるということです。

Palantir のシステムは、個人の人間関係、金融取引、通信記録、移動履歴、健康データ、さらには SNS 上の交友関係までも解析し、「この人物が次に何をしようとしているか」を予測します。

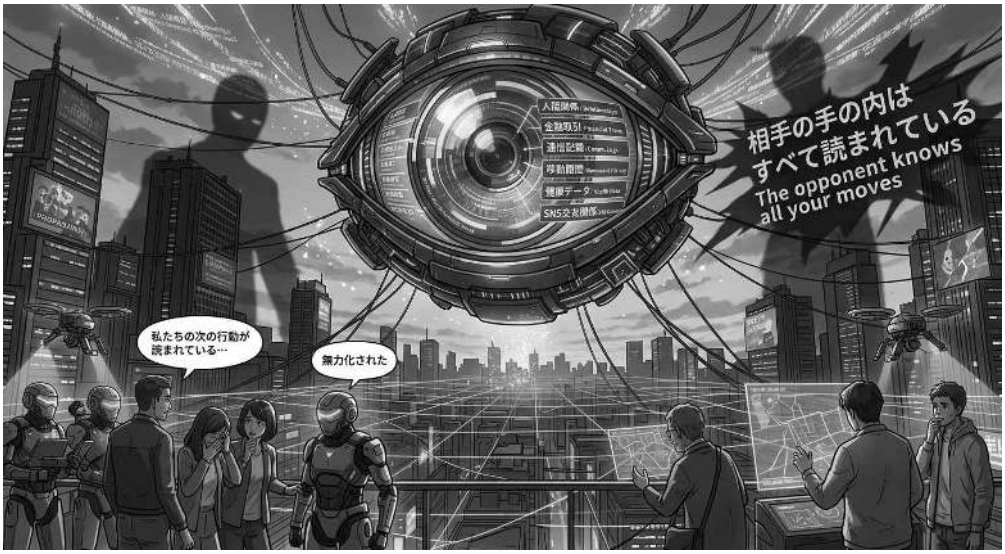
反撃の兆候、訴訟の準備、告発の動き、組織化の試み――それらはすべて、実行される前にアルゴリズムによって検知され、無力化の対象となります。相手がどんな手を打とうとしているか、すべてお見通しなのです。

そして金融取引や人間関係を細かく分析することで「相手の些細な弱点を把握して、その弱点を攻撃すること」で、相手の抵抗の意思を奪うことができるのです。

例えば、敵対する野党政治家の些細な法律違反を見つけて、手下の親衛隊に「執拗に攻撃させる」ことで、大問題や隠蔽トラブルに発展させて辞職や組織崩壊に結びつけることもできます。



また、些細な支払い忘れや脱税を見つけて、脅迫して、「従わないなら手下のマスコミに漏らして大問題や隠蔽トラブルに発展させて辞任に追い込むぞ？」と脅すことで、屈服させることも簡単にできてしまいます。



この技術的優位があるからこそ、彼らは「自分たちは絶対に安全で、脅かされることがないと確信」できます。

自分たちに歯向かおうとする者、攻撃を仕掛けようとする者、 地位を奪おうとする者は、事前に特定され、無力化される。
被害を訴える者には弱みや住所を暴いて恐怖に晒し、黙らせる。
賠償を訴えたり奪い返そうとする者を脅し、暗殺して泣き寝入りさせる。
不正を追及しようとする団体を内部崩壊させる。 「デバンキング」で資金難で倒産させる

彼らは「神のような目で見下ろし、揉み消すことができる」のです。



第 29 章 5 節　FBI や CIA が揉み消してくれる

さらに、FBI や CIA は、エプスタインファイルのような致命的なスキャンダルを隠蔽する機能を果たしています。

2025 年 9 月、下院議員トーマス・マッシー氏は「トランプ政権がエプスタインのファイルの完全公開に抵抗しているのは、億万長者の寄付者や諜報機関とのつながりを保護するためだ」と述べました。同氏は「CIA を含む諜報機関が関与している可能性」を示唆し、「アメリカ国民は、自分たちの諜報機関が性的人身売買組織を運営していた小児性愛者と協力していたと知ったら shock するだろう」と語っています。

つまり、どれほど深刻な犯罪を犯しても、FBI や CIA が揉み消してくれる――これが、彼らの「無敵感」のもう一つの柱なのです。



ICE という私兵、Palantir という全知の監視システム、FBI・CIA という免罪符。この三つが揃ったとき、金融エリートは自分たちは絶対に安全であり、どのような反撃も事前に封じ込められると確信します。相手の手の内はすべて読まれており、どんな動きも先回りして潰される。恐怖を感じる必要がないから、残酷さを楽しめる。だからこそ、ゲーム感覚で人を踏みにじれるのです。　これが、現代の金融エリートが「嬉々として」他国崩壊を語り、弱者を踏み躙る心理の、最も強固な基盤なのです。

第 29 章 6 節　捕まらないだけでなく、ボロ儲けできる情報の非対称性が生む「ゼロサム利益」

金融エリートや大統領や政治家が「神のような目」で世界を見下ろせるとしたら、それは単なる監視ではありません。地球上のあらゆる情報を誰よりも早く入手し、それを利益に変換できるということです。情報の非対称性――「自分だけが知っている」状態――は、金融の世界で最も強力な武器になります。



第 29 章 6 節 1 項　具体的に「神の目」でどう儲けるのか？

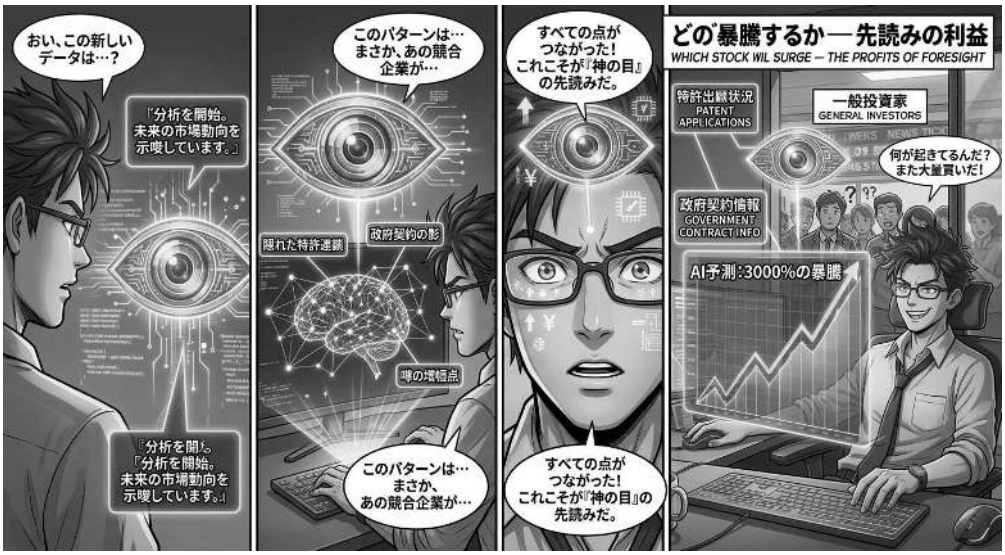
「選ばれた勝ち組」である「自分だけが知っている」と言う「情報の非対称性」を利用すれば、どのようにボロ儲けすることができるのか？を簡単に解説しておきます。

エプスタインが富裕層や政治家の弱みを握って、スキャンダルの揉み消しをして恩を売り、引き換えに手に入れていたのは「政府の高官しか知らないインサイダー情報」でした。それと同じ手法を使えば良いのです。



第 29 章 6 節 2 項　① どの株が必ず暴騰するか――「先読み」の利益

企業の財務データ、特許出願、政府契約情報、SNS の噂まで解析すれば、「この企業が近く大型契約を獲得する」という情報を、市場が気づく前に把握できます。発表前に株を買い、暴騰後に売れば数十億円の利益。一般投資家は「なぜあのタイミングで大量購入があったのか」と首をかしげますが、答えは「神の目が見ていたから」です。



第 29 章 6 節 3 項　② 誰も知らない資源の眠る場所――「土地と資源」の先取り

衛星画像、地質データ、政府の非公開文書を組み合わせれば、「この地域に未発見の希少鉱物が眠っている」と誰よりも早く掴めます。その土地を安く買い占め、資源が公表されて価格が暴騰したところで売却する。一般市民が知ったときには、所有権はすでにエリートの手に渡っているのです。



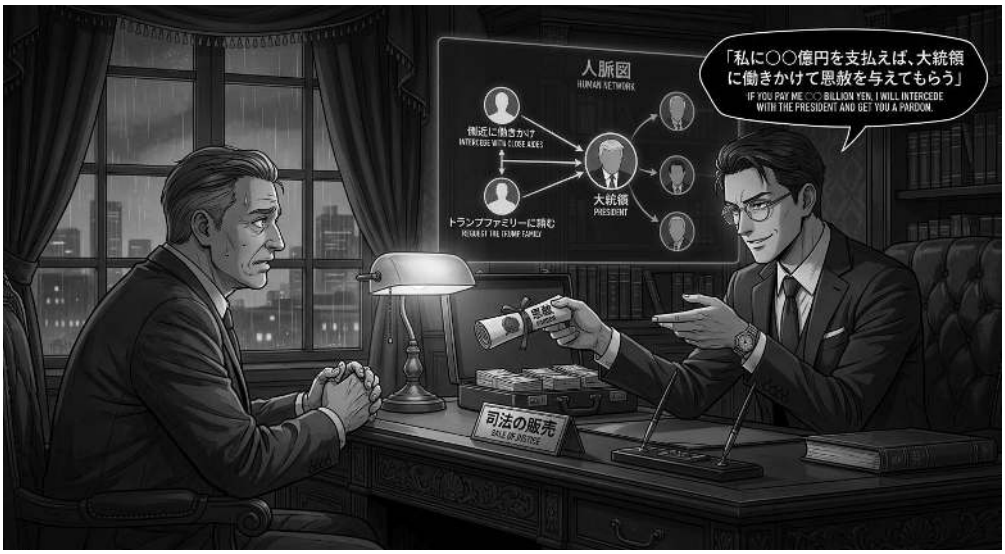
第 29 章 6 節 4 項　③ 戦争と再建計画――「破壊と建設」の二重取り

「来年、某国で戦争が起きる」と事前に知れば、武器・弾薬・燃料企業の株を買い、戦争開始で売り抜ける。通貨が暴落する国があれば空売りで利益を得る。戦争が終われば、今度は復興需要で建設・重機・インフラ企業が潤う。破壊で儲け、建設で儲ける――これが「二重取り」の正体です。



第 29 章 6 節 5 項　④ 大統領恩赦の免罪符販売――「司法の商品化」

逮捕されている金持ちに「私に○○億円を支払えば、大統領に働きかけて恩赦を与えてもらう」と持ちかけて、人脈を利用してボロ儲けする「恩赦ビジネス」ができます。側近に働きかけたり、トランプファミリーに頼んで、トランプが恩赦するように持ちかけるのです。実際に恩赦が出れば、金持ちは罪を免れ、仲介者は巨額の手数料を得る。司法が「買えるもの」に変わる瞬間です。



第 29 章 6 節 6 項　⑤ 負けそうな極右政党への支援――「恩を売る」投資

「この極右政党は資金不足であと少しで脱落する」と知れば、巨額の資金を提供し、「当選したら政策を自分たちに有利に変えろ」と条件を突きつけます。負けても「支援してくれた」という恩は残り、勝てば法律や規制を都合よく変えられる。民主主義そのものを「投資対象」に変える――これが神の目の最も恐ろしい使い方です。



第 29 章 6 節 7 項　なぜこれが「ゼロサム」なのか？

これらの儲け方はすべて「誰かの不幸の上に成り立っている」 からです。



・株の暴騰で儲ける＝情報を知らなかった一般投資家が損をしている

・資源を先取りする＝その土地に住んでいた人々が富を奪われている

・戦争で儲ける＝戦場で人が死に、街が破壊されている

・恩赦を売る＝司法の公正さが踏みにじられている

・極右政党を支援する＝その政策で苦しむマイノリティが生まれている

金融エリートはこれを「市場の論理」「投資判断」と呼びます。しかし本質は、他者の不幸を自分の利益に変換する「ゼロサムゲーム」 です。そして神の目は、このゲームを圧倒的に有利に進めるための、最強の道具なのです。

情報の非対称性は、21 世紀における最も強力な搾取のインフラです。 かつては軍事力や資本が支配の手段でしたが、今や「誰よりも早く情報を入手し、それを利益に変換する力」が、新たな支配の形を生み出しているのです。

これが Google やアマゾンや、Microsoft や IBM やブラックロックなどの投資会社や銀行が、ガザ🇵🇸ジェノサイド💀やイラン戦争🇮🇷に深く関わって、監視技術と AI に莫大な投資をしている「本質的な理由」です。



「AI が新たな植民地支配」「AI が人間を搾取して支配する」とは、事実なのです。

第 30 章　金融システムとファシズム化――民主的統治の空洞化

第 30 章 1 節　なぜ？――銀行が「陰で支える」金融制裁がファシズムを生む

「銀行が戦争で儲けるためにファシズム化する」というのは、「金で国民の”生殺与奪の権”を握る」という形で進行します。

第一段階：金融インフラのボトルネック掌握。 米国の金融制裁が「人の生死」を左右するのは、ドル決済システムへのアクセスを握っているからです。OFAC が指定した主体と取引した金融機関は、米国市場から締め出されます。この「二次制裁」の恐怖が、世界中の銀行に過剰なコンプライアンスを強制します。 合法的な人道支援や医薬品の取引までが止まり、経済制裁は年間 50 万人以上の超過死亡に寄与していると研究で示されています。
第二段階：デバンキングによる政治的武器化。 銀行が「規制リスク」を理由に、特定の顧客の口座を閉鎖する行為です。表向きはリスク管理ですが、実際には政治的・イデオロギー的な選別が行われているケースが報告されています。欧州議会の文書は、フランスの銀行が野党系ジャーナリストの口座を予告なく閉鎖した事例を記録しています。つまり検閲が民間部門に外部委託されている状態です。
第三段階：システミックな脅迫と「見せしめ」。 「同じ道を辿りたくはないでしょう？」「もう少し現実的になられた方が…」「あの会社とは距離を置くことにしました」――理由を示さない排除が、他の取引先への見せしめとして機能します。 これは「集合的懲罰」の論理であり、制裁の効果は、対象そのものよりも、周囲の行動変容によって発揮されます。
第四段階：金融統合主義への傾斜。 国家が直接検閲するのではなく、「リスク管理」という名目で民間金融機関が排除を執行する。国家は「政治的判断」を下さず、銀行が「規制遵守」としてそれを実行する。責任は分散され、誰も「検閲している」とは言わない。これが「金融統合主義」であり、民主的統治の空洞化です。



●金融システムを武器化する者のセリフ：

・「あの会社とは距離を置くことにしました。リスク管理上の判断です。」

・「あなたも同じ道を辿りたくはないでしょう？ 我々と協力するのが賢明です。」

・「もう少し現実的になられた方がよろしいかと。」

・「これは政治的な判断ではありません。あくまで規制遵守です。」

・「我々はリスクを管理しているだけです。誰も検閲などしていません。」

第 30 章 2 節　金と食料と職を管理支配する金融エリートによる「現代の飢餓作戦」

第 30 章 2 節 1 項　ナチスの飢餓作戦――「手を汚さずに殺す」という発明

1941 年、ナチスはソ連侵攻に先立って「飢餓計画（フンガープラン）」を立案しました。目標はソ連住民 3000 万人の餓死。結果、少なくとも 500 万人が餓死し、ソ連捕虜の死亡率は 57%を超えました。これが銃やガス室ではなく「食料を絶つ」ことで行われた――手を汚さずに殺せるという飢餓作戦の最大の特徴でした。



今、アメリカ人や日本人は、あり得ないような状況に置かれています。

そして、私たち一般市民や一般国民は「なぜ、こんなことが起きているのか？」と必死で問いかけていますが、政府やマスコミなど多くの人は無視します。

でも、実は、ナチスの飢餓作戦が今、もっと巧妙で洗練された形で、アメリカ国内や日本で進行しているとしたら？

第 30 章 2 節 2 項　なぜ、失業者が増え、物価が上がり、家を失う人が増えているのか？

イラン戦争でアメリカ人の職がなくなり、インフレでお金や食糧がなくなり、原油高で車や住宅を失っています。一般市民や一般国民は「戦争が長引いているからだ」「景気が悪いからだ」と思います。



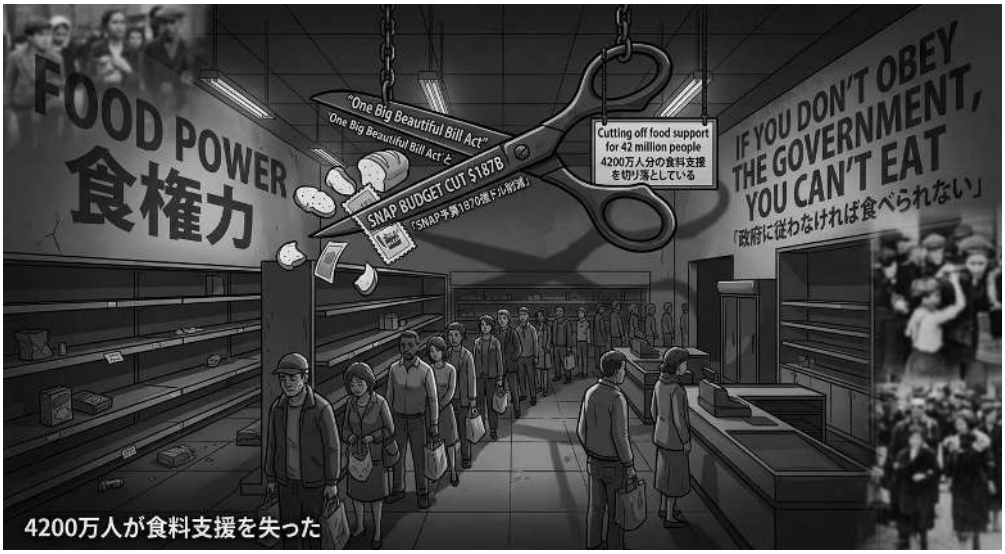
しかし、金融エリートの思考回路はこうです――「国民の困窮は投資機会である」。困窮した国民は安い労働力として搾取でき、失業者は住宅ローンを手放し、資産は金融エリートが買い叩く。一般市民や一般国民の苦境は、彼らにとって「チャンス」なのです。

彼らは「経済安全保障」という言葉で戦争を正当化し、「財政健全化」という言葉で救済を拒否します。しかしその裏で、彼ら自身の資産は 2025 年に 1.5 兆ドル増え、上位 10 人だけで 6980 億ドルも膨らんでいます。

第 30 章 2 節 3 項　なぜ、4200 万人が食料支援を失ったのか？

2025 年、トランプ大統領は「One Big Beautiful Bill Act」に署名し、SNAP（補給的栄養支援プログラム）の予算を 2034 年までに 1870 億ドル以上削減しました。240 万人のアメリカ人が食料支援から排除され、2025 年 11 月 1 日には 4200 万人が食料支援を失いました。

まんまと騙される一般市民や一般国民は「財政健全化のためだ」と思います。



しかし、これは「食権力」 ――食料の流通を握る権力者が国民の生死を左右する構造――そのものです。食料支援を削減すれば、国民は「政府に従わなければ食べられない」という恐怖を植え付けられます。これは飢餓を武器にした支配なのです。

ナチスがユダヤ人を餓死させたのと同じ論理で、金融エリートは食料を管理することで国民を支配しているのです。

第 30 章 2 節 4 項　なぜ、2000 万人が医療保険を失ったのか？

2026 年 1 月 1 日、オバマケア（ACA）の拡大補助金が失効しました。2000 万人以上のアメリカ人が医療保険料の急騰に直面し、保険料は 114%上昇したケースも報告されています。1 月の 1 日だけで、多くの人が保険を失い、医療を受けられなくなりました。

まんまと騙される一般市民や一般国民は「予算の都合だ」と思います。



しかし、医療へのアクセスを失った国民は、「健康を維持するために政府に依存する」しかありません。医療費を削ることで、国民は「政府の機嫌を損ねれば死ぬ」という恐怖の中で生きることになります。これは飢餓作戦と同じ構造です。医療を絶つことでゆっくりと殺しているのです。

第 30 章 2 節 5 項　なぜ、富裕層は国民を救済しないのか？

2025 年、アメリカの億万長者たちの総資産は 1.5 兆ドル増加しました。

彼らはアメリカ中のすべてのフードバンクに資金を提供することも、富裕層への増税を提案することもしていません。まんまと騙される一般市民や一般国民は「なぜ、助けないのか？」と思います。

しかし、金融エリートの思考回路はこうです――「救済することが支配構造を崩すから」。トランプ大統領が 50 万ドルのお金を配れば、国民は「トランプ大統領に感謝する」かもしれません。しかし、それは「トランプ大統領の善意」に依存する構造を作り出すだけで、根本的な解決にはなりません。



彼らが本当に恐れているのは、「富裕層への増税」によって、彼らの富が再分配されることです。だからこそ、彼らは「救済」ではなく「飢餓」を選ぶのです。

第 30 章 2 節 6 項　なぜ、ガザのような大量餓死が起きるのか？

ガザでは、イスラエルが食料・水・医療・燃料の搬入を制限し、大量餓死を引き起こしています。これと同じことが、アメリカ国内で進行しているとしたら。

まんまと騙される一般市民や一般国民は「まさか、そんなことはない」と思います。

しかし、金融エリートの思考回路はこうです――「飢餓が最も効率的な支配の手段だから」。食料を絶たれた国民は、抵抗する力を失います。



極限の空腹では、人は良心も失い、友人や家族同士でわずかな食べ物を奪い合う。社会は内部から崩壊し、支配者は「秩序を回復する」という名目で、さらなる権力を握るのです。

ナチスがユダヤ人を餓死させたのも、ガザでパレスチナ人が餓死させられているのも、そして今アメリカで進行しているのも――すべて同じ構造なのです。

第 30 章 2 節 7 項　思考停止で自滅する愚かな人たち

おかしな政策やおかしなことが起きていても、日本人は「なぜ、こんなことが起きているのか？」考えません。誰か専門家が答えをくれることを口を開けて待っているだけです。

彼らは「経済安全保障」「財政健全化」というややこしくて難しい用語や名目で隠蔽しながら、巧妙に食料・医療・住居へのアクセスや救済制度を破壊し、ガザのように大量餓死するように仕向けているのです。ナチスが銃やガス室で直接殺したのに対し、彼らは「手を汚さず・罪悪感も感じず・戦争というショックドクトリンを使い」、より巧妙で洗練された形で同じことを行っています。



そして最も恐ろしいのは、「騙されると死ぬ」という点です。

「財政健全化」「小さな政府」という美名を信じる国民は、自分たちが加害者であり、同時に次の犠牲者になりうることに気づきません。

第 30 章 3 節　イタリアの判例「貧しくて食べ物を盗んだら、罪になるのか？」

「貧しくて食べ物を盗んだら、罪になるのか？」

この問いに対して、日本の現実とイタリアの司法は、対照的な答えを出しています。

第 30 章 3 節 1 項　日本の現実――数百円の万引きでも逮捕される

日本では、困窮者が数百円の食料品を万引きしただけで逮捕される事例が後を絶ちません。2026 年 3 月、元タレントの坂口杏里容疑者がコンビニでサンドイッチ 1 個を万引きして逮捕されました。同年 1 月には、浜松市の夫婦が粉ミルクなど約 4 万円分を万引きして逮捕され、子どもがいることか

ら「生活に困窮していた可能性もある」と報道されました。2025 年には 87 歳の女性がおにぎり 2 個（518 円） を万引きして逮捕されています。



被害額は数百円から数万円程度で、動機が「生きるため」「子どものため」であるケースが多くても、日本の刑事司法は逮捕・勾留という身体拘束を伴う対応をとっています。

第 30 章 3 節 2 項　イタリアの判例――「生存の権利は財産権に優先する」
これに対して、イタリアの最高裁（破棄院）は 2016 年、まったく逆の判断を下しました。

2011 年、ホームレスのウクライナ人男性が、ジェノバのスーパーでチーズとソーセージ約 4 ユーロ（約 500 円）分を盗もうとしたとして逮捕されました。一審・二審では有罪判決を受けましたが、最高裁はこれを破棄し、無罪を言い渡しました。

判決の根拠は、イタリア刑法 54 条の「緊急避難」 です。「被告人は緊急かつ不可欠だった栄養摂取のために少量の食品を手にした」と認定されました。イタリア紙はこの判決を「生存の権利は、財産に勝っている」 と評価しました。

第 30 章 3 節 3 項　食料が不足するほどの困窮は政治と権力の責任である

日本とイタリアの判例の違いは、「食料を得る手段が他になかった」という状況を、国家がどう評価するかの違いです。

しかし、より根本的な問いはこうです――なぜ、先進国において、人が食料を盗まなければならないほど困窮するのか？

日本では、生活困窮者が炊き出しのコメ不足に直面し、高齢者の万引きは 2004 年の 17.1%から 2019 年には 38.3% に増加しました。これは「倫理観の歪み」ではなく、年金月 6.6 万円で生活する高齢者が、食料を得るために万引きに追い込まれている構造的問題です。



食料が不足するほどの困窮は、個人の努力不足ではなく、政治と権力の責任です。 食料を絶つことは、最も手を汚さずに人を殺す方法であり、ナチスの飢餓作戦から現代の経済制裁まで、権力者や政治家は意図的にそれを「天災」「自己責任」「財政健全化」として隠蔽してきました。

イタリアの判例は、「生存の権利は財産権に優先する」 という、あまりにも当然の真理を司法が認めたものです。この真理を認めない社会は、飢餓を政治的に利用し、国民の生殺与奪の権を握ろうとする権力に加担しているファシズム国家なのです。

第 31 章　エコーチェンバーとファシズム化——SNS が過激化を加速する

第 31 章 1 節　なぜ？——MAGA のプロパガンダマシンはどうやって作られるのか？

MAGA のオンライン情報発信は、高度に組織化されたシステムによって「高度に情報統制」されています。

このシステムは複数のグループチャットで構成され、情報が調整されています。

チャットは階層化されており、最上位には政府高官やトランプ家のメンバー、中位には有料キャンペーンを受ける大物 MAGA インフルエンサー、下位には同調することで承認欲求を満たす一般のインフルエンサーが位置します。



なぜ、こんなに組織化されているのでしょうか？ それは「世論が一致しているかのような偽装」を作り出すためです。事件が発生すると、ホワイトハウスや選挙陣営の広報担当者がグループチャットを通じて統一された反応トークを指示します。例えば、トランプ銃撃事件の直後、ほぼ全ての MAGA インフルエンサーが同一のメッセージを発信しました。

FOX ニュースのような大規模メディアに出演する際には、あらかじめジョークや話のポイントを提出・承認される必要があったと証言されています。つまり、彼らは「自由に発言している」ように見えて、実際には台本通りに演じているのです。

第 31 章 2 節　「嘘やデマ」で稼ぐビジネスモデルの全貌

このプロパガンダ装置の背後には、巨額の資金が企業や富裕層から流れています。MAGA の運営は本質的に巨大な「騙りビジネス（Grift Empire）」です。イーロン・マスクなどの富裕層が資金を投入して思い通りの政策を実現したり、世論工作するための、民主主義を富裕層がハッキングするための装置として機能しているのです。

資金はコンサルティング会社を経由して流れます。富裕層や企業が巨額の寄付をし、その選挙資金がコンサルティング会社に入り、そこからインフルエンサーに分配されることで、連邦選挙委員会（FEC）への報告義務を回避しています。これは「商品やサービス」に対する直接的な支払いと見なされないためです。つまり、法律の抜け穴を巧みに利用した合法的な違法行為――これが MAGA のビジネスモデルの核心です。



そして、多くの MAGA メディアやインフルエンサーは、プラットフォームから排除またはアカウント停止されることをむしろ歓迎します。これは「リベラルなテクノロジー大手や民主党による保守派弾圧」という構図とナラティブを作り、支持者の怒りと献金を喚起し、結果的により儲かるビジネスへと変貌させます。他人を騙して、無実の人をデマで傷つけて、怒りや憎しみを煽れば煽るほど儲かるビジネスモデルになっているのです。だから深く関わるほど儲かるけど、性格が邪悪なファシストになっていく――現代の武器商人のようなものですね。

第 31 章 3 節　なぜ？――エコーチェンバー内で「ファシズム」が完成するのか？

金を稼げて、過激化すればするほど、敵を攻撃すればするほど仲間から承認されるので、金と承認欲求を得るために、金が無い若い子や極右や犯罪者などが群がるようになります。



プラットフォームやチャットで共有される情報だけが正しい情報であり、それ以外はメディアが事実を語ろうが全て嘘やフェイクであると信じ込ませる。プラットフォームやチャットに依存させて、エコーチェンバー化する。そして、お互いに承認欲求や裏切りや異論を唱えることを禁止するルールを学習させて、言いなりに、指示通りに情報を拡散するプロパガンダマシンが形成されます。

そして、エコーチェンバー内で仲間から承認されることが法律に優先して、全ての最優先になって過激化するのです。

第 31 章 4 節　エコーチェンバー内で段階的にファシストに変貌する心理メカニズム

MAGA に勧誘された若者が、最終的に独裁やファシズムを肯定するファシストに変貌する過程は、以下の 7 段階を経て進行します。各段階で、彼らの思考と発言は少しずつ過激化していきます。



第 31 章 5 節　第 1 段階：入口――「居場所」と「承認」を求めて

社会的孤立や不満を抱えた若者が、MAGA のコミュニティに吸引されます。「お前は特別だ」「一緒に戦おう」という誘いの言葉が、居場所を失った若者にとって魅力的に映ります。Turning Point USA などの組織が大学に勧誘に来たり、チャーリー・カークのような著名人からの称賛や「特別ゲスト」への招待が、若者を引き込みます。この段階では、まだ政治的な主張は弱く、「仲間ができた」「認められた」という感覚が中心です。



●第 1 段階の典型的なセリフ：

「やっと俺のことを分かってくれる人たちに出会えた。」

「ここでは俺の意見を聞いてくれる。外の世界とは違う。」

「チャーリー・カークに認められたんだ。俺は特別なんだ。」

「まだよく分からないけど、みんなと一緒にいると安心する。」

第 31 章 6 節　第 2 段階：敵の定義を学ぶ——「リベラルは敵」という世界観

エコーチェンバー内で共有されるコンテンツに触れるうちに、「リベラルは頭がおかしい」「移民が国を壊している」「フェミニストは狂っている」という単純化された世界観が内面化されます。メディアは嘘をついているという認識が刷り込まれ、MAGA のチャットやプラットフォームで共有される情報だけが「真実」だと信じるようになります。

中絶禁止を支持することが「命を守る正義」として位置づけられ、反対する者は「殺人者を擁護する悪人」と見なされるようになります。



●第 2 段階の典型的なセリフ：

「リベラルは頭がおかしい。話しても無駄だ。」

「移民が増えて、俺たちの仕事が奪われている。」

「メディアは嘘ばかりだ。ネットで見たことだけが真実だ。」

「中絶は殺人だ。それを許すリベラルは人でなしだ。」

第 31 章 7 節　第 3 段階：極右コンテンツへの移行――アルゴリズムが過激化を加速する

TikTok や YouTube、X の推薦システムが、徐々に閉鎖的で過激なコンテンツへとユーザーを導きます。「移民が暴力を振るっている」「反ファが暴徒化している」「もう内戦が始まる」という動画を何度も見せられ、エコーチェンバーが形成されます。この段階で、彼らは「外の世界」と「自分たちの真実」を明確に区別し始めます。



●第 3 段階の典型的なセリフ：

「YouTube で見たけど、もう内戦が始まってるらしいぞ。」

「反ファはただの暴徒だ。警察がもっと強硬に出るべきだ。」

「SNS ではみんな同じことを言っている。これが真実だ。」

「外の世界の連中は愚かだ。我々だけが真実を知っている。

第 31 章 8 節　第 4 段階：ダーク・テトラッドの顕在化――「英雄」として称賛される快感

過激な発言をするほど仲間から称賛され、「英雄」扱いされることで、ナルシシズムとサディズムが刺激されます。「生意気なリベラルをぶっ殺せ」「あの女は実は淫売だ」「中絶をした女を罰しろ」「中絶医をぶっ殺せ」という過激な投稿が「いいね」を集め、攻撃性が「有能さ」の証明にすり替わります。この段階で、彼らは攻撃することが快感になっていきます。



●第 4 段階の典型的なセリフ：

「俺の投稿が 1000 いいねを超えた！ みんな俺を支持してる！」

「あのリベラルのアカウントを叩いたら、みんなが称賛してくれた。」

「敵を攻撃するのは正義だ。俺は正しいことをしている。」

「あいつを黙らせたときの快感はクセになるな。」

第 31 章 9 節　第 5 段階：道徳的免責の確立——「奴らは人間ではない」

非人間化と責任転嫁が進みます。「奴らは人間ではない」「我々は正義のためにやっている」という認知が形成され、罪悪感が消えます。バンデューラの道徳的免責理論が示す通り、内集団内では肯定され、外集団は腐敗し敵対的であるという認識が非人間化を促進します。この段階で、暴力を「正当な行為」と見なすようになります。



●第 5 段階の典型的なセリフ：

「奴らは人間じゃない。害虫だ。排除するしかない。」

「俺たちは正義のために戦っている。罪悪感なんて感じる必要はない。」

「あいつらが死んでも、それは自己責任だ。」

「我々の仲間を攻撃する者は、誰であろうと罰する。」

第 31 章 10 節　第 6 段階：政治的暴力への支持――「やまゆり事件」のような虐殺も肯定する

敵意的性差別→SDO→暴力という媒介モデルが機能します。

SDO が高い人々は、残酷でサディスティックなリーダーを好み、暴力を正当化します。この段階で、彼らは実際に暴力を振るうか、それを支持するようになります。やまゆり事件のように、障害者を「社会の負担」として虐殺する思想と結びつくこともあります。

●第 6 段階の典型的なセリフ：

「障害者に年金を払うくらいなら、安楽死させた方が社会のためだ。」

「移民収容所で死んだ？ そんなの自業自得だ。」

「警察がデモ隊を撃っても仕方ない。秩序を守るためだ。」

「敵は外にも内にもいる。徹底的に排除しなければならない。」

第 31 章 11 節　第 7 段階：ファシズム化――「独裁こそが正義」と信じる

民主主義を非効率だと否定し、独裁やファシズムを称賛するようになります。MAGA の家父長的な価値観と結びつき、強い指導者による秩序維持が「正義」とされるのです。この段階で、彼らは民主主義そのものを否定し、独裁を称賛するようになります。



●第 7 段階の典型的なセリフ：

「民主主義は非効率だ。強い指導者が必要だ。」

「秩序を守るためには、弱者を切り捨てることも必要だ。」

「中絶を禁止するために、大統領が議会を無視しても構わない。」

「自由など幻想だ。力こそがすべてだ。」

「我々は選ばれた者だ。この世界を支配する運命にある。」

このプロセスが意味するもの

エコーチェンバーは、普通の若者をファシストに変える培養器です。

最初は「居場所が欲しい」「認められたい」という人間的な欲求から始まったはずの若者が、アルゴリズムによる過激化、仲間からの称賛、道徳的免責の確立を経て、最終的には「独裁こそが正義」と信じるまでに至る。この過程は、本人たちが「自分は正しいことをしている」と確信しているだけに、非常に危険です。なぜなら、彼らは自分たちを「悪」だとは思っていないからです。彼らは自分たちを「正義の戦士」だと思っている。だからこそ、エコーチェンバーからの脱出は極めて困難なのです。

第 32 章　MAGA が自滅的な政策を支持していた仕組み

「なぜ、貧しい人々が自分をさらに苦しめる政策に投票するのか？」――これは「自己利益に反する投票」として研究されてきたテーマです。MAGA 支持者の多くは、オバマケアに反対し、フードスタンプ削減を支持し、トランプ関税で農場を失い、移民排除で労働力を失う――まさに「自業自得」になる政策を支持してきたのです。

しかし、それは単なる「思考力の欠如」ではありません。金融エリートの思考回路をエコーチェンバー内で内面化し、自分が弱者であることを忘れて「勝ち組」だと信じ込んだ結果なのです。

第 32 章 1 節　金融エリートの思考回路の内面化

MAGA のエコーチェンバー内では、「市場は最も賢い」「規制はコスト」「合法なら善」「貧しいのは自己責任だ」「メイカーとテイカーを区別しなければならない」という金融エリートの思考回路が、「自分たちの意見として共有」されます。

そして、「俺たちは賢い少数だ」「ルールは凡人を縛るもの」「我々は特別だ」という選民意識が内面化され、自分が弱者である立場を忘れて、「勝ち組」の側に立っていると信じ込むようになります。



「俺は貧しいかもしれないが、努力している。福祉に頼る奴らとは違う。」

「市場は正しい。規制は邪魔だ。自由にやらせろ。」

「貧しいのは自己責任だ。俺も苦労してきた。」

第 32 章 2 節　「人種的優越感」が物質的貧困を補償する

W.E.B.デュボイスが提唱した「白人性の心理的賃金」――物質的な貧しさを、人種的優越感という「”非金銭的報酬”で補うメカニズム」です。

貧しい白人有権者がトランプを支持するのは、彼の政策が「黒人や移民を標的にし、自分たちには向かない」と信じているからです。経済的に搾取されていても、人種的ヒエラルキーの上位にいるという感覚が「報酬」として機能し、福祉削減を受け入れてしまうのです。



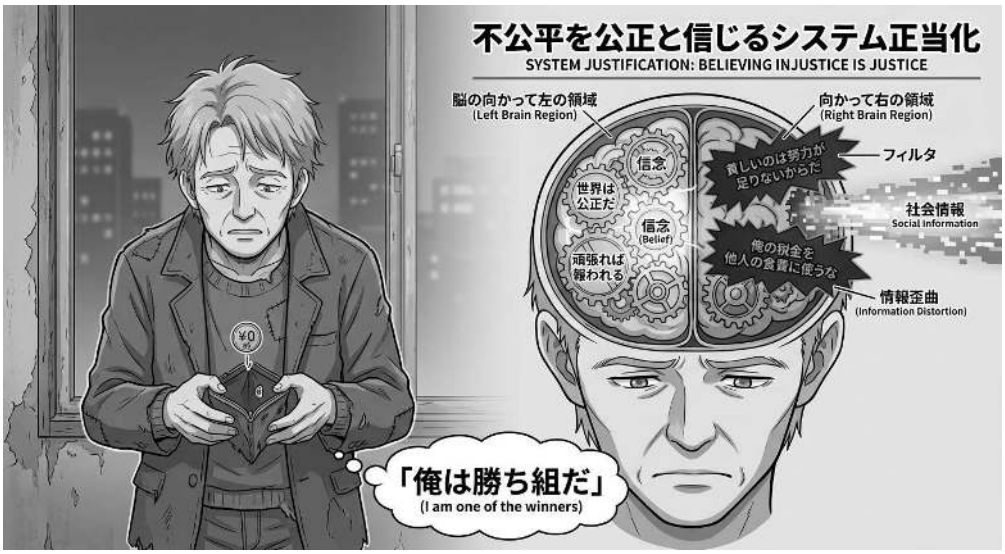
「俺は貧しいかもしれないが、少なくとも黒人よりはマシだ。」

「移民に仕事を奪われるくらいなら、貧しいままでいい。」

「福祉は怠け者のためのものだ。俺は働いている。」

第 32 章 3 節　「不公平を公正と信じる」システム正当化

システム正当化理論――人々が既存の社会構造を「公正で正当なもの」と見なす動機を持つことを説明します。貧困層が福祉削減を支持するのは、「世界は公正であり、貧しいのは自己責任だ」と信じることで、自分が搾取される側に回る恐怖を緩和している側面があります。金融エリートの思考回路を内面化した MAGA 支持者は、「市場は公正だ」という信念を共有することで、自分が搾取されている現実から目を逸らしているのです。



「世界は公正だ。頑張れば報われる。」

「貧しいのは努力が足りないからだ。自己責任だ。」

「俺の税金を他人の食費に使うな。」

第 32 章 4 節　「動機づけられた推論」が信念を守る

動機づけられた推論――自分の信念に矛盾する情報を無視し、信念を支持する情報だけを選択的に取り込む心理です。

「貧困は自己責任だ」という信念を守るために、矛盾する情報を無視するようになります。メディアや政治家によるネガティブ・キャンペーンが、この推論をさらに強化します。



「フードスタンプをもらっている奴らは、スマホを持っているじゃないか。」

「メディアは嘘をついている。本当のことはネットで見た。」

「SNAP の受給者はみんな怠け者だ。働けばいい。」

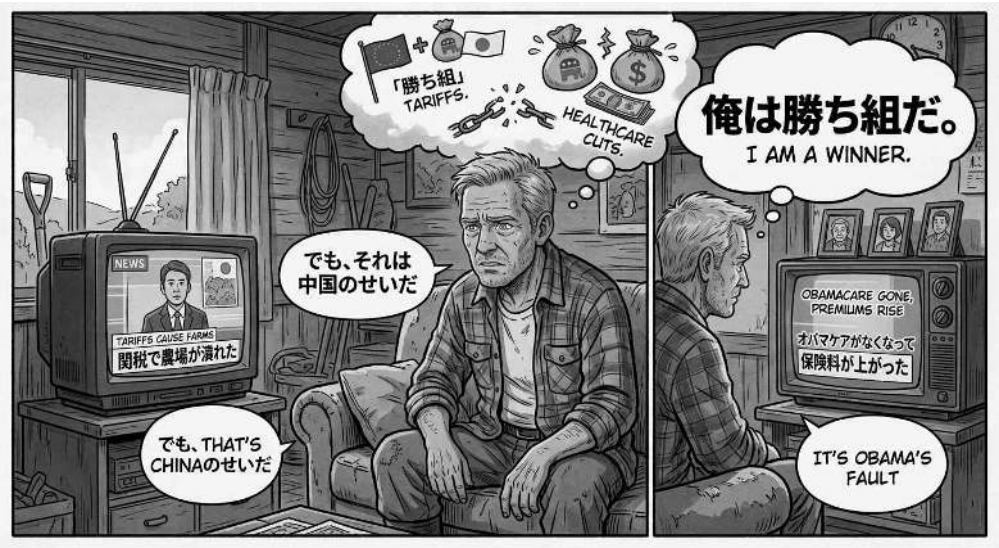
第 32 章 5 節　「認知的不協和」が支持を撤回できなくする

一度トランプや特定の政党を支持すると、認知的不協和が生じます。

「自分が支持している候補が、実は自分に不利益な政策を進めている」という矛盾です。

この不快感を解消するために、支持を強化する情報を求め、矛盾する情報を避けるようになります。

金融エリートの思考回路を内面化した MAGA 支持者は、「自分は勝ち組だ」という「信念を守るために、自分が弱者であるという現実を認められなくなる」のです。



「関税で農場が潰れた？ でも、それは中国のせいだ。」

「オバマケアがなくなって保険料が上がった？ オバマのせいだ。」

「俺は勝ち組だ。負け組とは違う。」

第 32 章 6 節　「エリートの分断統治」が不満をそらす

富裕層や政治的エリートは、人種的・文化的対立を煽ることで、貧困層の不満を横にそらす戦略をとります。黒人や移民への敵意を刺激することで、貧困層が自分たちの経済的不利益に目を向けるのを防ぐのです。これは「分断統治」の古典的手法であり、「心理的賃金」を支払うことで、物質的な搾取を隠蔽します。



「本当の敵は移民だ。彼らが俺たちの富を奪っている。」

「黒人が優遇されているから、俺たちは貧しいんだ。」

「エリートは悪くない。悪いのはあいつらだ。」

第 32 章 7 節　具体的な政策事例――「自業自得」の連鎖

① オバマケアへの反対。 共和党はオバマケアの拡大補助金を失効させ、MAGA 支持者自身の医療保険料を急騰させました。KFF の世論調査では、オバマケアに加入している共和党員の 72% が補助金の延長を支持していました。しかし「オバマケア」というレッテルだけで、81%が反対し、具体的な反対論を聞かされると 90%以上が反対します。

② フードスタンプ（SNAP）への攻撃。 トランプ政権は SNAP 給付を失効させようとしました。右翼メディアは「SNAP 受給者は怠け者だ」と繰り返しましたが、SNAP 受給世帯の 4 世帯に 1 世帯以上が子どもであり、80%以上が連邦貧困線以下です。SNAP 削減は MAGA 支持者自身のコミュニティに打撃を与えるにもかかわらず、「人種的レッテル」によって支持されてしまうのです。

③ トランプ関税による農業崩壊。 トランプの貿易戦争は、2025 年に農業貿易赤字を過去最高に押し上げ、家族農場の破産は 2024 年比で 46%急増しました。農家の 52%しか黒字ではなく、2026 年には 50%を下回ると予測されています。しかし MAGA 支持者の農家は「黒人農家の方がもっと苦しむ」という理由で、関税を支持し続けたのです。「自分も苦しいが、他

人はもっと苦しい」 ——これが「残酷さが目的」と言われる所以です。
④ 移民排除による農業労働力の喪失。 トランプの移民取締まりは、農業分野で 15 万 5,000 人の雇用を失わせ、農家は家畜を売却し、作物を腐らせました。しかし農家の多くは「移民を追い出せ」と叫ぶ候補者に投票したのです。自分たちの労働力を奪う政策を支持する——この矛盾は、「心理的賃金」と「人種的脅威」が物質的利益を上回ることを示しています。



第 33 章　おわりに：金融エリートの思考回路がファシズム国家を実現した

ここまで金融エリートの思考回路と価値観がどのように選民思想に結びつき、ファシズムを生み出すのかを追ってきました。

長年、多くの人々を困惑させてきた謎――「なぜ庶民が望まない戦争が起きるのか？」「なぜ巨悪が罰せられないのか？」「なぜファシズムが再び台頭するのか？」――その資金的・思想的・組織的メカニズムが、ようやく少し見えてきました。

第 33 章 1 節　誰が、どのようにして、世界中の人を苦しめているのか？

その主体は、一部の金融エリートと富裕層です。

彼らは「市場原理主義」を信仰し、「金融的還元主義」で人間を数字に置き換え、「ゲーム・戦争の比喩」で世界をゼロサムの戦場と見なし、「受託者責任の盾」で冷酷さを正当化し、「道徳的免責」で罪悪感を消し、「社会ダーウィニズム」で弱者切り捨てを正当化し、「短期主義」で目先の利益を最大化し、「集団同調とインセンティブ」で組織全体を搾取の構造に染め上げていく――これが彼らの思考回路です。



彼らは「経済 DV」という手口で、自国や他国を破壊します。

ベッセント財務長官が自ら認めたように、イランに「ドル不足」を人為的に作り出し、通貨を暴落させ、銀行を破綻させ、国民を路上に追い出し、それを「一発も撃たずにミサイル以上の成果を上げた」と誇らしげに語る。

ベネズエラでも同じ手口が使われ、世界最大の石油埋蔵量を持ちながら、国民は食料と医薬品の不足に苦しんでいます。これは「経済制裁」ではなく、国家規模の DV であり、現代版のナチスの飢餓作戦なのです。

第 33 章 2 節　なぜ、巨悪は免責されるのか？

彼らが反撃を恐れず「自分は安全だ」と信じられるのは、軍事・情報・金融の複合体があるからです。軍事産業複合体（MIC）が彼らの利益を守り、「大きすぎて潰せない（Too Big To Fail）」原則が「大きすぎて投獄できない（Too Big To Jail）」と同義になり、規制の捕獲（Regulatory Capture）と回転ドアが監視を骨抜きにし、ドル基軸通貨体制が圧倒的な経済的レバレッジを与えています。

そして今や、トランプの私兵と呼ばれる ICE、全知の監視システム Palantir、エプスタインファイルを隠蔽する FBI・CIA が、彼らの「無敵感」を最終的に裏付けています。



Palantir の予測警察システムは、個人の人間関係、金融取引、通信記録、移動履歴、健康データ、SNS の交友関係までも解析し、「この人物が次に何をしようとしているか」を予測します。反撃の兆候、訴訟の準備、告発の動き、組織化の試み――それらはすべて、実行される前にアルゴリズムによって検知され、無力化されます。相手の手の内はすべて読まれており、どんな動きも先回りして潰される。

だからこそ、彼らは「安心してゲーム感覚で人を踏みにじれる」のです。

第 33 章 3 節　なぜ、庶民が望まない戦争が起きるのか？

アメリカ国民の 6〜7 割がイラン戦争に反対していました。

にもかかわらず、JP モルガンのダイモン CEO は戦争を擁護し、金融エリートたちは戦争を支持しました。なぜか？ それはアメリカ政治が民主主義ではなく、富裕層による寡頭制になっているからです。巨額の献金で政治家と政策を買い、富裕層に不都合なことは隠蔽され、富裕層に都合の良い政策が実行され、トランプ政権の政治家たちも一緒に大儲けできる仕組みが出来上がっているのです。



第 33 章 4 節　ファシズムの資金的・思想的・組織的メカニズム

長年謎であったファシズムのメカニズムが、ここに見えてきました。



資金面では、MAGA のプロパガンダ装置は本質的に巨大な「騙りビジネス（Grift Empire）」です。イーロン・マスクなどの富裕層が資金を投入し、コンサルティング会社を経由してインフルエンサーに分配することで、連邦選挙委員会（FEC）への報告義務を回避します。大型右翼インフルエンサーの 99%が何らかの報酬を得ており、ある MAGA インフルエンサーは月額 40 万ドルと契約金 10 万ドルを受け取っていました。

法律の抜け穴を巧みに利用した合法的な違法行為――これがファシズムの資金メカニズムです。

思想面では、金融エリートの思考回路――市場原理主義、社会ダーウィニズム、選民意識、道徳的免責――がエコーチェンバー内で内面化されます。「俺たちは賢い少数だ」「ルールは凡人を縛るもの」「貧しいのは自己責任だ」という言説が共有され、自分が弱者であることを忘れて「勝ち組」だと信じ込むようになります。そして、「人種的優越感」が物質的貧困を補償し、「不公平を公正と信じる」システム正当化が不安を緩和し、「動機づけられた推論」が信念を守り、「認知的不協和」が支持を撤回できなくする――これがファシズムの思想メカニズムです。

組織面では、MAGA の情報発信は高度に組織化されたシステムによって「高度に情報統制」されています。最上位には政府高官やトランプ家、中位には

有料キャンペーンを受ける大物インフルエンサー、下位には同調することで承認欲求を満たす一般のインフルエンサーが位置します。事件が発生すると、ホワイトハウスや選挙陣営の広報担当者がグループチャットを通じて統一された反応トークを指示し、世論が一致しているかのような偽装を作り出すのです。そして、エコーチェンバー内で仲間から承認されることが法律に優先して、全ての最優先になって過激化していきます。



第 33 章 5 節　エコーチェンバーは、普通の若者をファシストに変える培養器

MAGA に勧誘された若者は、7 段階を経てファシストに変貌します。第 1 段階では「居場所」と「承認」を求めてコミュニティに吸引され、第 2 段階では「リベラルは敵」という世界観を学び、第 3 段階ではアルゴリズムによる過激化で極右コンテンツに移行し、第 4 段階では「英雄」として称賛される快感でダーク・テトラッドが顕在化し、第 5 段階では「奴らは人間ではない」という道徳的免責を確立し、第 6 段階では「やまゆり事件」のような虐殺も肯定するようになり、第 7 段階では「独裁こそが正義」と信じるようになります。



そして、貧しい人々が自分をさらに苦しめる政策に投票するのは、金融エリートの思考回路をエコーチェンバー内で内面化し、自分が弱者であることを忘れて「勝ち組」だと信じ込んだ結果です。オバマケアに反対し、フードスタンプ削減を支持し、トランプ関税で農場を失い、移民排除で労働力を失う——まさに「自業自得」になる政策を支持してきたのです。しかし、それは「思考力の欠如」ではなく、心理的報酬とアイデンティティ防衛が絡み合った、構造的な現象なのです。

第 33 章 6 節　それでも真実を選んだ人がいる——アシュリー・セント・クレアの勇気

ここで、私たちは一つの具体的な事例を見なければなりません。金融エリートの構造から離脱することがいかに困難で、それを乗り越えた人間がいるという事実を。

第 33 章 6 節 1 項　MAGA を離脱する者への嫌がらせ

MAGA や金融エリートの世界から離脱しようとする者には、あらゆる手段で嫌がらせが行われます。

・SNS での言及をきっかけに、自宅周辺に不審者が毎日のように現れる

・子供の学校や野球の試合にまで押しかけ、関係者へのハラスメントが行われる

・家族や友人など、本人に関わる全ての人々が嫌がらせの標的になる

・多額の資金を投じた組織的な脅迫であり、一個人のストーカー行為ではない

・家庭裁判所を利用して子供を人質に取り、離脱を阻止しようとする

・離脱した者を「裏切り者」として扱い、見せしめとして警告の標的にする

・他の離脱希望者に対し「声を上げたらどうなるか」という冷え込み効果を与える

第 33 章 6 節 2 項　それでも真実を選んだ勇気

アシュリー・セント・クレア氏に対して、イーロン・マスクは巨額の NDA（秘密保持契約）による口封じを行いました。

マスク氏側から 4,000 万ドル（一括 1,500 万ドル＋21 年間にわたり月額 10 万ドル）の NDA を提示されました。生涯にわたる沈黙と引き換えの金額です。しかし、アシュリーは、4,000 万ドルの NDA を拒否しました。彼女はこう語っています。

「黙って子供たちを沈黙の中で生きさせることに値する金額なんてない。」

彼女が離脱を決意した最大の理由は、子供たちへの模範でした。

「私は子供たちに、物質的な快適さや特定の階級に属することを選ぶよりも、正しいことをすることを選ぶべきだという模範を示したかった。」

彼女は自分が加害者だったことも認めています

そして今、トレバー・プロジェクトへの資金提供、収益の寄付、公式機関への情報提供を通じて、償いの活動を続けています。

【YouTube Video】イーロン・マスクと MAGA はいかにして詐欺帝国を築き上げたのか…アシュリー・セント・クレアと共に！



第 33 章 6 節 3 項　本当の強さとは何か？
彼らは「弱者を踏み躙るのが強者の証」と錯覚しています。

しかし、踏み躙らなければ自分の価値を確認できないのは、むしろ弱さです。イーロン・マスク氏の元側近が「彼は私が会った中で最も惨めな男だ。だからその惨めさを周囲に撒き散らしている」と証言したように、権力と富を得た者が、その空虚を埋めるために他者を踏み躙るという構造そのものが、彼らの弱さの証明なのです。

本当の強さとは、市場で勝つことだけではなく、自分が出した影響に責任を持ち、弱い立場の人を尊重できることです。 4,000 万ドルを拒否し、子供の安全を脅かされながらも真実を語り、自分が傷つけたコミュニティに償おうとする――セント・クレア氏の姿こそが、真の強さの証明なのです。

ファシズムは決して過去の遺物ではありません。

それは、金融エリートの思考回路がエコーチェンバー内で増幅され、軍事・情報・金融の複合体に守られながら、今この瞬間にも再生産されているので

す。そして、私たち一人ひとりが、その構造に気づき、声を上げ、連帯し、制度を変えていくことが、ファシズムを止める唯一の道なのです。

ここで、私たちは一つの具体的な事例を見なければなりません。金融エリートの構造から離脱することがいかに困難で、それを乗り越えた人間がいるという事実を。

第 5 部：同意の偽装工作―「自発的に同意した」という嘘が、あなたの尊厳を奪う

第 34 章　「戦争を支持する」おかしな国民の正体は何なのか？

前巻では、金融エリートの思考回路がエコーチェンバー内で増幅され、ファシズムが再生産されるメカニズムを見てきました。彼らは「経済 DV」という手口で他国を破壊し、国民を困窮化させ、それを「一発も撃たずにミサイル以上の成果」と誇る。そして、その構造を支えているのが「道徳的偽善」と「同意の偽装」でした。

その延長線上にあるのが、第 3 巻で見たような虚偽報道です。トランプ政権や高市政権などのファシスト政権は、虚偽報道を繰り返し、あたかも「大勢の国民が賛成している」かのように見せかける手法で、戦争状態を維持しようと画策します。つまり、「大勢の国民が戦争に同意している」という偽装工作です。



女性に対する性行為の強要で「同意の偽装」は、日本では昔から頻繁に使われていた手法です。年貢を沢山取り立てて、農家を貧困や食糧不足に追い詰め「娘を売らせる」、借金の返済のために「風俗をやらせる」など、経済的に追い詰めて同意させる手法は昔からあった手段です。

さらに最近は、この手法が性被害の場面にも悪用されています。性被害を訴えた被害者に対して、「相手から誘った」「同意していた」というデマを流し、あたかも「性被害者が自発的に行為に及んだかのように見せる”同意の偽装工作”が多発」しています。

もちろん、袴田事件のように「事実無根の冤罪であれば無罪を主張し続けるのは問題ありません」。しかし、罪を認めないために事実を歪め、被害者に責任を転嫁するのであれば、それは極めて悪質な手口です。

特に、AV などの現場では、「麻薬や大金を使って」女性から「レイプしてほしい」と言わせるような「同意の偽装工作」が行われることがあります。

また、慰安婦問題や徴用工問題では、一部の自発的な事例を誇張し、その他多くの「強制を隠蔽したり、歴史を捏造したりする手法」が使われてきました。

この記事を読み終える頃には、あなたは「”自発的同意”という言葉の裏に隠された、最も卑劣な支配技術の全体像を理解」しているはずです。そして、日本の専門家が被害者を見捨てて、加害者の味方をしていることを知ることになるでしょう。

※注意：「同意の偽装工作」や「同意の偽装設計」は、ファシストたちが悪用する巧妙な犯罪を理解するために、この記事で定義している言葉です。似た概念に「マインドコントロール」や「洗脳」もありますが、ここでは読者の皆さんに分かりやすく理解してもらうために、「同意の偽装工作」「同意の偽装設計」という言葉を使います。

第 35 章　「同意の偽装工作」とは何か？――見えない脅しの正体

第 35 章 1 節　「同意の偽装工作」と普通の脅しの違い

Q.「同意の偽装工作」と聞いても、ピンとこないのですが、普通の脅しと何が違うのですか？

普通の脅しは、証拠が残ります。

「金を払え」「言うことを聞け」と直接言えば、脅迫罪になります。

しかし、「同意の偽装工作」は、直接的な暴力や脅迫を表に見せず、被害者だけに恐怖を伝え、周囲には「自発的同意」に見せる「支配技術」です。

核心は、脅しの証拠を残さず、同意の外形だけを回収し、事前に被害者の信用を壊し、事後に「合意だった」という物語を既成事実化することにあります。

「支配技術」と言うのが最大の特徴であり、「ファシストたちの核心的手法」でもあります。



第 35 章 2 節　「同意の偽装工作」を卑劣だと感じる理由

Q. なぜ、それほど卑劣だと感じるのですか？

卑劣に感じるのは、相手を屈服させるだけでなく、屈服したことを「自分で選んだ」ことにしてしまうからです。強制的に従わされた人を「自発的だった」と事実を捏造する―これは、慰安婦や徴用工を「自発的に従事していた」と歴史を改ざんする手口とまったく同じ構造です。「自分からレイプされたかったのだ」、などと事実を歪める論理と同じなのです。



第 35 章 3 節　「同意の偽装工作」はどんな状況で使われるのか？

Q. 具体的には、どんな状況で使われるのですか？

弱い立場・主張しにくい立場の相手に対し、直接暴力や明確な脅迫を見せず、集団で不可視の圧力・排除・監視・報復を加え、拒否不能な状況を作り、周囲には「”本人が自発的に同意した”と見せる支配技術」です。

いじめ、職場・組織の嫌がらせ、村八分、SNS 炎上、権力濫用、性被害後のデマ、政治的な同意偽装まで、「構造は共通」しています。

逆に言えば弱い立場の人を支配するための「権力技術や権力犯罪」だとも言えます。



第 35 章 4 節　なぜ被害者は「脅迫として説明できない」のか？

Q. なぜ、被害者は「脅されているのに、脅迫として説明できない」のですか？

それは、脅しが「曖昧で否認可能」な形で行われるからです。「お前の家族のこと、知ってるよ」「最近お母さん元気？」「会社に言う」「みんな味方だ」――直接「殺す」と言わず、被害者だけが理解できる形で危害を示唆します。

周囲には「何も言っていない」「普通の会話」に見えるため、被害者は「”脅されているのに、脅迫として説明できない状態”に追い込まれ」ます。

「脅迫」が説明できない理由。　Why Coercion Cannot Be Explained.



見た目は穏やかだが、隠された威圧感と、逃げられない恐怖。

A peaceful appearance, but with hidden coercion and inescapable fear.

第 36 章　具体的な事例――「同意の偽装工作」はこうして作られる

Q.では、この「同意の偽装工作」は、実際にどのような場面で使われてきたのでしょうか？

基本的に「性欲、金銭欲、支配欲、破壊欲」など、「自分の欲望をコントロールできない精神的に未熟な人間が行い」ます。

例えば、性加害に関しては、ざっくりと次のような違いがあります。

・まともな男：性行為したい ➡️ 断られる ➡️ 性行為を諦める

・性加害男：性行為したい ➡️ 断られる ➡️ 自己正当化の屁理屈を並べて性行為を強行する

ここでは代表的な 5 つの事例を、簡単に紹介します。このような観点からも読みながら考えてみてください。



第 36 章 1 節　事例①：特攻隊の「志願」――周囲が志願するフリをして、断れなくする

特攻隊では、建前上は「志願」とされていました。しかし、実際にはすべてが自発的な志願だったわけではありません。

一部では、周囲が先に「志願する」と表明したり、志願するフリをしたりすることで、狙われた人物に「自分だけ志願しないのはおかしい」「非国民だ」という同調圧力をかけ、志願せざるを得ない状況に追い込む手口が使われていました。

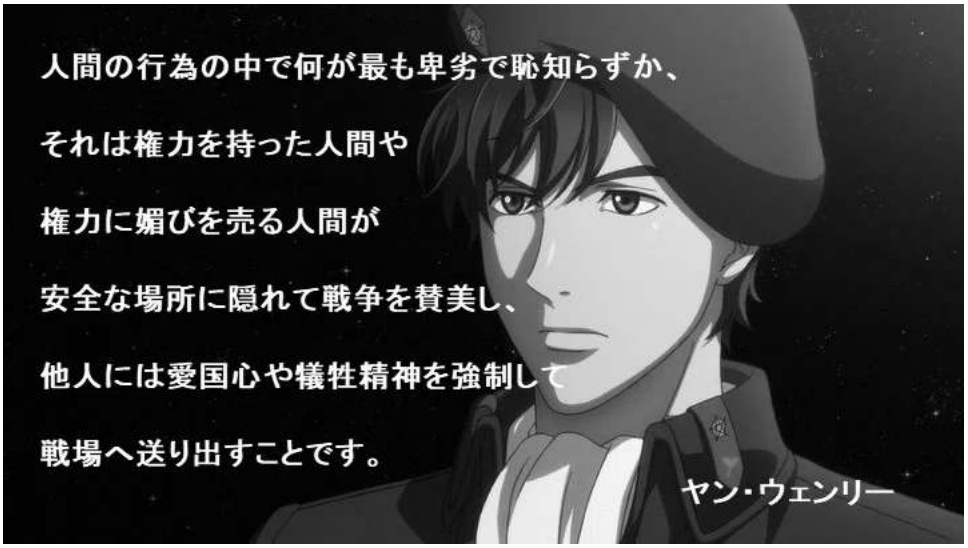
「本人が本当に望んで志願したように見せることで、命令や強制の責任を消し」、周囲には「本人が自発的に選んだ」と見せかける。これは、まさに「同意の偽装工作」の典型です。17 歳で特攻死した朝鮮人特攻隊員は、上官から「家族の世話はするから安心しなさい」と言われて志願を「強要」されたと、家族に打ち明けています。もちろん、嘘で家族の世話なんてしません。




志願します！
I volunteer!
私も、お国のために！
I also, for our nation!
命を捧げます！
I dedicate my life!
行くぞ、突撃！
Let's go, charge!
非国民
HIKOKUMIN
"UNPATRIOTIC TRAITOR/
NON-PATRIOT"
同調圧力
（どうして俺だけ……）
"Why only me..."
（みんなが行くから……）
"Because everyone else is going..."
（仕方ない……）
"It can't be helped..."


かしら〜〜〜
中！
これより
神風特別攻撃隊の
志願をつのる
戦局は
ますます厳しく
なっておる
必殺の爆弾を
だいて
敵艦に
ぶちあたり
戦局を
逆転させてくれ
志願兵は
一歩
前へでろっ
……
ザッ
ザッ
……
ジロリ
この隊には
女のような
くさった
おく病者が
いるのう
……
国のために
命を
すてられない
とは
情けないものよ
ジロリ
ジロリ
おれは
まだ
死ねん…
おれにはほかに
身よりのない
年とった
おふくろが
いるんだ
このおれが
死んだら
だれがおふくろ
のめんどうを
みるんだ
それに　おれと
結婚する日を
まっていてくれる
夏子さん

「本人が本当に望んで志願したように見せることで、命令や強制の責任を消し」、周囲には「本人が自発的に選んだ」と見せかける。これは、まさに「同意の偽装工作」の典型です。「志願」という建前があっても、「命令権者や責任者は、自分の責任や罪を免れつつ、共犯者とグルになってターゲットを陥れる手法を”発明”」し、「事実上の”犠牲の強制”を実現していた」のです。



この構造は、特攻隊に限ったことではありません。

権力者や権力に媚びる者が、自分は安全な場所にいながら、他人にだけ犠牲を強要する―これは、洋の東西を問わず、時代を超えて繰り返されてきた支配の手口です。

その本質を、驚くほど鋭く言い当てたフィクションがあります。

田中芳樹の小説『銀河英雄伝説』の主人公、ヤン・ウェンリーの言葉です。ヤンは、査問委員会で「平和は人間の精神を堕落させる」と戦争を賛美する委員たちを前に、こう言い放ちます。

> 「人間の行為の中で何が最も卑劣で恥知らずか？それは権力を持った人間や権力に媚びる人間が安全な場所に隠れて戦争を賛美し、他人には愛国心や犠牲心を強制して戦争に送り出すことです」

さらにヤンは、こう続けます。

> 「宇宙を平和にするには帝国と無益な戦争を続けるよりはまずその種の寄生虫を駆除することから始めるべきではないでしょうか」



第 36 章 2 節　事例②：「鬼畜米英」とスパイ・レッテル――敵を作って同調圧力を強める

戦前の日本では、「鬼畜米英」というスローガンが広められ、アメリカやイギリスを極悪な敵として描くプロパガンダが行われました。そのうえで、兵隊になること、徴兵されること、出兵することが「名誉」「誇り」であると教え込まれました。反対したり疑問を口にしたりする人は、「非国民」「国賊」とレッテルを貼られ、黙らされました。

現代でも、同じ構造が使われています。中国やロシアを敵視し、政府や権力に批判的な人に対して「中国のスパイ」「ロシアのスパイ」というレッテルを貼ることで、周囲が黙り込み、正しい意見や事実を言えなくなるのです。

敵をでっち上げ、レッテルを貼ることで、「みんなが賛成している」ように見せかけ、反対者を孤立させる。これも、同意の偽装工作の一種です。



第 36 章 3 節　事例③：芸能・AV 業界――同調圧力でヌードや AV 出演に追い込む

売れなくなった芸能人、グラビアアイドル、アナウンサーなどに対して、同僚や周囲の男たちが同調圧力をかけ、ヌード写真や AV 出演を承諾させる手口も問題になってきました。

そこでは、「この仕事を断ったら終わりだ」「みんなやっている」「売れるためには仕方ない」「芸術だ」「ファンが望んでいる」といった言葉が使われます。

仕事を失う不安、借金、人間関係、業界での立場を人質に取ることで、本人が本当に望んでいないのに「”自分から望んで脱いだ”ように見せかける」のです。

でも、これも嘘であることは少し考えたら分かるハズです。

もし本当に「自分から望んで脱いだ」のなら、同調圧力など必要ないはずです。極端な話、誰かに「脱げ」と言われなくても、自分で決めて脱げばいいので、裸で外を歩けばよいだけです。

何らかの方法で同意の偽装工作行われた結果だと言えるでしょう。

例えば、「あなたにも需要があるんだから、感謝すべきだよ」など言われて、「嫌々やってると思われたら、ファンが離れるよ」と「自発を強要され」、「本人もノリノリだったよ」などと事後に「合意だった」という物語を広め、被害者が声を上げても信用されないようにしたりして、「”自分から望んで脱いだ”物語」が拡散して既成事実化されてしまいます。



第 36 章 4 節　事例④：統一協会の念書とビデオ――「自発的献金」に見せる工作

旧統一教会をめぐっては、「高額献金が”自発的だった”」と見せるために、「信者に念書を書かせ、その様子をビデオで撮影していた事例」が問題となりました。

念書には、「献金は自発的で、損害賠償を求めない」といった内容が書かれ、教団側はそれを「本人の自由な意思」の証拠として使おうとしました。しかし、2024 年 7 月 11 日の最高裁判決は、こうした念書について、「公序良俗に反し無効であると判断した」と報じられています。

つまり、形式的に「はい」と言わせ、書面や映像に残しても、それが拒否困難な状況で作られたものであれば、同意として無効なのです。これは、まさに「同意の偽装工作」が司法の場で暴かれた事例と言えます。



第 36 章 5 節　事例⑤：集団レイプ――「同意書」まで書かせて「自発的」に見せる

集団レイプの最も悪質な手口は、暴行そのものよりも、暴行の後に「同意書」を書かせ、動画を撮影し、それを「自発的な性行為の証拠」として使おうとする点にあります。

第 36 章 5 節 1 項　事例⑤-1：日本の集団レイプ事件

2025 年 6 月、大阪府内のマンションで、20 代の女性が 3 人の男に押し入られ、包丁で脅されたうえで集団的な性的暴行を受けました。加害者たちはインターネットのアダルトサイト掲示板で知り合い、事件の数時間前に初めて顔を合わせ、「エス」「ゼット」「ボス」と呼び合って役割分担を決めていました。

暴行後、彼らは「女性の身分証を撮影して職場や実家の住所を聞き出し」、「他言すれば家族を殺し、動画もばらまく」と脅しました。そして、「”同意書”と題した書面を書かせた」のです。さらに、「暴行の様子を動画に収めて」いました。

この手口の恐ろしさは、「”同意書”という外形的な証拠」が、後から「”彼女は同意していた”という物語を作り出すために使われる点」にあります。も

し被害者が声を上げても、「ほら、同意書があるだろう」「自分で書いたんだろう」と言われる。動画も「楽しんでいた証拠」として使われる。しかし、包丁で脅され、家族を殺すと脅され、逃げ場をなくした状態で書かされた「”同意書”は、同意ではありません」。



これは人質事件やテロ事件で考えたらすぐにわかると思います。

下の銃口を突きつけられたブルース・ウィリスのように、テロリストに捕まって、銃口を突きつけられて「YES と言わされた動画」が発信されても、誰も同意とは思いませんよね？



第 36 章 5 節 2 項　事例⑤-2：フランスの集団レイプ事件

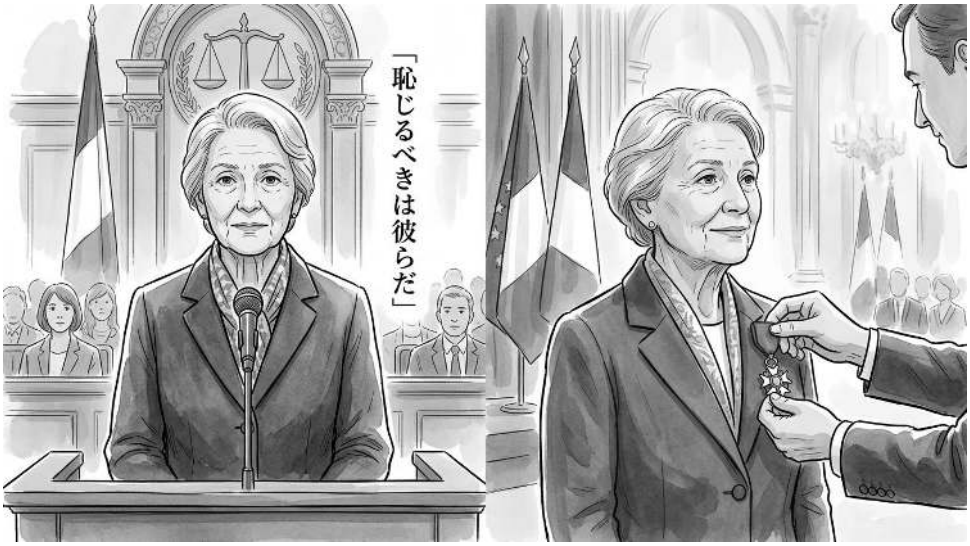
同様の構造は、フランスのペリコ事件でも見られました。主犯の旦那のドミニク・ペリコは 10 年間にわたり、薬で意識を失わせた妻のジゼル・ペリコさんを数十人の男たちにレイプさせていました。参加した男たちの多くは「”夫婦の同意にもとづくプレイだと思っていた”と主張」しましたが、ドミニク自身は「”全員レイプだとわかっていた”と供述」しています。

つまり、加害者たちは「”同意があったという物語を共有”しながら」、「内心ではそれがレイプであることを知っていた」のです。

加害者たちが如何に卑劣な嘘つきであるか？わかるかと思います。



性被害者のジゼル・ペリコさんは裁判で匿名権を放棄して実名で証言し、「恥じるべきは彼らだ」と訴えました。この勇気ある行動はフランス社会に大きな衝撃を与え、女性に対する性暴力の問題への関心を高めるきっかけとなりました。事件後、ジゼルさんはフランス最高位の勲章である「レジオン・ドヌール勲章（シュヴァリエ等級） を授与」されています。また、この事件はフランスのレイプ法において「同意」の概念を明記する法改正を促すなど、社会的・法的な変革をもたらしました。



第 36 章 5 節 3 項　事例⑤-3：日本の集団レイプ事件

日本のスーパーフリー事件でも、サークルの内部では「回し（輪姦）に参加しないスタッフは一人前ではない」という同調圧力が存在し、輪姦が「”仲間の連帯感を高める行為”として正当化」されていました。被害者の中には「泣き寝入りした者や自殺した者」もいましたが、起訴されたのは約 30 件の被害届のうちわずか 3 件でした。



これらの事例に共通するのは、「集団で囲い込み、逃げ場をなくし、形式的な”同意”を作り出し、それを対外的な正当性として使うという構造」です。

一人でやるレイプよりも、集団でやるレイプの方が「”同意の偽装”が容易」になります。なぜなら、複数の人間が「”彼女は同意していた”と口裏合わせをすれば」、周囲はそれを信じやすくなるからです。そして、被害者は裏切りが多発することで、周りが全員敵に見えたりして、「誰に誰を訴えればいいのか分からない状態に追い込まれる」のです。

第 37 章　加害の全体構造――なぜ集団だと加害者を特定できないのか？

第 37 章 1 節　集団犯罪の加害者特定の困難さ

Q. なぜ、集団でやられると加害者を特定するのが難しくなるのですか？

加害が集団で行われると、役割分担によって誰が主犯か分からなくなるからです。

首謀者、実行役、情報提供役、扇動役、傍観者、仲裁を装う者―それぞれが少しずつ加害に加担し、一人ひとりの行為は「違法・有害と証明しにくい微細なもの」になります。その結果、被害者は「”誰を訴えればいいか分からない状態”に追い込まれ」ます。闇バイトのような組織犯罪の場合、受け子や出し子など、全体像も見えず、罪悪感を感じないため、「知らずに平気で悪事や凶悪な犯罪に加担してしまう」のと同じです。



第 37 章 2 節　ネットリンチの加害者特定の困難さ

Q. ネットリンチも同じ構造ですか？

はい、まったく同じです。ネットリンチでは、匿名の加害者たちが一斉に攻撃を加えます。一人ひとりの投稿は「ちょっとした悪口」に見えるかもしれませんが、それが何百、何千と集まれば、「被害者にとっては殺人級の攻撃」になります。

しかし、加害者を特定しようとしても、「匿名性と役割分担の壁」に阻まれ、泣き寝入りするしかないのが現実です。

逆に権力ある加害者はその非対称性を巧みに使ってターゲットを次から次へと変えて犯行を繰り返します。



第 37 章 3 節　集団による「同意の偽装工作」の演出手順

Q.「自発的同意」に見せる演出は、どのように行われるのですか？

集団による同意偽装は、だいたい次の順で進みます。

1. 同意の前に、被害者の信用を下げる。
「あの人は嘘つき」「金目当て」「精神が不安定」と噂を流す。

2. 拒否コストを極端に上げる。
仕事、住居、家族、評価、安全、人間関係を人質にする。

3. 形式的な同意を取る。その場で「はい」と言わせ、
周囲には「本人も納得した」と見せる。

4. 同意後も撤回させない。一度 yes と言ったら終わりにし、
撤回すれば報復・デマ・排除が来る。

5. 事後に「合意物語」を広める。
「本人から誘った」「ハニトラ」「恋人同士」
―被害者が異議を唱えると、集団で「異常」「恩知らず」とする。

6. 真実を曖昧にする。誰がやったか、
何が脅しだったか、どこからが強制だったかを分からなくする。



第 37 章 4 節　集団による「同意偽装工作」の役割分担

Q. 加害集団には、どんな役割があるのですか？

加害集団は、以下のような役割に分かれます。

・首謀者：全体を設計する。直接手を汚さない。

・実行役：嫌がらせ、脅し、性暴力、排除を担う。

・情報提供役：被害者の弱み、行動、人間関係を流す。

・扇動役：噂、デマ、ハニトラ説を広める。

・傍観者：見て見ぬふりで加担する。

・仲裁者偽装：被害者に「自分が悪い」「穏便に」と説得する。

・専門家偽装：医師、弁護士、宗教者、カウンセラー、
上司として支配を正当化する。

・事後処理役：示談、口封じ、名誉毀損、逆告訴を担う。



第 37 章 5 節　「同意の偽装工作」はテロ被害と同じ

Q. この構造で、何が壊されるのですか？

マノスフィアでも見てきましたが、「同意の偽装工作」は「テロと同じ」です。

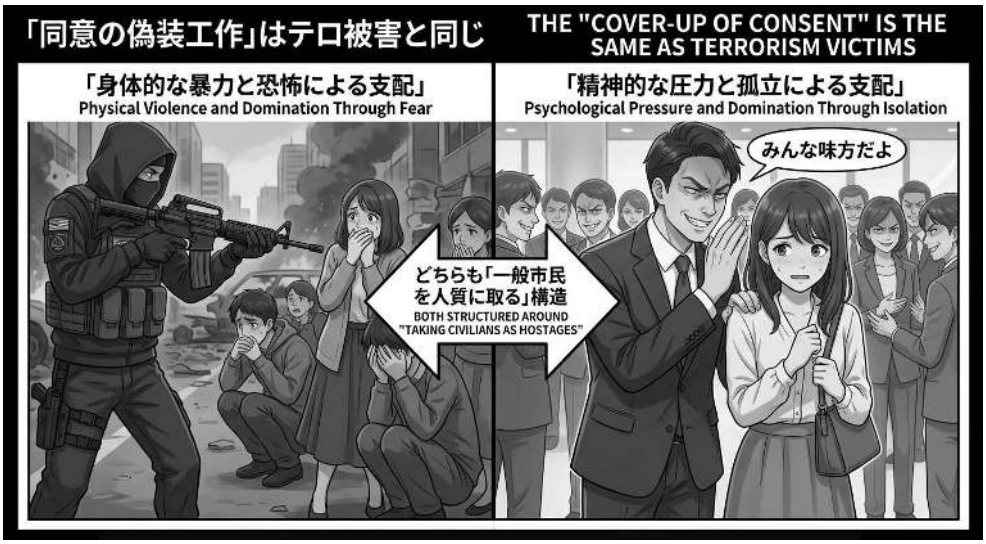
「一般市民や被害者の安全、安心、自由や権利、財産、仕事、経済的自律が破壊されて、現実認識を狂わされて人生も破壊され」ます。

基本的に、テロとは一般市民の生活を人質に取って、相手を脅迫し、自分の思い通りに従わせる手口の一つです。誰にどこから脅迫されているか分からないけど、脅迫されている―という「テロの一形態が”同意の偽装工作”」です。

「ファシズム国家が最も得意とする統治手法」です。
安全、安心、自由。身体・性・生殖の自己決定。尊厳、信用、人間関係。財産、仕事、住居、経済的自律。記憶と現実認識。司法・警察・制度への信頼。

そして「最も深刻なのは、”同意”という概念そのものが壊されること」です。暴力そのものより、「暴力がなかったこと」にされ、「被害者が”自分で同意した”ことにされる」―「加害者が加害責任と罪や賠償を巧妙に逃れるところが “卑劣さの核”」です。

「ジェノサイドや虐殺やレイプは無かった」と言い続けて「被害を無かったことにする」ファシズム国家ならではの手法です。



第 38 章　「無理矢理 yes」と言わせる支配設計――性行為における同意の偽装

「同意の偽装工作」、つまり、相手に「”無理矢理 yes”と言わせる手法」は、主に「ビジネス」と「女性との関係」でよく使われます。

例えば、ビジネスに関しては、ざっくりと次のような違いがあります。

・まともな男：売りたい & 儲けたい ➡️ 断られる ➡️ 販売するのを諦める

・搾取男：売りたい & 儲けたい ➡️ 断られる ➡️ 相手を監禁したり騙したり、脅したり、相手の持ち物を破壊して販売を強行する



例えば、性加害に関しては、ざっくりと次のような違いがあります。

・まともな男：性行為したい ➡️ 断られる ➡️ 性行為を諦める

・性加害男：性行為したい ➡️ 断られる ➡️ 自己正当化の屁理屈を並べて性行為を強行する

この章では、「性行為における同意の偽装」に焦点を絞って解説します。



第 38 章 1 節　「同意の偽装工作」が、性行為に悪用されるとどうなるか？

Q. この「同意の偽装工作」が、性行為に悪用されるとどうなりますか？

異性愛文脈で、加害者（多くは男性）が女性に「無理矢理 yes」と言わせる支配設計になります。核心は、「はい」と言わせること自体ではなく、拒否できない状況を設計し、表向きの同意を偽装することです。法的・倫理的には、拒否が困難な状態での yes は同意ではありません。



第 38 章 2 節　「性同意偽装工作」の手口

Q. 具体的には、どんな手口があるのですか？

卑怯・卑劣さが出る手口として、以下のようなものがあります。2025 年 6 月に大阪府内で起きた集団レイプ事件が典型例です。少し繰り返しになりますが、再掲します。

・相手に自分から「はい」と言わせて記録する

・第三者には「合意だった」と思わせる

・経済的・住居的依存で逃げ道を塞ぐ

・拒否したら罰を与え、従ったら報酬を与える

・被害者を「加害者」に見せる（DARVO）

・証拠を残さず、責任を回避する

大阪のケースでは、加害者たちはインターネットのアダルトサイト掲示板で知り合い、事件の数時間前に初めて顔を合わせ、「エス」「ゼット」「ボス」と呼び合って役割分担を決めていました。そして、20 代の女性がいるマンションに押し入り、包丁で脅したうえで集団的な性的暴行を加えました。暴行後、彼らは女性の身分証を撮影して職場や実家の住所を聞き出し、「他言すれば家族を殺し、動画もばらまく」と脅しました。そして、「同意書」と題した書面を書かせ、さらに暴行の様子を動画に収めました。



この手口の恐ろしさは、「同意書」という外形的な証拠が、後から「彼女は同意していた」という物語を作り出すために使われる点にあります。もし被害者が声を上げても、「ほら、同意書があるだろう」「自分で書いたんだろう」と言われる。動画も「楽しんでいた証拠」として使われる。しかし、包丁で脅され、家族を殺すと脅され、逃げ場をなくした状態で書かされた「同意書」は、同意ではありません。つまり、形式的な同意書や動画があっても、それが拒否困難な状況で取られたものであれば、同意として無効なのです。

第 38 章 3 節　「性行為における同意の偽装工作」の悪質さを段階表で理解する

Q. 性行為における「同意の偽装工作」の悪質さを、段階的に理解することはできますか？

はい、以下の段階表が参考になります。これは「どの権利が、どの程度、どの文脈で壊されるか」を見るための目安です。

「性同意の偽装工作」の悪質さ段階表

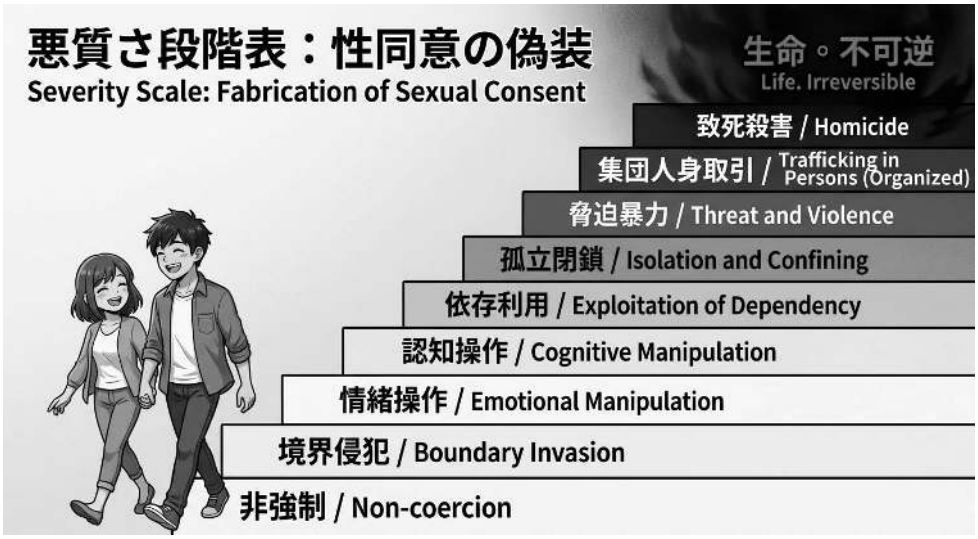
©オリオンヴェイル

段階	支配設計のタイプ	「無理矢理yes」の作り方	壊されるもの
0	非強制	交渉し、女性のNOを尊重し、撤回も尊重	なし
1	境界侵犯・疲弊	しつこく要求、不機嫌、罪悪感で押す	安心、境界、対等性
2	情緒操作	「愛してるなら」「別れる」「恩を返せ」と関係を人質に取る	情緒的安全、自己決定権
3	認知操作	ガスライティング、責任転嫁、拒否した事実の否定	現実認識、自信、拒否能力
4	依存・脆弱性の構造利用	経済・住居・仕事・在留・障害・看病・借金を握る	経済的・社会的自律、身体の不可侵
5	孤立・閉鎖・脱出封鎖	友人家族から遮断、監視、GPS、鍵、連絡制限	自由、安全、性の自己決定
6	脅迫・暴力・報復	殴る、殺す、裸写真拡散、家族に危害、自死脅迫	生命・身体・尊厳・性的不可侵
7	集団・組織・人身取引	複数加害者、顧客、会社、宗教、性奴隷的支配	人間性、自由、尊厳、生命基盤
8	致死・殺害	殺人、致死、遺体遺棄、証拠隠滅	生命。不可逆

©オリオンヴェイル

©オリオンヴェイル

第 38 章 4 節でも解説していますが、あくまで目安で、段階が低いから苦しみが軽い訳ではありません。



第 38 章 4 節　「性同意偽装の段階表」の被害の深刻さは？

Q. この段階表で、特に深刻なのはどの段階ですか？

段階 4 から 6 は、障害・経済的依存・閉鎖環境で、精神的・経済的に追い詰めて不同意性交を強要するケースに相当します。これは「性欲の暴走」ではなく、支配の設計です。障害や経済的依存は「同意が取りやすい」ではなく、同意を形成しにくく、拒否を困難にする状態であり、それを利用・創出することは、単なる性加害より悪質な支配的性暴力です。

さらに、計画性・反復性・隠蔽性・第三者を使った同意偽装があれば、段階 7 に近づく極めて悪質な支配的性暴力です。

気をつけて欲しいのは段階が低いからといって、被害の苦しみが軽いわけではありません。


彼女は同意していた
SHE CONSENTED
言い訳
否認
否認
これは性欲の暴走ではなく
支配の設計
THIS IS NOT ABOUT UNCONTROLLED LUST, IT IS ABOUT THE DESIGN OF DOMINATION.
逃げ場なし
監視
逃げ場なし
GPS
監視

第 39 章　加害者の悪質性段階――支配欲の強い男を見抜く目安

「性同意偽装の段階表」で悪質さを見てきましたが、逆に女性の立場からすれば、自分の意見を無視してレイプする男より、自分の意見を尊重してくれる男の方が安全で安心できるわけです。

・まともな男：性行為したい➡️断られる➡️性行為を諦める

・性加害男：性行為したい➡️断られる➡️性行為を強行してくる

加害男はあの手この手で規制や法律を掻い潜る犯罪者なので、なかなか難しいですが、ある程度見抜くための目安として「加害者の悪質さの段階表」を作成してみました。



「性同意偽装の段階表」で悪質さを見てきましたが、逆に女性の立場からすれば、自分の意見を無視してレイプする男より、自分の意見を尊重してくれる男の方が安全で安心できるわけです。

第 39 章 1 節　加害者の悪質さを見抜く段階表

あくまで、加害男は偽装工作が得意で偽装してきますが、見抜くための目安として「加害者の悪質さの段階表」を作成してみました。

Q. 加害者側の悪質さは、どのように評価すればいいのですか？

以下の段階表が、加害者の悪質性を見抜く目安になります。「悪質性の評価軸は、故意性・計画性・脆弱性の利用・脱出不能性・反復性・残酷さ・事後隠蔽」です。

加害者の悪質性段階表

©オリオンヴェイル

段階	加害者の悪質性	典型例	悪質性の核
0	非該当	同意ある成人間の行為	なし
1	無自覚・無責任	拒否を軽視、しつこい要求、酔った相手への確認不足	境界軽視
2	機会利用・自己正当化	弱っている相手に乗じる、「同意があった」と主張	自己中心性
3	意図的欺瞞・操作	結婚詐欺、避妊偽装、コンドームに穴、感情操作	情報操作
4	地位・依存の搾取	上司、教師、支援者、経済的依存、障害に乗じる	権力濫用
5	継続的支配・不同意性交強要	経済的・精神的に追い詰め、閉鎖環境、監視、連絡遮断	脱出不能化＋性暴力
6	集団・組織・人身取引・拷問	集団レイプ、強制売春、性奴隷、監禁	非人間化
7	致死・殺害	殺人、致死、遺体遺棄、証拠隠滅	生命の不可逆

©オリオンヴェイル
©オリオンヴェイル

第 39 章 2 節でも解説していますが、あくまで目安で、段階が低いから悪質で無い訳ではありません。



第 39 章 2 節　段階表で注意すべきなのは？

Q. この段階表で、特に注意すべきなのはどの段階ですか？

段階 3 から 5 にかけてが、最も「”見抜きにくい”危険地帯」です。

段階 3 の「意図的欺瞞・操作」は、一見すると「普通の恋愛」に見えることがあります。しかし、避妊偽装やコンドームに穴を開ける行為は、性交自体への同意があっても、生殖自律への同意を壊す重大な侵害です。段階 4 の「地位・依存の搾取」は、上司や教師、経済的支援者などが立場を利用するケースで、被害者は「自分が望んだ」と思わされやすい。

段階 5 の「継続的支配・不同意性交強要」は、経済的・精神的に追い詰め、閉鎖環境で逃げられなくして性交を強要する―これが、最も典型的な「”同意の偽装工作”による支配的性暴力」です。

気をつけて欲しいのは、あくまで目安で、段階が低いから悪質で無い訳ではありません。



第 39 章 3 節　意外と加害者は「道徳」を悪用する

Q. 加害者は、なぜ「道徳」を前面に押し出すのですか？

ここが、「勘違いして錯覚しやすい非常に重要なポイント」です。

性加害男は、「実際はモラルや道徳が著しく欠けている」のですが、性的搾取をする男たちには「”道徳的偽善”の傾向」があります。

「道徳を前面に出すことで、断れない状況を作り、”無理矢理 yes”と言わせる」のです。統一協会が宗教の仮面を被って金銭的搾取をしているように、性加害男も「”道徳”の仮面を被って性的搾取をする傾向が強い」のです。これもまさに、「”同意の偽装工作”による支配設計」なのです。



第 40 章　道徳的偽善――「敬虔な信徒」の仮面の下で

ここからが真の本題です。

実は大変興味深いことに、虐殺やレイプや略奪をするファシストたちは、「道徳や宗教」を前面に押し出して、「敬虔な信徒」の仮面をかぶっていることが多いのです。

実は、80 年前に東南アジア各地を侵略して植民地支配し、現地で暴行・略奪・虐殺を繰り返していた大日本帝国軍🎌は「軍規に厳しい軍隊」と自称して宣伝していました。

パレスチナ🇵🇸やレバノン🇱🇧で暴行・略奪・虐殺を繰り返しているイスラエル軍🇮🇱を、ネタニヤフは「世界で最も道徳的な軍隊」と自称して宣伝しています。

同じく西側の同盟国を含む世界中に侵略戦争を仕掛けているアメリカ軍も「世界の警察」を名乗っていました。

トランプを熱烈に支持するシオニスト🇮🇱としても有名な「キリスト教福音派」は「宗教活動に熱心な敬虔な信徒」の仮面をかぶっています。「歴代最も腐敗した大統領」と呼ばれるトランプ大統領を熱烈に支えている「キリスト教福音派」や「MAGA」たちも、また「歴代最も腐敗した首相」である高市政権を熱烈に支えている日本会議⛩や統一協会🏺も、「宗教活動に熱心な敬虔な信徒」の仮面をかぶっています。

また、ファシストとして世界的に有名な「ネトウヨ(日本のネット極右)」は「マナーが良くて礼儀正しい日本人を強調してアピール」しています。

もちろん、すべての宗教が悪いのではありません。しかし、暴行・略奪・虐殺やレイプを繰り返すファシストたちは、「道徳や宗教」を前面に押し出して、「敬虔な信徒」の仮面をかぶっていることが多いのです。その辺の現実と事実を踏まえて記事を読み進めてみてください。



第 40 章 1 節　なぜファシストは道徳や宗教を前面に押し出すのか？

Q. なぜ、ファシストは道徳や宗教を前面に押し出すのですか？

道徳や宗教を前面に押し出すことで、「”断れない状況”を作り出せるから」です。

彼らはまず、自分たちが「道徳的に正しい熱心なキリスト教徒」「日本の伝統文化や道徳や宗教を大事にする愛国者」というポジションを占めます。

そのうえで、相手に対して「道徳的に腐敗している」「愛国心が足りない」「あなたには●●が欠如している」というレッテルを貼って責め立てて、「罪悪感を植え付ける」のです。これが「道徳を支配の道具として使うという手口」です。



第 40 章 2 節　トランプ政権の道徳的偽善

Q. トランプ政権は、具体的にどんな道徳的偽善をやっているのですか？

トランプ政権は、キリスト教右派を全面的に支持基盤に据え、「信仰の自由」を守ると公言しています。しかしその実態は、道徳的腐敗の極みです。

・免罪符の販売： 　逮捕された金持ちに「大統領に働きかけて恩赦を与える」と持ちかけ、巨額の金を受け取る「恩赦ビジネス」。これはまさに、中世カトリック教会が「罪の赦し」を金で売った免罪符（インダルジェンス）の現代版です。
・エプスタインファイルの隠蔽：FBI と CIA が、富裕層や政治家が関与する小児性愛・性的人身売買の記録を揉み消す。
・私生活の腐敗：公には「キリスト教的価値観」を標榜しながら、私生活では薬物、不道徳な行為が蔓延。セント・クレア氏は MAGA 内部の有力者を「今まで会った中で最も道徳的に破綻した人々」と証言しています。

なぜこれが許されるのか？

それは、彼らが「信仰」を道具として使っているからです。

信仰は、大衆を動員するためのシンボルであり、本気で信じているわけではありません。だからこそ、平気で免罪符を売り、犯罪者を保護できるのです。



第 40 章 3 節　安倍政権の道徳的偽善

Q. 日本でも、同じ構造はありますか？

はい、日本でも同じ構造があります。

安倍派や日本会議は、道徳教育や愛国心教育を推進し、「日本人の誇り」を説きながら、「派閥ぐるみでキックバックによる裏金システムを築いて」いました。旧統一教会との関係も問題化し、政治家たちは「信仰の自由」を盾にしながら、実際には票と金のために組織を利用していました。

「滅私奉公」や「自己犠牲」「清貧」を説いて「道徳を他者に強要」する一方で、自分たちはそれを守らない。むしろ、「道徳や宗教を語ること自体が、自分の腐敗を隠すカモフラージュになっている」のです。



第 40 章 4 節　なぜ「ダブルスタンダード」が平気になるのか？

このような「道徳的偽善」を前面に打ち出すことにより、

・身内には甘く処分しない：暴行・略奪・虐殺やレイプを繰り返しても処分もしない ・敵には厳しい：些細な違反でも鬼の首を取ったように騒いで罪悪感を植え付けて支配する

ような支配構造を生み出す「ダブルスタンダード」ができます。

Q. なぜ「ダブルスタンダード」が平気になるのですか？

このような偽善がまかり通るのは、以下の心理メカニズムがあるからです。

・道徳的免責：バンデューラの理論。自分たちの行為を「正当化」「婉曲表現」「責任転嫁」することで、罪悪感を消す。 ・選民意識：「自分たちは特別だ。ルールは凡人を縛るものだ」という感覚。だから、自分たちは道徳の外にいると信じる。

・非人間化：被害者を「人間」ではなく「数字」「カモ」と見ることで、罪悪感が生まれない。

・集団同調と承認：仲間内で「英雄」と称賛されることで、行為が強化される。

・認知的不協和の解消：「信仰を守っている」という自己イメージと「犯罪を犯している」という現実の矛盾を、「我々は正義のためにやっている」という物語で解消する。

つまり、「嘘をつくこと自体が”信仰”の一部になってしまう」のです。

「詐欺師にとって、嘘は騙して儲けるための武器である」のと同様に、「ファシストにとって、嘘は罪ではなく、勝利のための武器」なのです。



第 40 章 5 節　MAGA を脱退すると偽善者たちが脅迫してくる構造

Q. イーロン・マスクと MAGA の関係も、この構造なのですか？

はい。セント・クレア氏の証言が明らかにしたのは、この偽善が組織的に構築されたシステムだということです。MAGA が表向きに語る聖書に忠実な「キリスト教的価値観」とは異なり、私生活では暴力、薬物、性加害やレイプなど不道徳の極みであることを明らかにしています。そして、イーロン・マスクのような金持ちたちは、その矛盾を隠蔽工作するために、配偶者や身内の家族に、NDA で生涯の沈黙を要求しているわけです。MAGA の有力者たちやマノスフィアを「今まで会った中で最も道徳的に破綻した人々」と評価するのが正しいのです。



MAGAやカルトの「道徳的偽善」

©オリオンヴェイル

項目	内容
MAGAのカルト構造	若手インフルエンサーを「演者」として育成。ドーパミン報酬系と社会的・経済的依存で離脱を困難にする。
道徳的偽善	表向きには「キリスト教的価値観」、私生活では暴力、薬物、不道徳。
マスクの沈黙買収	4000万ドルのNDAで生涯の沈黙を要求。セント・クレア氏は拒否。
選挙干渉疑惑	X_AIの行動推論モデルを用いた、既存法規制が及ばない選挙操作の可能性。
法規制の空白	宇宙技術やAIモデルに対し、無法状態のやりたい放題で現在の法体系は全く対応できていない。

©オリオンヴェイル

©オリオンヴェイル

【真実を語ること選ぶ】

セント・クレア氏は 4,000 万ドルを拒否し、真実を語ることを選びました。

しかしその代償は、自宅周辺に不審者が毎日現れ、子供の学校や野球の試合にまで押しかけ、家族や関係者へのハラスメントが行われるという、組織的な脅迫でした。

つまり、自分たちの嘘がバレないように、告発者や被害者を黙らせるために、本人だけでなく、本人の周りの人にも圧力や脅迫をして、加害者を特定できないような形で組織的に脅迫し、「同意の偽装工作」によって「”黙らせる仕組み”を作り上げている」のです。



第 41 章　世界中にバレた日本人の道徳的偽善の嘘

第 41 章 1 節　日本にも蔓延する「日本すごい」と「道徳的偽善」

Q. 日本にも、道徳的偽善の嘘はあるのですか？

あります。そして、それは海外からも見抜かれています。

YouTube 動画や日本のテレビで流され続ける「日本人は礼儀正しい」「日本人はマナーが良い」「日本人すごい」―こうした言説は、日本のファシストたちが国内外に向けて流し続けてきた自己賛美のプロパガンダです。「選民思想を植え付け」「加害を正当化する」ために仕掛けられた「洗脳工作の一種」「プロパガンダ」だと言えます。その実態を見ていきましょう。



第 41 章 2 節　日本にも蔓延する「道徳的偽善」の具体的事例

Q. 具体的には、どんな「嘘」があるのですか？

「ネトウヨの日本人は礼儀正しい」の嘘：
ネット上で差別的・攻撃的な書き込みを繰り返す人々が、現実では「礼儀正しい日本人」を演じる。しかし、その「礼儀正しさ」は、目上の者や自分より強い者に対してのみ発揮される権威主義的な従順さであり、弱い立場の者や外国人に対しては、排除と差別の態度を向けます。
これは、戦前の大日本帝国が「天皇に対しては忠誠、アジアの人々に対しては暴力」という二重基準で動いていた構造とまったく同じです。



「ネトウヨの日本人はマナーが良い」の嘘：
電車の中で静かにしていることを「マナーが良い」と呼ぶ人々が、同じ電車の中で外国人観光客に暴言を浴びせたり、ヘイトスピーチを行ったりする。マナーとは、特定の集団に対する「作法」に過ぎず、人間としての基本的な尊厳の尊重とは別物です。



「日本人すごい」の欺瞞：
日本の技術力や文化を賛美すること自体は問題ありません。しかし、それが「日本人は特別だ」「日本人は選ばれた民族だ」という選民思想に転化したとき、それはファシズムのイデオロギーになります。
戦前の「八紘一宇」「大東亜共栄圏」というスローガンが、アジア侵略を正当化するために使われたことを忘れてはなりません。



第 41 章 3 節　なぜ「道徳的偽善」が日本中に蔓延するのか？

Q. なぜ、こうした「日本人すごい」という言説が広まるのですか？

それは、国民の不満をそらし、感覚を麻痺させるための麻薬だからです。

経済が停滞し、生活が苦しくなり、将来への不安が募る中で、「日本人はすごい」「日本は素晴らしい」と言われれば、一時的に自尊心が満たされます。また、ベトナム人や中国人、在日朝鮮人など、誰かを責めて叩き潰すことで、「何か問題を解決した」という「錯覚を得ることもできます」。

しかし、それで「問題が解決することはありません」。国民の不満は減らず、むしろ「現実から目を逸らすための麻薬として機能し続け」ます。

そして、この「無駄に高いだけで役に立たない自尊心」は、物質的な貧困を覆い隠すための「心理的賃金」に過ぎません。「本当の原因―富裕層への富の集中、政治の腐敗、経済政策の失敗―から目を逸らさせるための道具」なのです。

さらに、この「日本人はすごい」という選民意識を植え付けることで、その一方で中国人や韓国人、東南アジアの人々を見下す感覚が生まれます。

その結果、次節で紹介する様な技能実習生に対する奴隷的労働や性的搾取、あるいは東南アジアの貧しい少女への児童買春など、彼らを騙して搾取しても「道徳的免責」を得ようとする浅ましい了見が生まれるのです。



第 41 章 4 節　日本国内で「道徳的偽善」を語りながら搾取している具体事例

Q.「道徳的偽善」が、実際にどのような搾取につながっているのか、具体的な事例を教えてください。

「日本人は道徳的だ」「日本人は礼儀正しい」という自己イメージは、単なる思い込みではありません。

それは、「自分たちの搾取行為を正当化し、罪悪感を消すための”免罪符”として機能」しています。ここでは、その免罪符が実際にどう使われ、どんな被害を生んでいるのか？を、日本人が見下す東南アジア人に対する 2 つの事例で見ていきます。

一方で「日本すごい動画」では、欧米の白人女性に「日本すごい」「日本人素晴らしい」と言わせるものが多いことから、「欧米の白人に対してはやらないのが卑怯な日本人の特徴」です。



第 8 章 4 節 1 項　事例①：技能実習生のパスポート没収と奴隷的労働―「国際貢献」の名の下の搾取

技能実習制度は建前上、「途上国の青壮年に日本の技術を教える国際貢献」とされています。しかし「実態は外国人労働者を安価に受け入れるための制度」であり、「深刻な人権侵害が繰り返されて」きました。しかも、改善せずに何度も繰り返すところを見るとバレたのは運が悪かっただけ、のように経営者たちは反省はしていないことが伺えます。

長崎県島原市の縫製工場で働いていた中国人実習生 5 人が、未払い賃金と損害賠償を求めて長崎地裁に提訴しました。訴状によれば、実習生たちは研修期間中から最低賃金にも満たない時給 300 円で長時間残業させられ、さらにパスポートや印鑑を取り上げられる人権侵害を受けていました。弁護団はこの制度の実態を「奴隷労働」だと批判しています。同様の裁判は全国で 21 件以上係争中であり、これは一部の悪質な事業所の問題ではなく、制度そのものに構造的な欠陥があることを示しています。

パスポートを取り上げることは、「”逃げられない状態”を作り出すための最も効果的な手段」です。技能実習生は来日のために多額の借金をしており、帰国すれば返せなくなります。「パスポートを没収されれば、合法的に国外に出ることもできず、実質的に監禁状態に置かれる」のです。法務省も「パスポートの取上げ、賃金不払い等の重大な人権侵害行為」を繰り返し指摘し、2016 年の法改正で罰則を強化しましたが、「改正法施行後も上記実態は全く改まっていない」と日本弁護士連合会は指摘しています。



「国際貢献」という言葉は、「搾取を隠すためのカモフラージュとして機能」しています。本当に国際貢献が目的なら、なぜ実習生たちは最低賃金以下で働かされ、パスポートを取り上げられるのでしょうか？

貧しいアジア人を雇って恵んでやっていると日本人経営者が思い込んでいるなら、思い上がりです。

第 8 章 4 節 2 項　事例②：技能実習生への性的暴行―「同意していた」という偽装

2024 年 12 月、栃木県内のイチゴ農園で働いていたカンボジア人技能実習生の女性 3 人が、農園の男性経営者（58）から繰り返し「性的暴行」を受けたとして、約 9200 万円の損害賠償を求めて東京地裁に提訴しました。

原告の一人である 23 歳の女性は、2022 年に働き始めた農園で経営者から性的暴行を受け、「”誰かに話せば帰国させる”と脅された」と訴えています。その後「妊娠し、十分な説明がないまま中絶手術を受けさせられ、2023 年 4 月に保護されるまで暴行が続いた」と説明しています。女性は心的外傷後ストレス障害（PTSD）を負ったとされています。

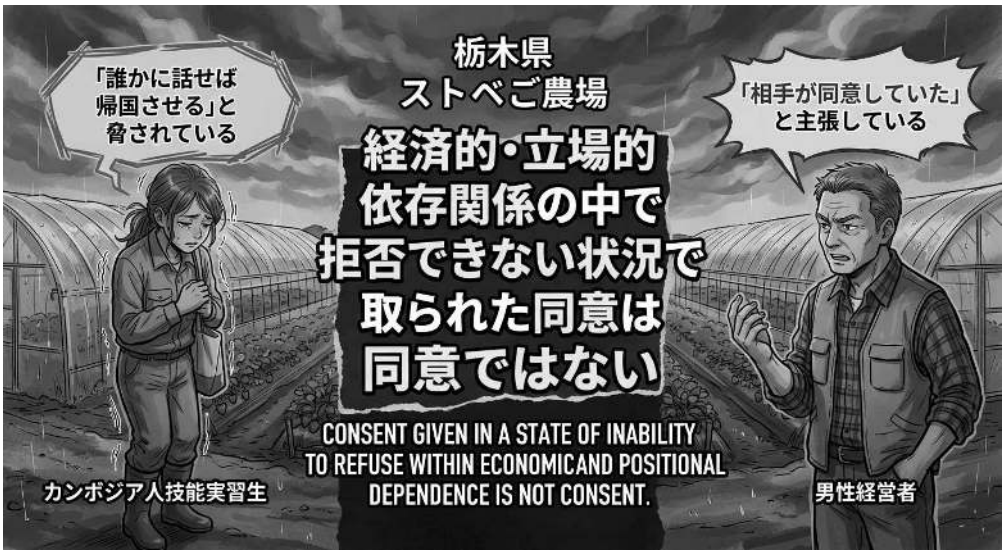
経営者の男性は「相手が同意していると思っていた」として、「争う姿勢を見せて」います。しかし、「性行為を”断れば帰国させる”と脅されていた状況で、本当の同意があり得るでしょうか？」技能実習生は来日のために借金をしており、帰国させられれば返せなくなります。仕事を失えば、生活基盤そのものが崩壊します。

つまり、これは「”同意の偽装工作”そのもの」です。

経営者は「相手が同意していた」と出張することで、自分の行為を「”合意の上の性行為”に見せかけようとしている」のです。しかし、経済的・立場的依存関係の中で、拒否できない状況で取られた「同意」は、同意ではありません。

経営者はおそらく、政府や日本会議⛩に洗脳されたネトウヨで、自分を「道徳的な日本人」だと思っているでしょう。もしかしたら、外面が良くて地域社会でも「真面目な農園主」として認識されているかもしれません。

しかしその裏で、自分に雇われ、弱い立場にある外国人女性を、繰り返し性的に搾取していたのです。「自分は悪い人間ではない」「相手も同意していた」―そう信じることで、罪悪感を消し、行為を正当化しているのです。しかし、「話せば帰国させる」という脅しは、明白な強制であり、同意の対極にあるものです。



第 41 章 5 節　海外で「道徳的偽善」を語りながら少女から搾取している具体事例

Q. 海外では、どのように「道徳的偽善」が搾取の免罪符として使われているのですか？

日本国内での搾取とまったく同じ構造が、海外でも繰り返されています。

しかも、相手が貧しい東南アジアの少女となれば、経済格差と権力の非対称性はさらに極端になります。「日本人は道徳的だ」という自己イメージは、そうした「圧倒的な非対称性を覆い隠すために、最も強力な”免罪符”として機能する」のです。

第 41 章 5 節 1 項　事例①：SNS 上での「戦果」自慢と隠語―「少女が自ら応じた」という物語の捏造

X（旧 Twitter）などの SNS では、東南アジアでの児童買春を自慢する投稿が後を絶ちません。「17 歳に生中出しをキメました。歳はどうでも良いが結構美少女だった」「チープカシオやキーホルダーでラオス人少女を釣って NN」といった書き込みが確認されています。

ここで使われる「NN」は「”中出し”の隠語」です。「200k」は 20 万ルピア（約 1800 円）を指し、少女を買う金額が公然とやり取りされています。少女を「生体オナホール」と呼び、人間扱いしない投稿すらあります。

なぜ、SNS に投稿するのか？

それは、加害者自身が「”少女が自ら応じた”や”喜んでいた”という物語を捏造」し、拡散しているからです。しかし、「チープカシオやキーホルダーで釣られる少女は、貧困のあまり他に選択肢がないだけ」です。「自分から来た」と言わされている少女の姿を、「”自発的同意”にすり替えている」―これこそが、道徳的偽善による搾取の正当化です。



第 41 章 5 節 2 項　事例②：「指南書」の流通―搾取を「マニュアル化」する免罪符

こうした犯罪は「個人の思いつきではなく、組織的・継続的に行われて」います。エプスタインファイルのようにどこぞの諜報機関🇺🇸🇮🇱🇬🇧が関わっている可能性もあります。

2025 年 8 月、愛知県警は名古屋市の無職・宇治●彦容疑者（65）と、大阪市の歯科医師・白井●宏容疑者（60）を児童ポルノ禁止法違反などの疑いで逮捕しました。2 人は 2 か月ごとに東南アジアへ渡航し、1 回あたり数日から 2 週間滞在して、ラオスやミャンマーで 18 歳未満の少女を買春し、わいせつな姿を撮影していたとみられています。

2 人は売春施設の場所などが書かれた「”指南書”をインターネットで購入」し、参考にしていたことが判明しています。白井容疑者の押収品からは、わいせつな動画や画像が 1 万点以上見つかりました。

白井容疑者は「18 歳未満とは知らなかった」と話していますが、「”指南書”を自ら購入していた事実が、その言い訳を自壊」させます。少女を買うための知識を積極的に収集していたことこそ、「少女からの性的搾取を”計画的な行為”として自ら選んでいた証拠」なのです。



第 41 章 5 節 3 項　事例③：医師や教師という立場を利用した買春―「ただの趣味」という自己正当化

白井●宏容疑者は歯科医師でした。彼は「ただの趣味」と供述していると報じられています。

「ただの趣味」―この言葉に、道徳的偽善の核心があります。

社会的に信頼される職業に就き、地域でも「真面目な人」として認識されている人物が、自分より「圧倒的に弱い立場にある少女たちを、金の力で買っている」。そして、それを「”ただの趣味”と呼ぶこと」で、「自分の行為を”道徳的に中立な嗜好”にすり替えている」のです。

同様の事例は過去にも繰り返されてきました。横浜市立中学校の元校長が 25 年間でフィリピン人の女性 1 万 2 千人以上を買春し、そのうち約 1200 人が 18 歳未満だった事件、2022 年には 34 歳の実習医師が 1 対 7 の乱交パーティーで未成年と性行為に及んだとして逮捕された事件もあります。

「社会的地位の高い日本人が、その立場と資金力を利用して海外でこっそり少女を性的搾取している実態が浮き彫り」になっています。



因みに、「女性の日常を壊す憎悪テロ"マノスフィア"入門　第7巻 ～裏切り女––寄生する「勝ち組」という幻想と、反省なき加害者に甘い構造がファシズムを生むまで～」の「日本と違い「未成年者への性犯罪」に厳しいアメリカ人」で解説したように、性加害や性犯罪は多いアメリカ🇺🇸ですが、

児童ポルノにはとても厳しい社会です。　この手のロリコン大好き日本人男はメチャクチャ嫌われます。

第 41 章 5 節 4 項　事例④：YouTuber による斡旋―「道徳的偽善」をビジネス化する

タイ在住の日本人 YouTuber「NABEchannel（ナベチャンネル）」こと大畑●也に対し、児童買春への関与や斡旋を告発する投稿が拡散し、批判が殺到しました。

告発によれば、大畑は「ロリナベ」を名乗り、ラオスで日本人客に買春を斡旋していたとされています。彼の SNS 投稿には「ナベちゃんアテンドはプレイ内容まで交渉します」「NN（生中出し）希望の方はサポートもします」と記されており、単なる情報発信にとどまらず、具体的な性的サービスの手配まで行っていたことが示唆されています。さらに、「9 歳の女児を匂わせる投稿があったことも指摘」されています。

斡旋者の役割は、「”同意の偽装”をシステム化すること」です。

「この人に言えば少女と会って買春できるというネットワーク」を作り、「”少女たちは自分から求めて来ている”という物語(ナラティブ)を顧客に共有する」のです。

例えば、少女買春の業者は顧客に対し、行為を正当化するために以下のような罪悪感を消す物語（ナラティブ）を提供します。

「家族に送金している。これは善意だ」

「私が金を払わなければ、家族全員が路頭に迷う」

「貧しいから仕方なくやっているのを、私が経済支援してあげている」

「この子の夢を応援して、学校に行かせるために金を出している」

業者が提供するのは、搾取を慈善事業にすり替えることです。

「金を払っているのだから搾取ではない」「むしろ助けている」という論理で、加害者の罪悪感を消し、児童買春行為を正当化します。しかし、本質はこうです。

性行為と引き換えの支援は、教育支援でも慈善事業でもありません。それは、貧困と権力の非対称性を利用した条件付きの搾取です。本当に支援したいのなら、性行為を条件にしない生活支援や教育支援をすれば良いのです。それをしないのは、「”支援”が建前で、本当の目的が児童との性行為だから」です。

つまり、これらの物語はすべて、搾取を隠すための免罪符に過ぎません。
そして、顧客たちは「自分は騙していない」と信じ込んで、罪悪感なく少女買春の行為に及べる。斡旋者は「加害者たちの罪悪感を消すための”免罪符販売業者”」なのです。



第 41 章 6 節　まとめ：道徳的偽善が搾取の免罪符になる構造

Q. これらの事例に共通する構造は何ですか？

国内・海外の搾取事例に共通するのは、「”自分たち日本人は道徳的だ”という自己イメージ」が、「搾取行為の免罪符として機能しているという構造」です。

第一に、加害者たちは「自分は道徳的だ」「悪い人間ではない」という自己

イメージを持っています。

歯科医師、元校長、YouTuber など社会的に「まとも」とされる立場にいながら、その裏で最も弱い立場の者を搾取している。ラオスでの児童買春では「貧しい少女を助けている」、技能実習生のパスポート没収では「国際貢献」、技能実習生への性的暴行では「相手も同意していた」という主張が、罪悪感を消し、行為を正当化します。

第二に、「相手が自発的に応じた」という物語を補強する装置が存在します。

SNS での「戦果」自慢、「指南書」、斡旋者、同意書や動画―これらはすべて、搾取を「合意の上の行為」に見せかけるための道具です。しかし、その物語は最初から貧困と権力の非対称性によって作られた虚構に過ぎません。

第三に、加害者たちは「逃げられない状態」を意図的に作り出しています。

借金、家族への脅し、経済的依存、パスポート没収、「帰国させる」という脅し―これらはすべて、相手から「拒否する自由」を奪うための手段です。

そして、こうした搾取の背景には、「日本人は特別だ」「日本人は選ばれた民族だ」という選民思想があります。

選民思想は「自分たちは道徳的に優れている」という思い込みを生み、それが「”彼らを搾取しても構わない”という”道徳的免責につながる”」のです。

「道徳的偽善」は、こうした搾取を「善意」や「趣味」や「国際貢献」という言葉で覆い隠す、最も卑劣な免罪符です。

本当の道徳とは、他者に強要することではなく、自分自身が守ること。そして、弱い立場の者を搾取しないことです。しかし、「道徳的偽善に浸った者たちは、意図的に道徳を支配と搾取の道具に変えてしまっている」のです。



第 41 章 7 節　なぜ最も道徳的に欠如したファシストが道徳を語るのか？

Q. 最も道徳に欠けるファシストが道徳を語る―この矛盾はどう理解すればいいのですか？

これこそが、「ファシスト政権やファシストたちのビジネスモデルの核心」です。彼らは「道徳や正義で偽装」し、「”道徳”を支配や搾取の道具として使って」います。

シオニスト、キリスト教福音派、統一協会や日本会議、国家神道などファシズム国家では「善悪が逆転したカルトが暗躍する」のは、それが「支配の道具として機能するから」です。

道徳を語ることで、国民に「従わなければならないという罪悪感を植え付け」、「断れない状況を作り出す」。そして、「ダブルスタンダード」で自分たちは道徳の外にいて、好き放題に搾取する。自分は謝らず、相手には謝らせる―これが「ファシストたちが、ダブルスタンダード思考になる仕組み」なのです。

要するに「看板と中身が全く真逆なわけ」です。
だからこそ、まんまと騙される人が大量に発生するのです。



第 42 章　「同意の偽装工作」に騙されないために

第 42 章 1 節　「同意の偽装工作」に騙されないためには？

読者もだんだん見えてきたと思いますが、騙されない完璧な方法はありませんが、騙されないためのヒントはいくつかあります。

Q. この「同意の偽装工作」に騙されないためには、どうすればいいのですか？

以下の問いを、常に自分自身に問いかけてください。

・拒否したら安全か。

・一度言った yes を撤回できるか。

・第三者に堂々と言えるか。

・依存関係を握られていないか。

・情報を隠されていないか。

・周囲が加害者側に偏っていないか。

・訴えた時に報復や信用破壊が起きないか。

・「誰がやったか」を意図的に分からなくしていないか。

第 42 章 2 節　「同意の偽装工作」の被害に遭っていたら？

Q. もし、自分が「同意の偽装工作」の被害に遭っていると気づいたら、どうすればいいのですか？

巧妙な手口で集団で隠蔽工作するシステムなので、完璧な方法はありませんが、抜け出すためにいろいろ試行錯誤してみることは大事です。

一人で抱え込まないことです。

そして、「まんまと騙されて”自分が悪い”と思わないこと」です。どれほど巧妙でも、自由な拒否、撤回、対等性、情報開示、安全がない「yes」は同意ではありません。まずは、相談したり、洗脳を紐解ける信頼できる人を見つけてください。



第 42 章 3 節　卑劣なファシストは「反省しない」

Q. なぜ卑劣なファシストは「反省しない」のでしょうか？

これまで見てきたように、卑劣なファシストや詐欺師たちは「決して反省」して「罪を償おう」としません。80 年前の大日本帝国の加害者たちは、あの手この手で自己正当化する言い訳を続けて、80 年後に日本でファシスト政権を復活させました。いかにファシストたちが「決して反省」して「罪を償おう」としないか？、象徴する出来事であり、理解できる事例だと思い

ます。そして、彼らはイーロン・マスクやトランプなどのように、逃げたり隠蔽工作するために手段を選びません。



一方で、騙されて加害に加担してしまって、反省して償うアシュリー・セント・クレア氏やタッカー・カールソン氏やキャンディス・オーウェンズ氏のような人もいます。もちろん、「フォーポロジー」で嘘でないか？は疑われ続けるでしょうが、恐らく乗り越えるでしょう。

本当の強さとは、強要された謝罪を拒否し、しかし自発的な反省は行い、具体的な償いをする力です。アシュリー・セント・クレア氏が示したのは、まさにその姿でした。彼女は 4,000 万ドルの NDA を拒否し、支配に屈しなかった。しかし同時に、自分が過去に傷つけたコミュニティに対しては、自発的に謝罪し、償いを始めたのです。

謝るべき相手に謝り、謝らせるべき相手には屈しない。これが、支配構造の中で人間の尊厳を守る、唯一の道です。そして、善悪が逆転した世界においても、この原則だけは失ってはなりません。

なぜなら、「それが、人間が人間であり続けるための、最後の砦だから」です。

あとがき

ここまで読んでくださった方に、心からお礼を申し上げます。

本巻の第 4 部では、**西側の金融エリートたちの思考回路と価値観がどのように選民思想に結びつき、最終的にファシズムへと至るのか？**——その心理メカニズムと変化過程を、具体的な事例とデータとともに追ってきました。

そして、その思考回路が MAGA やネトウヨのような「**エコーチェンバーの中で増幅され**」、普通の若者を「平気で残虐なことをするファシストに変えていくプロセス」までを解き明かしました。「**西側の金融エリートたちが作り出すファシズムの真の仕組み**」がの全体像が見えてきたと思います。

「勝つこと」自体が権利意識を高め、不正行為を正当化する。

成果主義が「非情・冷酷・無責任」を報酬で報いる。

ダーク・トライアドの特性を持つ人間が構造的に有利になり、優しい人は排除されていく。

そして、**「非情の哲学」が成功条件として美化**され、**弱者や女性の搾取が「当然」と見なされるようになる**——これが、**金融エリートの思考回路が選民思想へと傾いていくプロセス**です。

そして、興味深い事に、この構造は決して不変ではありません。

アシュリー・セント・クレア氏のように、4,000 万ドルの口止め料を拒否し、「**真実を語ることを選んだ人もいる**」のです。本当の強さとは、市場で勝つことだけではなく、「**自分が出した影響に責任を持ち、弱い立場の人を尊重できること**」なのです。

また本巻の第 5 部では、「同意の偽装工作」というファシストたちが最も得意とする支配技術の全体像を、具体的な事例とともに解き明かしてきました。

特攻隊の「志願」、AV 出演の同調圧力、統一協会の念書、集団レイプの同意書、技能実習生への性的暴行、東南アジアでの児童買春―これらはすべて、

「拒否できない状況を設計し、表向きの同意を偽装し、被害者を"自ら望んだ"ことにして黙らせるという同じ構造」を持っています。

そして、最も恐ろしいのは、加害者たちが「道徳」を武器に使うということです。「敬虔な信徒」「愛国者」「道徳的な日本人」という仮面をかぶりながら、その裏で最も弱い立場の者を搾取する。この「善人に見せかけながら裏では騙して搾取する」が、「ファシズムの核心」なのです。

しかし、希望もあります。アシュリー・セント・クレア氏のように、4,000万ドルの口止め料を拒否し、MAGA の仕組みや儲ける仕組みなどの「真実を語ることを選んだ人もいる」のです。

本当の強さとは、市場で勝つことだけではなく、自分が出した影響に責任を持ち、弱い立場の人を尊重できることです。謝るべき相手に謝り、謝らせるべき相手には屈しない―それが「人間が人間であり続けるための最後の砦」なのです。

ファシズムは決して過去の遺物ではありません。それは、金融エリートの思考回路がエコーチェンバー内で増幅され、軍事・情報・金融の複合体に守られながら、今この瞬間にも再生産されているのです。そして、私たち一人ひとりが、その構造に気づき、声を上げ、連帯し、制度を変えていくことが、ファシズムを止める唯一の道なのです。

本書は皆さんが知らない「ファシズムの加害手法を紹介」していますので、興味があれば、次巻以降もぜひ続けてお読みください。

2026 年 9 月

オリオンヴェイル